

春日部探偵社へようこそ

断空我

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

転生者によって普通ではなくなった世界。

日本の混沌都市、春日部シティでは奇怪な時間が当たり前のようになっている。

何か起こった場合、人々が駆け込む先は決まっていた。

「ようこそ、春日部探偵社へ」

これは世界が混ざったことで集うようになったメンバーの愉快、かつ大変な物語である。

目次

第一話：ようこそ春日部探偵社へ	1
第二話：破壊の手	17
第三話：護衛の依頼	28
第四話：欲望の転生者	49
第五話：再会と彼らの始動	73
第六話：拳と銃と剣	89
登場人物	101
第七話：遊び心	106
第八話：最悪な再会	115
第九話：優しい者	128
第十話：強き者と防人	137
第十一話：トレジャーハンターみさえ	175
第十二話：予期せぬ来客	191
第十三話：デユランダルと複数のコンボ	202
第十四話：迷える子羊と最強のさすらい	225
第十五話：病院と語り	250
第十六話：動き出すフィーネ	262
第十七話：今回の黒幕	287

第一話：ようこそ春日部探偵社へ

白い空間。

「では、これでいいんですね？」

そこで白い衣装を纏った絶世の美女と小太りの男がいた。

男の足はうっすらと透けており、生きていないことを明らかにしている。

女性の問いかけに小太りの男はニヒヒと不気味な笑みを浮かべた。

「ああ、これで俺がオリ主になれるんだ！ヒヒヒッ！」

「では、飛ばしますよ」

パチンと女性が指を鳴らすと男の姿は元からなかったかのように消え去る。

「フッフ」

男がいなくなり、女性は笑みを浮かべる。

普通なら見る者を虜にする力を持つていただろう。だが、実際は違う。

左右の端まで伸びた口は三日月のように歪めていた。

「ああ、これでまた世界が混沌になった。いくら沢山の『ヒーロー』が生まれたとしても、混沌は加速していく。どれだけ抗つても止まることはない、ねえ」

誰もいない空間、しかし、誰かへ語り掛ける様に言葉を紡ぐ。

「私からは絶対に逃げられないわよ。貴方の魂、みつけたら潰して、殺して、必ずここへ連れ戻してあげる。そうしたらあ」

——永遠に愛してあげるから。

春日部シティ。

元は日本の春日部市だったものがいつからか変わってそう呼ばれるようになった。

人外が当たり前のように跋扈する魔境のようなどころになっている。

過去の時代に名をさせた英雄や魔女が当たり前のように存在している場所。

そこが春日部シティだ。

春日部に有名なデパート、サトーココノカドウがあれば、警察は春日部国際警察と呼ばれる組織になっていたりとにかく、この街で普通の常識というのは通用しない。

別の世界線ならば平凡なサラリーマンな男性なのに、今は刑事をやっていたり、三段腹の主婦がトレジャーハンターをしていたり、そして、嵐の幼稚園児と呼ばれる彼がとある探偵社に出入りしていることなどが最早、常識。

それが春日部シティ。

「全く、朝から頭が痛い事件だ」

春日部国際美術館。

その入口には数台のパトカーが停車しており、周囲は立ち入り禁止のテープが広がっている。

手袋を装着しながら春日部国際警察課長の呉島貴虎は現場に入っていく。

「おはようございます。呉島課長」

「野原係長、現場はどうなっている？」

「はい、昨夜未明、この美術館で泥棒が入り、奥に展示されていたダイヤが盗まれました」

「ダイヤ？」

「はい、何でもそのダイヤは海外の小さな国から借り受けていたものらしいんです」

「そんな話、我々のところへ報告が来ていないぞ」

「はい、どうやら密かにやり取りしていたらしくて」

「盗まれて国際問題になり責任を取らされるのも困るからこちらへ連絡してきたという事か」

「おそろく……」

野原ひろしの報告を聞きながら呉島貴虎は奥の展示スペースへ足を踏み入れる。

「盗んだ犯人については？」

「監視カメラに顔が残されていました」

ひろしが写真を貴虎へみせる。

全体的に黒づくめだが、カラスを模したシルエット。

「カラス男、国際的に指名手配されている盗人です」

「……これは難航するだろうな」

「ああ、あと、課長へ報告しておかないといけないことがあります」
「なんだ？」

嫌な予感めいたものを感じながらも貴虎は尋ねる。

ひろし自身も言う事に抵抗があるのか、おずおずと話を切り出す。
「美術館の館長が、今回の事態に焦って、その、探偵社へ依頼をだして
います」

「……………最悪だな」

広い空間。

美術展示広場と思われる場所へたどり着いた貴虎がみたもの、それは。
「死にたい、の？」

「悪かった、悪かったからその拳を下ろせ……美女の裸体へ目移りしたのは男として当然のサガであって……悪かったから拳を下ろせ、な？な？」

ある絵画の前で今にも人を殺しそうな光のない瞳で拳を振り上げている少女と必死に両手を挙げて降参のポーズをとっている白髪交じりの黒髪をした青年。

「東郷!!」

貴虎の叫びに両手を上げていた青年が振り返る。

「ああ、どうも、呉島課長」

「貴様がどうしてここにいます。いや、言わなくていい……依頼を受けたという事はわかっています。だが、誰の許可を得てここへ立ち入っている？現場検証中だぞ」

「鑑識の人が、許可くれたよ」

マフラーで口元を隠している少女がぼつりと答える。

「おっほほーい、あれ、父ちゃん？」

「しんのすけ?!お前、何でここに？」

両手を振り回しながら現れたのは赤いシャツに黄色いズボンをはいたジャガイモ頭の少年。

野原しんのすけ。

野原ひろしの息子である。

「母ちゃんがひまと一緒に海外へ行っちゃったからジンさんのところでお留守番、みてみて、アクション仮面カードNo. 36だゾ！」

嬉しそうにお菓子のおまけカードをみせるしんのすけへひろしは頭を痛める。

「子供まで連れてきたのか」

「御守頼まれたので……あと、ここへ呼び出されたのは依頼の内容を美術館長から聞いたためですよ。電話で済みましたかったんですけど、ここまでこいって」

やれやれと肩をすくめる青年こそ、様々な意味で名高い春日部探偵社の探偵、東郷ジン。

「全く、国際警察である我々にろくに話もせず探偵社を雇うとは……」

「ところで呉島課長、盗んだ犯人がカラス男っていうのはマジですか？」

「監視カメラの映像を照合中だ。確証はない」

「そうっすか」

「こちらも最低限の情報を提供する。お前達も何か得たらすぐに我々へ知らせろ」

「了解です」

短いやり取り。

ジンと貴虎は別の通路へ向かう。

「さて、館長さんとお話して動くぞ」

「ホーイ」

「わかった」

「あ、響としんのすけは美術館を見学しとけ」

「え〜！オラも行きたい〜」

「私も」

不満の表情を浮かべる二人。

ジンはため息を零しながら懐からあるものを取り出す。

「ほら、しんのすけにはチョコビ、響には……今度、買い物とか付き合っただけから」

「わかった、行くよ。しんのすけ」

「ブツラジャー！」

走っていく二人の姿を見送ってジンは端に立っている館長へ声をかける。

「すみません、騒がしくて」

「いえいえ、元気なのは良いことです。早速ですが、依頼の話を」

「ええ、盗まれたのはダイヤだとか」

「はい……バルベルデという国から借り受けた特別なものでして、必ず取り返してください。さもなければ国際問題に発展しまして……その」

「戦争になるとか？」

「いや、その」

ジンの言葉に冷や汗を流す館長。

大きな声で笑いながらジンは肩をすくめる。

「依頼は引き受けました。春日部探偵社にお任せを、依頼は必ず完遂します。俺達は悪いことをする奴らを許さないんで」

「助かります！」

頭を下げた館長と別れてジンは外に出る。

「……遅い」

美術館の外にでると襟足が広がったボブカット、揉み上げのこめかみ辺り左右に髪留めをつけているが、それらは灰色のパーカーのフードで隠れてしまっている少女が文句を言う。

「しんのすけは？」

「ナンパ」

「あ、そう」

ジンは歩き出す。

その少し後ろを響はついていく。

「依頼は受けたの？」

「ああ、宝石の回収」

「ふうん」

「嫌ならついてこなくていいぞ？」

「行く」

即座に答える響にジンはため息を零す。

「無茶はするなよ」

「ジンも同じ」

「まあ、否定はしないな」

小さく笑いながら歩いてきた二人のところへしんのすけがやってくる。

「なにになにい？ いけないお話い？」

「仕事の話だ。さて、行くか」

「いきますかあ〜」

「……どこ行くかわかっているの？」

「全然！」

胸を張るしんのすけに響はため息を零す。

「カラス男の情報を持っていそうな奴のところに行く」

ジンの言葉に響はうえーという顔をした。

「あのバカかあ」

「レッツゴー！きゆうりのぬかづけえ〜！」

「おっしやく〜」

しんのすけ達と共にジンは歩き出す。

OREジャーナルというモバイルニュース配信会社がある。

フットワークが軽い報道をモットーとしており、真のジャーナリズムを追求している会社であり、地元の小さなニュースもあれば、ツヴァイウィング第二の悲劇という記事からグローバルフリーズの裏etcを世間へ流している。

そんな彼らを情報源としてジンは利用していた。

情報を得る代わりにこちらが持っている情報を提供する。ギブアンドテイクが本来なのだが――。

「ジン！お前からもらった情報！どんぴしゃだったぜ！令子さんと一

緒に色々なことを調べて、政府の連中も顔真つ青だったんだよなあ。いやあ、みせたかったよお！」

「……コイツ、うるさい」

「いやあ、真司さんは絶対調ですなあ」

ベンチに座っているのだが食い込むように話しかけてくるのは城戸真司。

ジンと同一年の腐れ縁ともいべき関係でO R Eジャーナルに努めている見習いだ。

見習いながらもジンと接して情報を得られるという事で編集長の大久保からゴーが出されている。

のほほんとしているしんのすけに対して響は眉間へ皺を寄せていた。

ジンは懐からあるものを取り出す。

「何だ、それ?」

「おみやげ」

真司はジンから受け取った包みを開く。

そこにあつたのは裸の女性の写真。

「うおっおおお!」

「はっはっはっ」

顔を真つ赤にしている真司をみてジンは大きな声で笑う。

「お、おい!この写真」

「雑誌をくりぬいたもんだよ。このドウテイ」

「う、うるさいなあ!」

ひとしきり笑って満足したジンは話題を切り出すことにした。

「カラス男の情報が欲しい」

「……カラス男って?」

首をかしげる真司に響はため息を零す。

「コイツ、本当にマスゴミ?」

「響ちゃん、容赦ありませんなあ」

外野が騒ぐもジンは気にしない。

「国際的窃盗犯だ。主にダイヤとかそういうものを盗んでいるらし

い。春日部国際美術館に持ち込まれていたダイヤもやられたらしい」
「へえ、ん？それって、特ダネ!？」

「報道してもいいけど、ガチ国際間の戦争勃発になるぞ」
「うおう」

「ま、それは内緒ってことで、俺が欲しいのはカラス男の情報だったの
だが……その様子だとアテにならなさそうだな」

「悪い……令子さんも最近、発生しているビル爆破予告で忙しくてさ
……OREジャーナルのサイトなら何か見つけられるかも」

「まー、わかつたら教えてくれ」

「悪い、でもなあ、カラスの情報ならあるんだよな」

「カラス？」

「最近、春日部周辺でカラスが異常発生しているっていう情報があつ
てさ、ほら、カラスって光るものを集める習性みたいなのあるだろ？
あれでキラキラしたものが沢山、カラスに奪われるっていう話があつ
てさ」

「それって、どこ周辺で目撃されている？」

「え？ああ、海岸沿いだけだ」

「真司」

ジンはポンと肩を叩く。

「やっぱ、お前は最高だわ」

「へ?」

呆然とする真司を置いて、ジンは二人と一緒に海岸へ向かうことに
した。

「どうして、海岸？」

緑のシトロエン・2CVに乗ってジン、響、しんのすけの三人は海岸沿いを目指している。

「カラスの大量発生を真司からデータでもらっているんだが、ダイヤが持ち込まれた時と一致する。疑うのは当然だろ？」

「ほうほう」

「さて、おあつらえ向きに廃屋敷がみえてきたぞ」

ジンの視線は崖沿いに建てられているオンボロの館が目についた。

「こういうの定番っていうんだっけ？」

「お約束ともいいますなあ」

「まあ、中に入るか」

館の前にシトロエンを停車させてジンは響に懐中電灯を渡す。

「二手に分かれるの？」

「いや、念のため一緒に行動する。懐中電灯も人数分ないし」

「でもさ」

ジンの言葉に響は懐中電灯を手の中でいじりながら答える。

「こういうの大抵、役に立たなくなるよね？」

「……だね、大体、壊れるか途中で消える」

しんのすけにまで同意されたことでジンは肩をすくめながら屋敷のドアへ触れる。

音を立ててドアが地面へ落ちた。

「……」

咎めるようにこちらをみってくる二人。

ジンは言い訳するように蝶番を指す。

「これがモロくなっていた。俺が悪いわけじゃない」

咎めるような視線から逃れるようにしてジンは館内に入る。

続けて二人も後を追いかけた。

「ねえねえ、ジンさん」

「なんだ？」

「カラスマンさんが盗んだ宝石つてどんなものなの？」

「名前は知らない。ただ、聞いた限りだとこんな掌の握り飯みたいな形をしたダイヤらしい」

「おにぎりダイヤですなあ」

「実物がどうかかわからないけどね」

呆れながら三人は階段を上がった。

しばらくして誰かが入った痕跡のあるドアがみつかる。

ジンはゆつくりとドアを開けた。

中を見たジンは固まる。

「ジン？」

続けて響がみた。

しばらくして、ため息を零す。

「何、あれ？」

「なになににい？オラもみたい！」

中を覗き込んだしんのすけ。

室内はそこそこの広さがあり元々はパーティー会場か何かだったのだろう。

中心にはキラキラと輝くミラーボールのようなものがぶら下がっており、周囲の至る所にカラスがいた。

「うわあ、楽しそう！」

「いや、何だよ、これ」

「……アホだ」

「あ、オニギリダイヤ」

しんのすけが指さすのは室内の天井に設置されているミラーボール。

「おいおい、ぜいたくな設置だなあ」

「どうする？寝ちやっっているから取っちゃおう？」

「そうだな」

「おおー！本当におにぎりだあ！」

「つておい！」

二人が話し込んでいる間にしんのすけが天井からダイヤをとってしまった。

光が降り注がなくなったことでカラスが目を覚ます。

それは天井で吸血鬼みたいに逆さまで寝ていたカラス男も同じ。

「侵入者か！」

「うわあ……ダサイ」

現れたカラス男の姿を見て響が本音を漏らす。

カラス男は全身を黒タイツで包んでおり、両手は羽のようなものを装着、口元はカラスの嘴のようなものがついている。尚、頭は坊主で傾けているシルクハットはおしゃれのつもりなのだろうか？

「小娘え！誰がミニマムサイズで最低にダサイだあ！」

「誰もそこまでいってねえ！」

どうやら被害妄想もある様子。

「ええい、侵入者め！私の宝物を盗もうなど、許さんぞ！いけえ！」

バサバサツとカラスたちが一斉に飛び上がる。

狙いは三人だろう。

「響、ライト消せ」

「はい」

カチツとライトを消した直後。

バキバキバキイ！

音を立ててカラスたちが壁に激突する。

「なっ!？」

「薄暗い空間でカラスは無理あったんじゃない？」

手の中にあるダイヤをくるくると弄びながらジンは笑う。

「くそおおおお！返せえ！」

ダイヤを取り戻そうとしてくるカラス男。

「うっさい」

接近した響が顔に拳を叩き込む。

抉るように繰り出されたストレートがカラス男の顔に直撃。
くるくると回転しながら地面へ倒れるカラス男。

「……さて、警察に連絡いれますかあ」

ジンはポケットから携帯電話を取り出した。

一時間後、カラス男は春日部国際警察の手によって逮捕される。

「無事にみつめましたよ」

「おお！すまない！」

国際美術館の館長室。

そこでジンは館長と向かい合っていた。

ダイヤが入っている袋をみせる。

「おお！助かったよ！報酬は後程、振り込んでおくとも」

「それはどーも、ところで」

ジンは館長の顔を見る。

「面白い話がありました」

「何かな？」

「ここからは警察も、響やしんのすけも知らない話。

東郷ジンが語る隠された話だ。」

「十五年ほど前に渋谷に隕石が落下したことは知っていますよね？」
「ああ、周辺が吹き飛んだからね。今はかなり復興が進んでいると聞いているが？」

「ええ、実はその隕石、ある物質が含まれていまして、その物質を持ち続けると人間の体を変異させてしまうとか」

「ほお、それは知らなかった。まあ、当時は様々な憶測が飛び交っていましたからね。さ、ダイヤを」

「ンで、このダイヤ」

ひらひらとダイヤの入っている袋を見せる。

館長はハンカチを取り出して自らの額を拭う。

「中を調べたらなんと、その物質が入っていたんですよねえ」

「返せ!!」

話の途中で袋をジンから奪い取り、中からダイヤを取り出そうとする。

しかし、出てきたのは石ころだ。

「なっ、貴様!」

怒りで顔を上げようとした館長の額に拳銃が突きつけられた。

「さて、ダイヤは南米のバルベルデ共和国から送られてきたってきいたが、それは本当かどうか、教えてもらえるか？」

「貴様、脅迫するつもりか？」

「質問してんのは俺だよ」

銃口をぐいぐいと押し付けてジンは尋ねる。

「答えないっていうなら、このまま」

ニタアと館長が笑みを浮かべる。

彼の体が光に包まれた。

咄嗟にジンは後ろへ下がる。

館長だった存在は緑色の虫のような怪物へ姿を変えていた。
手には鋭い爪が伸びている。

「ワーオ、まだ生き残りがいたのかよ」

奇声をあげながら襲い掛かって来るのはワーム。

渋谷に落下した隕石に紛れ込んでいた生命体。

奇声をあげながら振るわれる爪を躲しながらジンは外へ飛び出す。どこに隠れていたのか、そろそろと姿を見せるワーム達。ワームの額に人間の顔が現れる。館長の顔だ。

「大人しく、石を差し出せ、そうすれば、我々の同胞へ擬態させてやろう」

「冗談、お断りするよ」

「ハッハッハッ、愚かな選択を」

ガサガサと近くの茂みが揺れる。

そこから現れたのはツギハギの服を着た男。

ギロリと鋭い目でワームをみる。

「ワオ、狙ったようなタイミングだな」

ジンが呆れている中、男は肩に手を乗せてきて、尋ねる。

「おい」

「何さ？」

「今、笑ったのはお前か？」

「まさか、連中だよ。俺達を見下していた」

「そうか……なら」

ピョンピョンピョンとどこからか緑色のメカニカルなバツタと黒いカブトムシが飛来してきた。

二人は同時にそれを掴んでベルトへ装着する。

音と衝撃と共に二人は鎧に身を包んだ。

「その姿、貴様ら『仮面ライダー』か!?!」

「いやはや、出会った時に名乗ったでしょ?」

黒いカブトムシをモチーフにした姿の戦士が手を叩く。

「雑用から浮気調査、探し物、はたまた怪物退治までなんでもいたします。何より、悪いことをする奴らは許さない春日部探偵社ってさ」
体勢を落しながら彼は言う。

「だから、俺達はそんな大層なもんじゃねえよ」

第二話：破壊の手

私は響、苗字は一応、立花。

二年前、私は地獄をみた。

ツヴァイウィングというアイドルのコンサートを見に行つてしまったが為に。

本来なら親友も来るはずだったがけれど、急な用事で来られなくなつたために私一人だけ。

はじめてみたコンサートはとても興奮した。音楽が好きになつた瞬間だった。

けれど、終わりは唐突にやってくる。

特異災害ノイズ。

人しか襲わず、人を炭に変えてしまう恐ろしい存在。

ノイズの出現で私のすべてが変わつた。何もかもが崩れ去つた。

あの時、どうして生き残つたのか覚えていない。

僅かに覚えているのは不思議なスーツを着た二人、そして、銀色の
“何か”。

再び目を覚ました時は病院だった。

その時は無事だった私のことをと親友や多くの人が喜んでくれていたことを覚えている。

でも、今は――

「ジン、暇〜」

「寝ている人の上にのしかかるな、重たいっての」

春日部探偵社。

春日部シテイにある小さな探偵事務所。

探偵事務所は他にもあるけれど、ここは他と少し違うところがある。

摩訶不思議な出来事も扱うというところだ。

話だけ聞いたらばかばかしいと否定してしまうだろう。『あの事件』に巻き込まれる前の私も同じだったに違いない。

でも、あの事件からジンと出会い、救われてからは違う。

私にのしかかっているジンは面倒そうに頭をかきむしる。

「暇〜」

もう一度、彼にアピールする。

暇だからどこかへ連れて行ってほしいと。

一人だったら部屋でくつろいでいても問題はない。でも、ジンが傍にいるなら別。

ジンがいてくれれば、私はまだ私でいられる。

「しんのすけは？」

「幼稚園」

この事務所に出入りしている野原しんのすけ、ジンとの関係はよくわからないが元気活発なマセた子供だ。

「みさえさんから伝言、夕飯、食べに来ないかって」

渡されている携帯電話からメッセージが入って、内容を伝える。

「ああ、行くなってメッセージしとくわ」

ジンはしんのすけだけでなく、野原家と交友がある。

それは私にも当てはまるけれど、少しばかりあの家は苦手だ。

私の失ってしまったものがあるから。

「……どうした？」

ジンが私を覗き込んでくる。

「別に、どっか行きたい、矢車師匠もないし」

「アイツは奔放だから放っておいていいと思う」

春日部探偵社は私とジン、戦いのいろはを教えてくれた矢車師匠の他に二人ほどいる。

「どっかいていないし、もう一人は大学じゃない？」

「……ああ、平日だったな」

「ひーまー、どこかいこーよー」

「はあ、わかった……どーせ、依頼人もこねえだろうし出かけるか」
「やった」

嬉しくて立ち上がる。

「あ、でも車が定期点検中で」

「バイクがあるよね？」

「そうだった」

彼が渋る理由のすべてを叩き潰して私はパーカーを着て、ジンの腕を掴んで外へ出る。

渋りながらも私についてきてくれるジンは大好きだ。

病院で目を覚ました私はあのライブの数少ない生き残りであると知った。

親友は行けなかったことを泣きながら謝ってきたことは覚えてい

る。

リハビリしてすぐにでも復帰しよう。

その考えはすぐに消え去ってしまう。

あるニュース番組が報道した内容、それが全ての始まりだった。

死者のほとんどがノイズによる襲撃ではなく、逃げ惑う人たちの所

為による二次被害による結果だということ。

まるでその事実を広めようとするかのように生存者は悪、人殺しで

あるという風な話が広まった。

病院でも陰口が叩かれ、直接、私に人殺しと言ってくる人がいた。

その時は親友が庇ってくれたけれど、退院して数日でその親友は消

えていた。引越したとお母さんは言っていたと思う。

学校も地獄だった。

同じようにコンサートを見に来ていた学生がいて、その子は死ん

だ。

——なぜ、お前が生きている？

そう投げられた言葉は私をずたずたにしていった。

とどめとばかりにお父さんが出ていき、お母さんとおばあちゃんだ

けになった時、私は思った。

私は生き残るべきではなかった。

死ぬべきだったのだ。

そう悟った時、何もかもどうでもよくなって家を抜け出して、適当なところで死のうとした時に——ジンと出会った。

「どうでもいいが、お前、服とかそういうものは買わないのか？」

「だって、目立ちたくないし」

ジンと一緒に遠出してショッピングモールへ来ていた。

かなり大きなショッピングモールで様々なものが並んでいる。

私にジンは問いかけてきた。

自分の服装をみるとフード付きのパーカーに短パン、スポーツシューズという格好。

街中ではフードですっぽりと隠しているから、胸がなければ男と間違われていただろう。

「ジンは私が『女の子らしい』格好をしてくれたら意識してくれる？」

試すように問いかけるとジンは首を傾げる。

「まー、俺にそういうセンスわかんねえけど、似合うんじゃないかな？」

「そう」

素っ気なく答えたけれど、内心は違う。

ジンが私を「女の子」として見てくれるときいたら少し、興味が出てくる。

ブーブーと警報が鳴り出す。

その瞬間、さつきまでの温かい気持ちは消え去ってどす黒い何かは沸き上がって来る。

「ジン」

「……はあ、わかった」

ジンが頷いてくれたことに感謝を抱きつつ、目的地に向かって走り出す。

目的地、そこにはカラフルな有象無象がいた。

ノイズ。

災害指定されている謎の存在。

アレが私のすべてを奪った。

私のすべてを壊した。

沸き上がって来る気持ちを吐き出す。

「Bal wis yall Nes cell Gun gnir tro
n」

歌う。

それだけのことで私の体は光に包まれて白とオレンジを基調とした鎧を身に纏う。

口元をマフラーのようなもので隠しながら拳を構える。

拳を振るうだけでノイズが碎け散った。

私がノイズを壊した。

そのことだけでマフラーの中に隠されている笑みが深まる。

「私だけがー」

きつと、あの時に私は狂ってしまったのだろう。

それでもいい。

だって、

私がジンと出会ったのは本当に偶然だった。

死のうと路地裏に入って崩れ落ちたところで彼が助けしてくれたの

だ。

偶々、彼が私の手を掴んで、差し伸べてくれた。けれども私は既に色々と限界で全く関係のないジンに当たり散らした。

「知るか」

ばっさりとは彼は私の八つ当たりを切り捨てた。

「ここで甘くされて、お前は満足するのか？違うだろ？お前の目は完全に死んでいない。その何かを果たすまで生きてみたらどうだ？」

ジンは最初、優しくなかった。

いや、優しくしないということをしてくれたので今の私がいられたのだろう。

逃げた私をお母さんとおばあちゃんに会わせて話をさせるなど強硬的な手段をとったり鬼畜ともいえるようなことがいくつもあったけれど、ジンは温かく迎えてくれた。

もう得られない。

もう手に入らないと思っていた温もり。

それがジンだった。

だから、私からジンを奪う奴がいれば――。

「はあ……………はあ……………」

「満足というか、全滅だな」

カツカツとノイズがあるかもしれないというのにジンは近づいて

くる。

彼はノイズを恐れない。

ノイズを破壊できる私を受け入れてくれる。

「ああ」

先ほどまでのどす黒い気持ちがあつたように消えていった。

同時に沸き上がって来るのはポカポカした温かいもの。

嬉しくなつてジンへ駆け寄ろうとした時。

「見つけたぞー！」

そこへ割り込む無粋な奴がいた。

マフラーで顔の半分を隠しながら私は相手を睨む。

青い鎧を纏ったツヴァイウィングの片割れだ。

刀をこちらへ向けている。

「ガングニールの適合者、一緒に同行してもらおう」

コイツ、違う。コイツラがいるから、私は。

拳を構えようとしたところで後ろから大きな手が止める。

鎧越しだというのに、ジンの温もりが伝わってくるような気がした。

「疲れているだろう？アレを追い払うのは俺がやってやるから……後ろで少し休んどけ」

「……ジンが言うなら……」

鎧を解除して入れ替わるようにジンが前に出る。

いつの間にかジンの腰に銀色のベルトが巻かれていた。

左側には拳銃を模したパーツがついている。

ジンは銃のグリップのようなものを手の中できると動かしながら顔を近づけていく。

「変身」

音声が響く中でグリップを差し込む。

銀色の光と共にジンは鎧を身に纏う。

銀と黒、黄色い目をした全身装甲だ。

「何だ、その姿は」

「デルタ。それがこの姿の名前だ。さて、遊んでやるよ」

指をくいくいつと挑発するような動作をとる。

「っ！」

明らかな挑発だというのに相手は刃を振るってくる。

ジンは振るわれる刃をぎりぎりのところでいなす。

隙ができたところで拳を放つも、寸前のところで止めてしまう。

距離を開いたところで動揺している長髪が叫ぶ。

「貴様、愚弄するののか？」

「あ？最初から言っただろ？遊びだっつて」

ひらひらと手を振りながらジンは肩をすくめた。

その動作に長髪は苛立ちながら刃を繰り出してくる。

「おいおい、もう少し冷静になってだなあ」

「うるさい！」

カポエラのような技が繰り出されているというのにジンは平然とグリップを外して何かを呟いた。

音声も聞き取れない。

「貴様、舐めて！」

「残念、女を舐める趣味はない。てか、後ろ……要注意」

「そんな世迷言——」

ジンの忠告を無視したから長髪女は後ろからやってきた巨大バイクに突き飛ばされる。

倒れるというところでジンが咄嗟に腕を掴んで支えていたという点に気に入らないけれど。

「帰るぞ」

「うん」

あっさりと手放したことから気分が少しだけ晴れた。

やってきたバイク？みたいな巨大な乗り物にジンと一緒に飛び乗る。

「待て！」

長髪が何か叫びながら追いかけてようとするがジンの操るジェットスライガーが飛び去っていく。

「買い物も回収していたんだ」

「こういうところはぬかりなしだ」

安全なところで私とジンはいつもの私服姿へ戻って探偵社へ戻ってきた。

中に入るけれど、誰もいない。

二人だけの時間だ。

抱き着いていたジンから離れる。

「落ち着いたか？」

「空を飛んでいる間に、少しは……」

「それならよかった」

「私を落ち着かせるためにあの長髪と戦ったの？」

「まあ、遊びだけど」

遊び。

そう、遊びなのだ。

ジンはああして変身して戦うことはあるけれど、本気でやりあっていた姿を一度も私はみることがない。

残念なことにしんのすけや他のメンバーは目撃したことがあると

いう。

本気を出したジンはどんな戦いをするのだろうか？

私みたいに力任せみたいなのやり方だろうか、それとも矢車師匠みたいに最低限の動きで済ませるのだろうか？

興味はある。いいや、違う。

ジンのことを何も知らないというのが嫌なんだ。

私を絶望のどん底から拾い上げてくれたジン。

破壊することしかできなくなった私の手を握り締めしてくれるジン。

私を受け入れてくれるジン。

彼がいない世界など考えられない。かつての私から想像もできない変化だった。

だからだろう。

私からジンを奪おうとする存在がいるのなら、私は容赦しない。

例えば、今は女としてみられていないとしても、私はジンの傍に居続ける。

邪魔するものは叩き潰す。

「ジンは……渡さない」

「何かあったか？」

「ううん」

第三話：護衛の依頼

春日部国際警察。

それは多発する凶悪犯罪において警視庁が特別に設置した部署、警察の管轄の垣根を超えた活動を目的としている組織である。

しかし、実態は警察において役立たず、問題ある人材などが集められている組織だった。

「本日付で春日部国際警察のメンバーとして配属された泊進ノ介巡查だ」

「泊進ノ介です！よろしくお願いします」

「野原係長、キミに彼を任せる。頼むぞ？」

「あ、はいー」

貴虎に指名されて書類作業をしていた野原ひろしが立ち上がる。

「よろしくお願いします。野原係長」

「よろしく泊君」

「彼が配属されて早々だが、インターポールイタリア代表として刑事がやって来る。どうやらどこかの犯罪マフィアがこの町で何かを企んでいるらしい」

「それはまた……」

息をのむ野原刑事。

そこでドアがノックされた。

「来たか」

身構える貴虎達。

しばらくしてドアが開かれて長身の……長身過ぎる足の上に乗った人の姿をした豚が立っていた。

「豚？」

「失礼な！私はアレッサンドロ・フランチェスカ・デ・ニコラだ、まあ、よろしくやろうよ」

シュボツと葉巻を吸いこもうとしてせき込むぶりぶりざえもん。

「てめえ！この前の野郎じゃねえか」

「……私も同意見だが、残念ながら同一人物ではないと言われている」
叫ぶひろしに対して貴虎が眉間へ皺を寄せながら答える。

前にフランス代表とかいってやってきたぶりぶりざえもんには振り回された結果、ひろしは簀巻きにされてあやうくみそ汁の具にされそうになった。

貴虎も振り回されていたのだが、残念ながら別人という結果だった。

どうみても、同一人物なのだが。

「本当にイ？」

「ぐぐだぐだいっても仕方ない。野原係長と泊巡査は今から言う場所へ彼と一緒に向かってくれ」

「どこですか？」

「場所は――」

春日部探偵社の一室。

ジンはそこで有名なプロダクションの社長と話し合っていた。

「アイドルの護衛ですか？」

「はい、うちのレミに嫌がらせが多発しておりまして……」

「嫌がらせをなんとかしてほしいと？」

彼の事務所にレミと呼ばれる有名アイドルが所属していた。

人気で言えば風鳴翼に劣るかもしれないが人気急上昇中ではある。

「そうなんです。こここの事務所でしたらどんな問題もすぐに解決してくれると……」

いやがらせというのが新聞の四コマ漫画の切り抜き、謎のファックス、彼女の寝込みを狙って顔中に洗濯ばさみをとりにつけるといったもの。

取り付けた洗濯ばさみが日に日に大きくなっていき、事態を重く見たプロダクションの社長は解決のために春日部探偵社へ訪れたのである。

「わかりました。引き受けましょう！」

ずいっと隠れていたしんのすけを戻す。

「報酬についてはこのように」

「背に腹は代えられません。よろしくお願いします」

決まった。

「オラもいくう！レミちゃんに会いたい！」

「お前、護衛だつてことわかってるか？てか、お前の場合、レミちゃんを生足の撮影とかするだろ？」

「そ、そんなことないぞー！」

「本当に？ウソついたら響のグリグリだぞ？みさえさん直伝の」

「……やる、かも」

「だよなあ。ま、お前を事務所に一人つていうもの問題だし、行くか」

「うおっほーいー！」

喜ぶしんのすけ、ジンは苦笑しながら立ち上がる。

後々にこの事件で自分達が不在の間に面倒なことが起こってしま

い、激しい後悔をすることになるのは別の話だ。

社長と一緒に向かおうとするとソファアで寛いでいた矢車が声をかける。

「出かけるのか？」

「アイドルの護衛だ。どーする？」

「面倒だ。パス……酒でも飲んでいる。何かあれば呼べ」

「そうするよ」

矢車も事務所の鍵を持っている。

戸締りは任せて俺と響、しんのすけの三人は芸能プロダクションのアイドル、レミの護衛のための道具をそろえることにした。

「ああ、面倒だ」

ぶらぶらと矢車は懇意にしている店へやってくる。

はつきりいって護衛任務など面倒以外の何物でもない。

かつて組織に所属していた自分なら行動をしていただろう。だが、今の矢車にとってはどうでもよいものである。

ぶらぶらしながらカウンター席の方へ向かうと化粧をしたスタイル抜群の女性が近づいてきた。

「あら、矢車さん、今日も来てくれたのね？」

「いつもの」

「はいはい」

女性は笑顔でカウンターの男から受け取ったテキーラを持ってくる。

矢車はそれを一気に飲み干す。

「いつも思うけれど、それ、大丈夫なの？」

普通は大丈夫ではない。

しかし、喉や全身を焼かれたと錯覚する気分が良いのである。

自分が地獄にいると思えた。

あの日から少しばかり変わったと思っっているが、果たしてどうだろうか？

疑問を抱きながらテキーラを飲む。

「あつちはうるさいな」

「うん、最近、来るようになったお客さん、羽振りがいいみたいなの

……でも、好きじゃないんだあ」

「この店は客を選ぶのか？男で金持ちなら誰だっていいだろ？」

少しふらつきながら矢車が言う。女性には苦笑する。

「そうあるべきなのかもしれないけど、私だってプロだもん、良い人と飲みたいてって思うもん」

男を魅了させるようなスタイルをしている女性が言うとは思っていない（矢車談）言葉に彼は何も言わずに酒を飲もうとした時。

テーブル席から悲鳴があがった。

喧嘩はこの店でよくあることであり、矢車も何度か遭遇したので興味なく別の酒を飲もうとした時。

「あっ？」

目の前にあったはずの酒がなくなっていた。

視線を動かすとグラスが地面に転がっている。

「あぁ？」

後ろを見る矢車、そこでは店内にいるノイズ達とニタニタと笑みを浮かべている男。

そんな男の周囲には黒いスーツを着た集団が警戒したような笑みを浮かべていた。

矢車はいつの間にか傍にいた女がいなくなっていたことに気付く。

女がいた場所には少しばかり残っている灰。

「ああ、お前え」

苛立ちを隠さずに矢車は立ち上がる。

笑みを浮かべていた男と目が合う。

「お前、俺のこと、笑っただろ？」

「当然だろ？お前らみたいなの塵芥が王様みたいな俺に齒向かうことが

どれほど愚かなことか、笑う以外に教えてくれよ」

「いいだろうお、教えてやるよ。お前に」

警戒していた男達を押しつけて矢車が前に出た。

男を守るようにノイズが現れる。

「地獄をみせてやるよ」

「ンで、何で国際警察の人がいんのさ」

「いや、奇遇だね」

「父ちゃんもアイドルのレミちゃん目当てえ？警察がいけないんだあ」

「ち、違うって！こっちは——」

「あのお、野原係長、こちらの方々は？」

レミの住まう屋敷。

親が有名企業の社長らしくかなり豪華な屋敷にジンや響、しんのすけが屋敷に張り込もうとしたタイミングで野原ひろしと泊進ノ介がやってきたのである。

「ごめんな、こっちも捜査のためにやってきたんだ。えっと、レミちゃんはいる？」

「ああ！ずるいぞお！父ちゃん！オラだってレミちゃんのところ」

「きやあああああああああああ！」

「今の、悲鳴ですよ！」

進ノ介とジンが同時に駆け出す。

「レミさんの部屋は！」

「そこを曲がって左！」

二人は息の合ったコンビネーションでドアを開ける。

そして、絶句した。

レミの寝室。

寝間着姿の彼女はベッドから離れている。

ベッドには上半身裸で下半身、紫色のタイツを履いている二足歩行の豚であった。

「アンタ、何やってんだ!？」

「あー、知り合い？」

「イタリアからやってきたインターポール捜査官で、今回の……おつと」

「チツ、口固いな」

「けだものお」

「お前がなー!」

二人同時にぶりぶりぎえもんへゲンコツを落とした。

「あ、ぶりぶりぎえもん!」

「失礼な! 私はアレックス・サンドロ・フランチェスカ・デ・ニコラだ」

「長いからぶりぶりぎえもんでいいんじゃないやねえか?」

「略すな、愚か者」

「エロブタは外で反省してろ!」

響の回し蹴りがぶりぶりぎえもんに直撃。

部屋の外へ放り出される。

「……凄いな、あの子」

「まあ、な」

進ノ介にジンは肩をすくめた。

「野原係長、春日部探偵社って何ですか？」

屋敷の外で見回りをしていたひろしと進ノ介。

進ノ介は彼らのことが気になっていた。

警察組織よりも探偵が雇われていたことに思うところはあ。しかし、あまりに個性的なメンバーに興味の方が勝る。

「春日部探偵社は金さえ受けとれば、どんなことでも引き受ける探偵たち。メンバー全てにあったことはないけれど、依頼完遂99.9パーセントを常にキープしている人達だよ」

「金さえあればって」

「そこだけを見れば、みんな、そういう顔をするんだね」

「え？」

戸惑う進ノ介。

直後、屋敷内から大きな音が響いてきた。

「まさか、襲撃?！」

「行こう！泊君！」

二人が屋敷のテラスに駆けつけると、そこでは痙攣して倒れている不審者と頭にたんこぶを複数個、作って気絶しているぶりぶりざえもんの姿があった。

「え？」

「これは？」

「犯人確保つと、後は警察の方でよろしく」

痙攣している不審者を洗濯ばさみ（推定二メートルくらい）で拘束しながらジンは立ち上がった。

「そのの、インターポールの刑事さんは？」

「自業自得」

手を払いながら響は気絶しているぶりぶりざえもんを冷たい目でみる。

野原しんのすけは巨大な洗濯ばさみを模したロボットの上に腰かけていた。

「犯人確保は警察の仕事、さて、明日、頑張るか」
体を伸ばしながらジンは立ち上がる。

「帰るの？」

「今日は襲撃ねえだろ。明日も忙しいからな……寝る」

「豚のせいで疲れた」

帰り支度を始める三人にひろしは「気を付けて帰りなよ。しんのすけは歯を磨け」といつて見送る。

「……係長、俺、困惑しています」

戸惑っている進ノ介にひろしは苦笑した。

「ま、追々、慣れるよ」

「え、なんで？」

翌日、泊進ノ介はどういうわけか春日部探偵社のメンバーと一緒に

下町の中華料理屋に来ていた。

目の前でチャーハンや餃子を食べているジン、響、しんのすけの三人＋ぶりぶりざえもん。

どうして、泊進ノ介がここにいるのか？

それは春日部探偵社に呼ばれたからである。

——警察が必要になると。

「いや、何で食べているの?」

「腹が減ったから」

同時に答えるジンと響。

「息ぴったりだな」

「ま、刑事のしんちゃんもそのうち慣れるよ」

「え?慣れるって、どういうこと?てか、刑事のしんちゃん?」

「泊進ノ介でしょ?オラ、野原しんのすけ、だから刑事のしんちゃん」

「成程……」

納得してしまう進ノ介。

それから食べている響とジンをみる。

「そういえば、あの二人、仲良しだな」

「ま、いつかは結婚するんじゃない?」

「え?そういう関係?」

「いや、全然」

首を振るジン。

「いつかはそうなる」

ジンを睨む響。

「見事に違う回答だなあ……てか、こんなに食べて大丈夫なの?」

「大丈夫、ちゃんと計算しているから……けれど、おい豚」

「誰が豚だ!私は由緒あるイタリアの」

「イタリアの首都は?」

響の問いかけにつまるぶりぶりざえもん。

横からひそひそとしんのすけが囁く。

「スペインだ」

「ローマだ、アホ」

響と進ノ介が同時に叫んだ。

「まあまあ、事前に話したこと、やれ」

「偉そうに命令して、まあいいー!」

ぶりぶりざえもんは自らの腕の毛を抜いてスープの中に落とす。

「うおおいー!この料理は豚の毛が混ざってんのかあ!」

叫ぶぶりぶりざえもんは店員が慌ててやってくる。

「も、申し訳ありません!」

頭を下げながら謝罪してきた。

怒るぶりぶりざえもんは悪態をつきながら店員を煽る。

「いやいや、流石に」

一応、警察官が問題を起こすのはまずい。

進ノ介が止めようとした時、ぶりぶりざえもんの一言で事態が変わる。

「インターポールを舐めんじゃねえぞ!」

「なに?インターポール」

男の表情が変わり、懐から拳銃を取り出す。

「え?」

突然の事態に呆然とする進ノ介。

至る所から現れた男たちが銃器を全員へ突きつける。

「え?え?どういうこと!」

戸惑う進ノ介に対して、他のメンバーは酷く冷静だった。

「当然の反応ですなあ」

「五歳児が冷静なことに俺も驚きだよ!」

武装した男達に店から地下へ連行されていく五人。

目を白黒していた進ノ介だが、冷静すぎる三人をみて次第に落ち着いていく。

「てか、何なんだ、ここは?」

「秘密結社?〇〇の爪みたいな」

「ええ!」

「違う、黒い幽霊〇だよ」

「ええ!」

しんのすけ、響の告げた内容に驚く進ノ介だった。

「いや、香港マフィアのアジトだから」

「ごめん、逆にしつくりこない」

「染まってきてんなあ」

進ノ介の姿にジンは小さく笑う。

「黙ってついてこい」

銃を突きつけられて大人しく手を挙げる四人。

ぶりぶりざえもんはいつの間にか銃を突きつける側に戻っていて、全員から踏みつけられた。

階段を下りてたどり着いたのは広い空間。

「まさか、お前達が噂の春日部探偵社か、お会いできて光栄だ！」

暗闇の向こうから現れたのは禿げたオッサン。

「禿だ」

「禿だね」

「ツルツルだな」

「拭いたら光りそう」

「油でも塗るか？」

それぞれ感想を漏らす。

「お前ら！失礼だゾ！」

香港マフィアのボスはダンと回転机を叩く。

実際のところ、マフィアのボスの頭はツルツルで拭いたら光る予感が五人の中にあった。

「さて、話がズレたが、我が組織に探偵社が何の用かな？」

「まあ、一応は交渉かな。アイドルのレミの嫌がらせをすぐにやめろ」

「え？マフィアがアイドルの嫌がらせの犯人!？」

「何だ、お前は気づいていなかったのか、やれやれ、日本の警察の底が知れるなあ」

「うるさいよ！そういうお前は気づいていたのか!？」

小ばかにした態度をとるぶりぶりざえもんに進ノ介は叫んだ。

「当然だ、インターポールを舐めるな」

「「(絶対)にウソだ」」」

胸を張るぶりぶりぎえもんは全員が冷たい視線を向けた。

「嫌がらせだど？ 私はレミを愛している！ ファンとして手紙を五百通も送ったんだ！なのに一通も返事を寄越さなかったんだ！ 私の気持ちが無碍にした！ 当然の報いだ」

「いやいや！ 五百枚とか」

「変態だ」

「うーん、オラでもそんなに書かない」

「とにかく、私の邪魔をする貴様らはここで消えてもらう」

「やれやれ、仕方ない」

動き出そうとしたジンよりも早くぶりぶりぎえもんが回転机の上に立つ。

ポケットに両手を入れながらゆっくりと歩いていく。

放つオーラというべきか空気にマフィアのボスは息をのむ。

そして、振り返りマシンガン突き付ける。

「ナハハハハハ！ 私は強い者の味方なのだあ！」

銃口の先は香港マフィアのボス。

後ろを見ると春日部探偵社のメンバーがいた。

「あれ、タイム！ やり直し、やり直し」

走りながらマフィアのボスのところへ向かい、四人へ銃を突きつけようとするもどういいうわけかマフィアのボスへマシンガンを構えていた。

不思議に思いながらスタート位置に戻って走り出すと同時にジンが机を回転させる。

くるくると回る机によってぶりぶりぎえもんは元の場所へ戻った。

「ああ！ 汚いぞー！」

「どつちがー！」

進ノ介が殴り、全員がぶりぶりぎえもんを踏みつける。

「やめろー！ この野郎おおおおおおお！」

叫びながらぶりぶりぎえもんがマシンガンを連射した。

突然のことに仰け反る全員。

無茶苦茶に撃たれた弾丸は柵の上に置かれていたレミのフィギュ

アの頭を撃ちぬいた。

「ああ！自家製レミのフィギュアがあああああ！殺せ！奴らを殺せ！」

「あの人、短気過ぎるゾ！」

「自家製っていったか？冗談抜きで血涙流しているぞ」

「アホだ」

「キミだけ冷静だね」

辛辣な言葉を告げた響に進ノ介は感想を漏らしてしまう。

「（この人達、いや、この子も、みんな冷静だ……）」

むしろ、戸惑っているのは進ノ介だけという事実には愕然としていた。

「（刑事である俺だけが困惑していた……クソツ）」

彼らの姿を見ていると慌てている自分が酷く滑稽に思える。

「どうしたの？」

「いいや」

響に尋ねられて進ノ介は首を振り、ネクタイを締めなおす。

そんな進ノ介の表情をジンがちらりと見ていた。

「見つけたぞー！もう逃さん、必ず殺してやる！」

怒りに顔を歪めてマフィアのボスがやってくる。

逃げ出したジン達は厨房へ来ていた。

「逃げたつもりだろうが違うぞー！お前達は誘い込まれたのだ！」

マフィアのボスが指を鳴らすと壁や天井がめくれて、そこから獅子舞の仮面をつけた集団が現れる。

「おおく！」

「いや、今のどうやったんだよ!？」

感嘆の声を漏らすしんのすけと叫ぶ進ノ介。

「時間は？」

「問題なし」

それに対してジンと響は酷く冷静だった。

「お前達は殺す！」

「まあ、待て、ボス！私だけは見逃してくれ、そうしたらこれをやろう！」

ぶりぶりざえもんが取り出したのはどこで撮影したのか、レミの足だった。

「それはレミの生足!?よし！約束だ！」

しんのすけを拘束して歩き出すぶりぶりざえもん。

「コイツ、最低だ」

進ノ介が呆れて言葉を漏らす中、ぶりぶりざえもんはしんのすけを

ボスの前に連れ出す。

ボスはハンマーを構える。

「させるか！」

振り下ろされるといふ瞬間、進ノ介は駆け出し、周りを気にせず走り抜けて、そして。

「ぶふあああ?！」

——ボスを殴り飛ばした。

「ぶふいいいいいい」

ついでにぶりぶりざえもんを踏みつぶす。

息を吐きながら進ノ介は拳を握り締める。

「お前達みたいな悪党にこんな小さな子を傷つけさせてたまるか！」

覚悟を決めた表情で進ノ介はしんのすけを守る。

「きいさあまあ！」

「俺は刑事だ。市民を守るのが警察官の義務だ！」

「生意気だ！お前も殺して」

「さあて、ボスさんよ。タイムアップだ」

叫ぶボスと戦闘員たちの前にジンが立つ。

「な、何のことだ？」

「外は国際警察が包囲している。アンタは俺達に喧嘩を売った。だから、しかるべき機関に裁きを受けてもらう」

「ふざけるな！お前らは皆殺しだ！我らにはこれがあるのだから！」

ボスは懐から細長いUSBメモリのようなものを取り出す。

骸骨を象ったデザイン、側面には『B』と表示されていた。

【バード！】

メモリを起動すると自らの腕に差し込む。

体内にメモリが消えるとボスは鳥を模した怪物へ姿を変える。

「怪物?！」

驚く進ノ介を前にバードドーパントが雄叫びをあげて飛び掛かる。

「ぶひー！」

突然のことに反応が遅れて進ノ介はぶりぶりざえもんと共に壁に叩きつけられた。

ぶりぶりぎえもんがクツションになってくれたおかげで頭にダメージはなかったがあまりの衝撃に進ノ介は気絶してしまう。

「刑事のしんちゃん！」

しんのすけが気絶した進ノ介へ駆け寄る。

「響、彼らのこと、頼む」

「いいよ、どうするの？」

「ま、刑事のしんちゃん」がみていないから、俺が行くよ」

飛来してくる黒いカブトムシ、ダークカブトゼクターを掴む。

「この姿を見られると色々ややこしいからな」

気絶している進ノ介をみながらダークカブトゼクターをベルトにセツトする。

【Henshin】

光と共にヒイロノカネで作られた鎧を身に纏う。

——ダークカブト。

そう呼ばれる戦士へ変身する。

バードドーパントは唸りながらとびかかってきた。

ダークカブトは正面からバードドーパントの攻撃を受ける。

バチバチと爪がヒイロノカネの装甲を切り裂こうとするがダメージはない。

近距離で拳を連続して叩き込む。

バードドーパントを守ろうと獅子舞の戦闘員が飛び掛かる。

獅子舞の戦闘員の顔をダークカブトは殴った。

パンチを受けた獅子舞の戦闘員の顔は砕け散る。その中から覗いたのは機械。

「こいつら、ロボットか」

専用武器、カブトクナイガンで次々と戦闘員を射抜いていく。

次々と破壊されていく戦闘員に焦りを覚えたのかバードドーパントが羽を広げてダークカブトに迫る。

「あ、あれ?」

「あ、進ノ介君、目を覚ました」

進ノ介が体を起こすとひろしが声をかける。

「野原係長、あれ、俺は?」

「爆発のショックで気絶したんだよ」

起き上がろうとした進ノ介をやりわりとひろしが止める。

「爆発?」

「香港マフィアのボスがアジトに設置していた爆弾を起動させたんだよ。幸いにも周囲に人がいなかったからね、ケガ人はキミとニコラ刑事くらいだよ」

ひろしが指さすと包帯まみれのぶりぶりざえもんが肉屋に運ばれていた。

「そうだ、探偵社、彼らは!」

「無事だよ。仕事の報告をしにここへいないけれど」

進ノ介が周りを見ると制服姿の警官達が現場検証をしていた。探偵社の、彼らの姿はない。

そのことが悔しさを進ノ介は感じた。

「助けられたってことか」

「泊君、彼らから伝言を預かっているよ」

顔を上げた進ノ介にひろしはにこりとほほ笑む。

「機会があれば、また会おうだって」

その言葉に進ノ介は笑う。

次に会うまでに刑事としてもっと成長しよう。

「良い顔になったね」

「係長、俺、頑張ります！」

「ああ、懐が潤った」

「嬉しそうだね」

「まあ、報酬がもらえるのは嬉しいことだからな」

ジンと響は探偵社のあるビルに帰宅する。

しんのすけを野原家に返しているため、久しぶりの二人つきりだ。

「ねえ、ジン……どうしたの?」

鋭い目でジンは地面を注視していた。

数滴の血液。

ジンは事務所の前へ向かう。

「矢車!」

春日部探偵社の入口、そこでジンは扉にもたれるようにして倒れている矢車を発見した。

矢車は血まみれだった。

第四話：欲望の転生者

「ジン、矢車師匠は？」

「知り合いの闇医者にみてもらったが大丈夫だ。しばらくは輸血するために動けないそうだが」

深夜の探偵社。

そこにジンと響がいた。

血まみれの矢車を闇医者に預けて戻ってきたジンはフードをかぶって縮こまっている響へ声をかける。

「一応、言っておくが矢車が傷ついたのはお前が原因じゃないぞ？」

「わかっている。でも、私、呪われているから」

「アホらしい」

俯いている響にジンは呆れた。

「矢車や俺もこの仕事を始める時から覚悟はしている。まあ、矢車をやった奴は許さないけどな」

だから、とジンはフードの上から響の頭を撫でる。

「気にするくらいなら、下手人を捕まえることを考えろ」

「……………うん」

「明日から忙しくなるから少し休め」

「……………わかった、一緒に寝よ」

「少しやることがあるから一人で」

「お願い、怖いから一緒に」

服の裾を掴んで離さない響にジンはため息を零す。

こうなった響は頑固だ。こちらが折れるまで決して譲らない。

「わかった、わかった」

響の手を引いて、ジンは別室の寝室へ向かう。

ただ寝ただけである。決して疚しいこと何にもないことをここで記しておいた。

翌日。

「矢車さん、話だとしばらくは動けないって聞いたけど？」

「あんな生ぬるいところで死ぬるか」

「あ、そう」

包帯を巻かれながらも平然と事務所内にいる矢車の姿に重体だと聞いていた木場勇治は苦笑するしかなかった。

「さて、全員が揃っているようだからそろそろ始めてもいいんじゃないかな？ジン」

「そうだな、クリム」

ジンは机の上に置かれている銀色のベルトに頷いた。
ベルトには顔らしきものが表示されている。

木場勇治、

矢車想、

クリム・スタインベルト、

響、

そして、東郷ジン。

探偵社に所属しているメンバーで戦闘面において秀でている者達が集っていた。

「さて、矢車をボコボコに」

「ああん？」

声を上げてにらむ矢車。

ジンは肩をすくめる。

「……下手人の件だが、クリムが偶然にも映像を手に入れてくれたからそれを見てもいいことにするか」

「では、映像を始めようー」

クリムの言葉と共に室内が暗くなり、壁に映像が流される。

——それは阿鼻叫喚ともいえるような光景だった。

どこかのクラブ。

内装や天井の至る所が破壊されていく。

破壊していくのはノイズ。

人型ノイズが逃げ惑う人たちを次々と炭に変える。

普通の人ができることはただ逃げる事のみ。

しかし、一人、また一人とノイズによって消えていく。

その中でキックホッパーが室内の中心にいる何かと戦っている。

人の姿をしているが漆黒の鎧、胸部には鷹、虎、飛蝗の三つの円形の紋章が描かれている。腹部には長方形の形をしたパーツがあり、その中に三つの赤、黄、緑のメダルがはめ込まれている。

矢車の纏うキックホッパーの蹴りが放たれる瞬間、緑色のメダルが輝き、その蹴りを受け止める。

続けて、黄色いメダルが輝き、腕に虎の爪が展開されてキックホッパーを切り裂く。

キックホッパーも攻撃を受けているだけではない。反撃して相手に叩き込んでいる。

しかし、阻むようにノイズが壁となってキックホッパーの攻撃を防いでいた。

「この後、矢車君は攻撃を受けて敗北、辛うじて逃走した」

「ハッ、笑えよ。無様に一人だけ生き残った、この俺をよお」

室内が明るくなり苛立ちを隠さずに矢車が転がっていた空き缶を片足で踏みつぶす。

「落ち着きなよ……その、相手の正体は？」

「ただの餓鬼……見た目はなあ」

矢車が懐からひび割れた端末をみせる。

クリームが端末を受け取って解析を始めた。しばらくして、クリームがプリンターに接続して印刷した。

「便利だなあ」

木場勇治が感嘆とした声を漏らしながらプリンターから印刷された用紙を手取る。

「情報を見る限りでは普通の人だね……いや、普通という言い方は悪いかな、悪人だよ」

受け取った情報が記載された紙をジンはみる。

「こりゃ酷い、窃盗、傷害、軽犯罪は全てやりつくしているような奴だな」

「つまり、社会のクズ？」

響の言葉にジンと木場は肩をすくめた。

「俺はあんなクズに負けたのか……クズ以下か」

矢車はより荒れる。

「まだ負けたわけじゃない。これから挽回するんだろ？」

「東郷の言うとおりで。まだ負けたわけじゃないよ？ 矢車さん」

「ブン」

視線をそらす矢車。

「とにかく！ この男を捕まえるという事で良いのかな？」

「ああ」

クリームの問いかけにジンは頷いた。

「矢車をボコボコにした件も含めて、捕まえた後は国際警察に身をゆだねることになるだろうな」

「矢車師匠の仇をとる」

「おい、俺はまだ死んでねえぞ」

響の言葉に矢車が悪態をつく。

ジン達は大声で笑った。

「それで、今回はこの車？」

春日部探偵社の入口。

そこには黒と紫を基調にしたスポーツカーが停車している。

響はぺたぺたと興味深そうに車へ触れていた。

「その通り！名前をプロトトライドロン！正式なロールアウトに時間がかかりそうなのでね！」

クリームがジンの腹部に装着される。

「あ？」

「さー！ジン、運転するんだ」

「お、おう」

やけに自信満々のクリームに戸惑いながらジンは運転席に響は助手席へ座る。

走り出すプロトトライドロン。

その後ろを木場が運転する車が続く。

「完成品はベルトを差し込む場所があるってきいたが、プロトタイプはないんだな」

「本来なら色々と手を加えたかったのだが、プロトタイプを形にするまでにかかりの時間がかかってね」

「……前から気になっていたけど、クリームはなんでベルトなの？」

響の問いかけにベルトの画面が困った顔を浮かべる。
クリームは人ではない。

その意識はドライブドライバーと呼ばれるベルトの中にインストールされており、本来の肉体は何年も前に失われている。
詳しい事情を知る者は限られていた。

運転席のジンは沈黙して答ええない。

「すまない、響達のことには信頼しているのだが……私の中で話す決意ができたなら伝えようと思う」

「わかった。私も無理やり聞きたくないし」

「ありがとう」

目を細めながら微笑む響にクリームは感謝の言葉を告げる。

ジンは無言でアクセルを踏み込む。

しばらくして、二台の車は町はずれにある古びた洋館へ来ていた。
前にカラス男が潜伏していた場所と異なり、森の中にひっそりとした朽ちていく時をまつのみ。

そんな場所に彼らは来ていた。

「ここにあのくそ野郎がいるのか？」

「調べたところ、屋敷の周辺にはノイズが存在していることが確認されている」

クリームの情報にジンは柔軟運動をはじめた。

「響と木場は待機で」

「ジン！私も行く！ノイズを叩き潰す！」

「全員で一気に入ったら戦力をさらすようなものだ。だったら、様子見、いや、最初の挨拶は俺と矢車で行こう」

「いいねえ、地獄に足を突っ込めるわけだ」

獰猛な笑みを浮かべる矢車。

ジンは木場へ二言、三言、告げて矢車と共に屋敷へ近づいていく。

「ジンは何て？」

ノイズを潰すことができないから若干、不機嫌な声で響が尋ねる。

「二人で暴れるから隙をついて屋敷を調べてほしいって、何かあれば、これで連絡してって」

「なあ、何でこんなところに屋敷があるのに、誰も知らないんだ？」

「さあなあ？ 離れすぎて誰も知らないだけか、何者かが意図的にこの情報を伏せていたのかのどっちかだろうな」

「もし、後者だとするのなら相手は底知れない相手だ。警戒はすべきだ」

「まあな、クリム、ドライブシステムの方は？」

「完成はしている。だが」

「クリムが続きを濁す。」

「続きを理解しているからこそ、ジンは何も言わない。」

を見る前によお」

笑みを浮かべる男に矢車の怒りは頂点に達した。

「お前えええええ、俺のことを笑ったなあ!」

やってきたホップパーゼクターを掴んでキックホップパーに変身する。

「彼、荒れているねえ」

「まあ、ボコボコにされた相手が自分のことアウトオブ眼中なら仕方ねえだろ?色々と気になることはあるけれど……クリーム」

「オーケー!シフトカー!」

「さて、始めるとするか」

やってくる黒いシフトカー。

「行こう!Start your engine!」

ドライブドライバーのシステムを起動。

シフトスピードプロトタイプを掴んで、腕に装着されているシフトプレスヘシフトカーを差し込む。

「ドライブ!タイプスピード!」

光と共にジンの体が漆黒の鎧に包まれる。

クリームが考案したドライブシステムの戦士。

「プロトタイプも良いところだから、ゼロドライブか」

「良い名前だ!採用しよう!」

「あ、そう(名前すらなかったのか)」

クリームの言葉に驚きながらもゼロドライブが拳を構える。

「さ、試し乗りだ」

「何も無い」

木場勇治と響は隙を突いて屋敷の中に突入した。力を纏わずに響は屋敷内を見渡して呟く。

「何かの設備とかが置かれてはいたみたいだけど、撤去もしくは破壊されているね」

地面に広がる埃を調べる木場。

響はちらりと木場をみて、歩き出す。

「あ、響君」

「なに？」

「あつちで音がする」

指さす方へ足早に向かう響。

彼女は木場勇治が苦手だ。

常に笑顔を絶やさず。

口から出る言葉は当たり前のようなものばかり。

戦えば強いのに暴力を嫌う。

破壊の為に率先して力を振るう響にとっては嫌悪の対象になっていた。

しかし、ジンが彼を信頼しているから行動はしている。

最低限の会話で済ませる。

木場がある部屋の前で立ち止まった。

「ここに誰かいる」

響はいつでも戦える状態で構えた。

ドアをゆつくりと開ける。

その向こうでは一人の少女がぺたんと座り込んでいた。

「なあ、矢車」

「話しかけるな」

ゼロドライブは首を傾げながらキックホッパーへ質問を投げようとしたが苛立ちの声で拒絶されてしまう。

「なあ、クリーム」

「すまない、私も困惑している」

もう一度、ゼロドライブは目の前の相手を見る。

地面に倒れこんでいるタカ、トラ、バッタの紋章が胸部にあり、仮面と鎧を纏った存在。

時間は少し遡る。

「何だよ、お前らも同類かよ」

ゼロドライブとキックホッパーの姿をみて、男がため息を吐く。男は長方形のケースのようなものを取り出すと腹部に装着する。装着したアイテムはベルトになった。

ベルトへ赤、黄、緑のメダルをはめ込み、側面についていた円形のアイテムでスキャンする。

「変身！」

【タカ！トラ！バッター！】

男の前に三つの獣の紋章が現れて鎧を身に纏う。

「仮面ライダーオーズ、お前らを潰す欲望の王だ！」

オーズと名乗った男は地面を蹴り、駆け出す。

そうして、戦闘が始まった。

——始まって数十分、経たずして。

ゼロドライブとキックホッパーの攻撃によってオーズは地面に倒れていた。

キックホッパーを倒した相手ということで警戒していたゼロドライブだが。

「弱すぎる」

「あくまで推測だが、あの場で矢車君は他の人を庇いながら戦っていたこととノイズによる物量作戦で押し負けたと考えられる」

「まあ、そうとしか考えられないな」

クリムの指摘が正解だろうと頷くゼロドライブ。

「ハッ、笑えよ。こんな雑魚に負けた俺をよお」

相手が弱すぎたことに拍子抜けもよいところだと自虐的な態度をとるキックホッパー。

ふらふらとオーズが体を起こす。

「殺す！てめえらは殺すうううう！」

【タカ！トラ！チーター！】

隙についてメダルを入れ替えたオーズは俊足で迫る。
だが。

「ほい」

「フン」

二人は左右に回避すると同時にパンチとキックを叩き込む。

「なん、で！」

反撃を受けて戸惑う男。

「直線的でわかりやすい」

「馬鹿正直もいいところだ」

呆れながらおまけというようにキックホッパーが蹴りをオーズの
がら空きの背中に叩き込む。

「クソがつ！何なんだよ！お前らサブライダーじゃねえか！俺は主役
だぞ！王だぞ！そんな俺がなんでてめえらなんかに！」

隙をついたつもりで取り出した剣をゼロドライブが手刀を入れて
叩き落す。

性能的にゼロドライブはオーズに劣る。

だが、ジンと男は圧倒的な差があった。

「確かに力は凄いだろうよ。けれど、お前はそれに慢心して何にもしていない。ただただ呆れてしまうわ」

圧倒的な戦闘の経験差というものが――。

「貫えた力で偉そうに説教を垂れるんじやねえよ！てめえのそのベルトも！力も貫い物だろうがああああああ！」

「叫ぶ元気があるなら反撃して来いよ。隙だらけだってえの、だから――」

【ライダージャンプ！】

音声と共にゼロドライブの頭上を越える影。

【ライダーキック！】

エネルギーを纏いながら繰り出されるキックホッパーの【ライダーキック】がゼロドライブを超えてオーズに炸裂した。

必殺技を受けたオーズは地面を転がる。

「が、ふうふう」

びくびくと無様な痙攣をするオーズ。

光と共に変身が解除されて、口からよだれをこぼす男の姿が現れる。

本当に勿体ないとゼロドライブの仮面の中でジンは呆れる。

オーズの力がどういものなのかジンは知らない。

だが、ドライブにセットされている三つのメダルを入れ替えることでその力は様々な派生の力をみせるのだろう。

全ては成長していればだろう。

慢心せずその力を鍛えていたらゼロドライブやキックホッパーは苦戦、もしくは敗北していたかもしれない。

現実是非情である。

目の前の男は特訓や鍛えるという類の全てを放棄した。自分の欲、嗜虐心、それら全てを満たすためだけに力を使う。強者も弱者もない、強い覚悟もない相手。

そんな奴に負けることなどない。

咄嗟に腕でガードをしたがとてつもない衝撃で腕が痺れた。

「ふーん、耐えるんだ」

ズザザザと仰け反りながらゼロドライブは痺れた腕を乱暴に動かす。

「お前——」

倒れている男の傍、そこに銀色の鎧を纏った少女がいた。

流れるような銀髪。

バイザー越しにこちらをみている視線はドロドロした何かを感じさせる。

一瞬で姿を現したことで警戒を高めた。

「雪音、クリス……いや、違う」

「ふーん、わかるんだ。正解だよ。私は彼女の姿をコピーしたの」

ニコリと微笑みながらクリスは笑みを浮かべた。

「ロイミュードといえばわかるかな？クリム・スタインベルト」

「何だ?!」

ゼロドライブに装着されているドライブドライバーのクリムが驚きの声を漏らす。

「ある感情とシンクロしてね、コピーさせてもらったんだ。あ、オリジナルは殺していないよ？ボクを再起動させてくれたマスターの頼みでやめたんだあ」

ニコリとバイザー越しに雪音クリスの姿をコピーしたロイミュードが笑う。

それだけのことなのに警戒が高まる。

「このボケ！早く助けてろよ！」

「うるさいなあ、ここに来たのはお前のためなんかじゃないよ。お前が雑なことをするせいで迷惑しているんだからね？あ、念のため、教えておくけど、あそこの屋敷は既に放棄しているから」

敵の方が上手、どうやらクリムの予想が的中したらしい。

「フーン、彼女が教えてくれたけれど、ボクの顔、苦手みたいだね」

クリスはゼロドライブが動揺していることを見抜く。

「どういう、意味だ」

「だつてえ、聞いたよ？オリジナルの雪音クリスと一緒に生活していたことがあるんでしょ？そして戦地で見捨てたって」

「おい！いつまで俺のことを」

「うっせんだよお！このドアホがああああああ」

叫びと共にロイミュードが結晶状態の鞭を振り下ろす。

そのまま男の顔や体を踏み抜いていく。

「てめえよお、てめえが何をしでかしたと思つてんだ？ああ？マスターの計画にどれだけの影響が出ると思つてんだ？ああ！」

「……コピーしたといつていたが、オリジナルもあれくらい荒いのかね？」

「俺に聞くな」

クリムの問いかけにジンは首を振る。

「性格が酷く不安定のようだ」

ひとしきり暴れたことで荒い息を吐いているロイミュードのクリスは笑みを浮かべる。

頬にべつとりと血がついていて余計に不気味さが増す。

「さて、始末するかなあ」

パチンと指を鳴らす。

男の周囲にノイズが現れる。

「な、何のつもりだ!？」

「はあ？お前を消去しに来たに決まっていますでしょ？マスターはお前みたいな女を乱暴に扱う奴が嫌いみたいだし、よくないよねえ？欲を晴らすための道具扱いなんて、ま、ボクも大嫌いだし！」

「た、助ける！」

男がゼロドライブとキックホッパーへ命乞いする。

「助けてくれたらこれからのこと、その、全てを教えてください」

「失せろ」

ノイズが男へ触れる。

触れた途端に炭化して消え去った。

「あつけない最期だったなあ」

「そこは同意、汚い奴だからもつとむごたらしい姿になるかと思ったんだけどなあ」

さて、とロイミュードのクリスが灰の中からオーズのドライバーを取り出す。

「話によれば、よつと」

オーズのドライバーが装着される。

「んで、話によれば」

「タカ！トラ！バツタ！」

「ヘンシン、だっけ？」

「タカ！トラ！バツタ！」

ロイミュードのクリスがオーズに変身する。

「さつきよりも体が軽くなったなあ、うん、良いかも」

胸部のバツタの紋章が輝く。

地面を蹴り、あつという間にゼロドライブの前に現れる。

「っ！」

振るわれるトラクローの斬撃。

ゼロドライブは後ろへ下がることで攻撃を回避する。

「へえ、今の避けるんだ！マスマス、好きになりそうだよ」

「何の、話だ！」

「うん？ああ、いけない、いけない。いつてなかったっけ？」

オーズは首を傾げながら爆弾を落とす。

「ボク、貴方のことが大好きなんだ。I LOVEユーってことだよ

！」

「はっ！」

「Oh？」

ジンと矢車、そしてクリムの思考が停止する。

「疲れた、帰るか」

「ジン、現実逃避はいかんよ！」

「ダーメー！マスターが邪魔者は潰せってことだから、無力化させて連れていくよ？愛人」

バツタのメダルを外してチーターのメダルに入れ替える。

「東郷！」

「ああ、くそっ！」

【スピスピスピード！】

ゼロドライブがスピードを上げてオーズと正面からぶつかりあうも押し負けたのは――。

「東郷!!」

攻撃を受けて後方へ吹き飛んだのはゼロドライブ。

オーズは接近してトラクロードでゼロドライブの体を切り裂いた。くるくると回転して地面に倒れるゼロドライブを庇うようにしてキックホッパーがキックを繰り返す。

「おっと、邪魔するなよお」

オーズのキックがキックホッパーの攻撃をいなして蹴り飛ばす。

地面に転がるキックホッパー。

「さて、愛人、ってあれ？」

前を見るもゼロドライブの姿がない。

オーズの死角からゼロドライブが裏拳を叩き込む。

【タカ！ゴリラ！チーター！】

拳が迫る瞬間、オーズの両腕に銀の拳が装着されてゼロドライブの攻撃を受け止めた。

「残念」

振るわれるゴリラの腕。

しかし、ゼロドライブは地面をすべるように移動して必殺技の体勢に入っていた。

【ヒツサーツ！フルスロトル！】

回転しながらエネルギーを溜めたキックをオーズへ放つ。

攻撃を受けたオーズは屋敷の中に吹き飛んだ。

「ああ、くそっ、何て奴だ」

「大丈夫かね？」

「まあな」

ゼロドライブが体を起こしてクリムが心配する。

首を振りながらゼロドライブは倒れているキックホッパーへ視線

を向けた。

「おい、無事か？」

「ハッ、この程度でくたばるかよ」

「だよな、さて、木場達と合流して」

「トリプルスキヤニングチャージ！」

「あ？」

聞こえた音にゼロドライブの反応が遅れた。

屋敷の中から飛び出したオーズ。

タトバキックがゼロドライブの体を打ち抜いた。

小さな爆発と火花が連続して起こり、変身が強制的に解除されてしまふ。

「いやあ、良いのもらっちゃったよ。このオーズっていうの？それがなかったらボディは破壊されていたかもねえ」

屋敷の一部から一瞬で姿を見せるオーズ。

「チイ、クロック——」

「はい、邪魔」

片腕に装着されていた赤い円形のディスクから放たれた光弾がキックホップを襲う。

攻撃を受けて強制的に変身解除がされた。

「矢車!!」

「いかん、このままではマズイ。撤退しよう！」

「逃がさないよ。そこに転がっている奴と愛人、絶対に殺す。ああ、でも、素敵だなあ……ボクの攻撃を受けてここまで平然としているなんて、愛をうけいれないってでもいうつもりかあ？逃がさねえぞ、最初から受けていた方が幸せだったと思わせるほど痛みを与えて、与えて、与えて！そっから愛してやるよお！」

「何ていう歪んだ感情だ！」

クリムが驚愕する中でジンはちらりとシフトブレスからプロトタイプPのシフトスピードを外す。

「おい、クリム……確か正式にロールアウトされたヤツあったよな？」

「そうだが、まさか!？」

驚くクリムに対してジンは笑みを浮かべる。

「こういう危機的状況だ。プロトトライドロンに置いてあるギアを取りに行ける時間もない。だったら、使うしかないだろ」

「無茶だ！そんなことをすれば、キミの体が！」

「何か奥の手があるの？ だったら使った方がいいよお？ 片づけたら別行動している方も始末しないといけないしい、あ、でも、愛人はただじゃ、殺さないよ？ 愛を受け付けねえってんなら脳髓引っ張り出してさらに痛みと愛を教えてやるよお」

「クリム。敵は逃すつもりはねえんだ。矢車もダメージがあつてダメ。援軍も期待できない以上、わかつているだろ？」

「しかし……」

「クリム!!」

洩るクリムヘジンは叫ぶ。

「俺は既に覚悟という名のエンジンを回した。後はてめえだ！ どうする？」

「……OK、シフトカー！」

クリムの叫びで現れる数台のシフトカー。

三台がオーズの行く手を阻み、その中の一台がジンの手の中に納まる。

「体のダメージからして戦闘は五分が限界だ。覚悟を決めた！ 一緒に走ろう！ Start your engine」

「うし」

赤く塗装されたシフトカーを握り締めてシフトブレスに装填する。

「変身！」

【ドライブ！ タイプスピード！】

「ぐうううー！」

変身と同時にジンの体に激痛が走る。

光と共に装甲が展開された。

ゼロドライブと似ている点が多いが胸部に装着されたタイヤ、全体的に赤い色のドライブ。

正式な適合者が使用するはずのドライブ。

東郷ジンでは確実に使いこなせない力だ。

「ぐう！くそっ……」

「ジン！やはり」

「止まらねえよ！止まっている暇なんかねえ！」

「あれ？姿を変えたんだね？でも、無駄だよ？ここで叩き潰して」

【タイヤコウカーン！ミッドナイトシャドウ！】

接近したドライブはタイヤ交換してエネルギー状の手裏剣を振るう。

ドライブの攻撃を受けて大きくのけ反るオーズ。

【タイヤコウカーン！マックスフレア！】

炎を纏ったドライブの拳が反撃を許さないという風にオーズへ連続攻撃を叩き込んでいく。

「愛している、愛している、愛している、愛している、愛している！これだけ言っているのに、なぜこっちの愛を受け入れねえ」

「うる、さい！」

バチバチと火花を散らしながらドライブはタイヤ交換を続ける。

【タイヤコウカーン！ファンキースパイク！】

交換したタイヤについているトゲ、ミドルスパイクニードルが放たれてオーズの体を切り裂いていく。

シフトスピードのタイヤへ戻した時にはバチバチと各所から火花が走っていた。

「時間がない！あと一分」

「それだけあれば、十分だ！」

エネルギーを纏いながら駆け出すドライブ。

攻撃を受けていたオーズがメダルの色を統一してスキャンさせようとする。

しかし、ドライブの必殺技の方が早い。

【ヒッターーツ！フルスロットル！】

必殺のキックがオーズの鎧を貫通して中のクリスの姿をコピーしたロイミュードを貫いた。

「だあああああああ」

バチバチと火花を散らしながら必殺のキックはオーズを屋敷の奥へ叩き込んだ。

地面へ降り立つドライブ。

バチンと大きな火花を散らして変身が強制解除される。

「グフッ！」

せき込みながら吐血するジン。

その事に気付いたクリームが叫ぶ。

「大丈夫か！ジン！」

「まだ、生きているよ……」

立ち上がるうとしたところで光弾がジンに迫る。

動こうとしたところでガクンと膝がもたついた。

「あ、ヤベ」

動きが鈍った瞬間。

「ジン！」

屋敷から鎧を纏った響が光弾を拳で破壊する。

「あ、サンキュー、響」

「ジン、大丈夫？」

「ごめん、少し限界……あと、頼む」

響にもたれる形でジンが倒れる。

「ジン、ジン!?!」

「落ち着きたまえ、気絶しているだけだ。それより、この場は危険だ！すぐに」

「逃がすかよおおおお！」

半壊した屋敷からコピークリスが姿を見せる。

怒りで顔を歪めながらロイミュードに戻った。

「お前かあああああ！」

「響！落ち着くんだ。ジンや矢車君がボロボロだ。木場君と合流して離脱するんだ」

「チィッ」

舌打ちしながらジンと地面に転がっている矢車を抱える。

「GO！プロトドライブロン！」

クリムの指示で現れるプロトトライドロン。

「運転は？」

「俺がやる」

むくりと矢車が目を覚ます。

「師匠」

「これくらいはできる。響、俺を運転席へ、東郷は助手席に乗せろ」

「わかりました」

矢車の指示で二人をプロトトライドロンへ乗せる。

走り出すプロトトライドロンの上に飛び乗った響。

矢車がアクセルを踏んだプロトトライドロンはドリフトしながらその場から走りだす。

「逃がすかよおおおお！」

ロイミュードが光弾を構えようとした時、屋敷の上から灰色の巨大な影が現れる。

「ぐあっ！」

防ぐ暇もないまま、巨大な影の足によつて屋敷の中に押し込まれるロイミュード。

ちらりと反撃がないことを確認した巨大な影はそのまま疾走する。

第五話：再会と彼らの始動

「ああ、いつてえ」

「マッドドクターの治療を受けてその一言で済ませられるキミの体は規格外すぎるよ」

春日部探偵社の寢室。

そこで起き上がったジンへ傍にいたクリームが声をかける。

「まあ、ドライブのデータが入ったから良かったんじゃないか？」

「そういう問題ではない！」

クリームが怒鳴る。

「キミは時々、自分の体を大事にしていない節がある！そんなことではキミを心の支えにしている響が悲しむことになってしまうぞ！」

「……わかつているよ」

むくりと体を起こした際に羽織っていたシャツが落ちる。

胸元に走る切り傷。

ちらりとジンは手に触れる。

「まだ、痛むのかね？」

「まさか、もう何年も昔の傷だ」

落とした上着を拾って、着替えを済ませる。

ドライブドライバーを手に取って外に出た。

「あ、東郷君」

オフィスのある部屋に向かおうとすると木場が待っていた。

「どうした？木場」

「いや、助けた女の子のことだよ」

「ああ、それなあ」

まだまだ問題が山積みだったことを思い出す。

「えっと、お腹が空いていたらしいからコンビニ弁当をあげただけど」

「まあいいや、話を聞くから」

呆れながらオフィスのドアを開けたジンは絶句する。

ドアの向こうでは銀髪の少女が弁当を食べていたのだが、弁当の

ケースからおかずは飛び散り、食べかすが周囲に散らかっていた。

「これはあ、随分と汚いなあ」

「シツ」

ジンが顔を上げるとぶるぶると体を震わせる少女。

「まあ、ほら、色々あるよね、若いし」

「てめえはどっかの親父かあああああああああ！」

銀髪の少女が叫びながらとびかかってきた。

ジンは突然のことに反応が遅れてしまう。

呆然としていた木場が意識を取り戻すまで室内で追っかけっこがはじまった。

数分後。

「……アタシのこと、覚えているか？」

落ち着いて向かい合うように座った状態で少女、雪音クリスが問いかけてくる。

クリムを除いて他のメンバーは席を外してもらっていた。

彼女の質問に俺は頷く。

「雪音クリス、音楽家の両親を持った少女で、まあ、昔は仲が良かったな」

口から出る言葉は他人事のようなもの。

まあ、八年以上も面識がなければよそよそしくもなる……だけでは
ない。

「今まで、何してた？」

「この事務所をやっていたよ。困っている人を助けたり、金を稼いだりな」

「そうか……」

「雪音クリス君、こちらからも質問良いだろうか？」

「ああ……」

クリムの姿に彼女は驚きつつも頷いた。

「情報によれば、キミは国連に保護されてから日本へ戻った。それから数年間の情報がないのだが、今まで何を？」

「コレを使いこなそうとしていた」

胸元から赤い水晶のようなものがついたペンダントをみせる。

「何だい、それ？」

「これは、とんでもないエネルギーを秘めているな」

サーチしたクリムが驚きの声を漏らす。

「何だ、これ？」

「シンフォギアとかいう力らしい。アタシはこれに適合しているらしいから協力してくれないかって日本の組織に所属していた。つっても数か月経たずにくそ野郎に拉致されちまったけどな」

彼女は自身の体を抱きしめる。

誘拐された時、どんな気持ちだったのかは彼女しかわからないだろう。

俺としてはまさか、あんな奴に誘拐されているとは思っていなかったし、知らなかったとはいえボコボコにしたから少しばかり気分は落ち着いていた。

「雪音クリス君、辛いと思うが……誘拐された時、何をされたのか、覚えてる限り教えてもらえないだろうか？」

「歌わされた」

「は？」

「歌？」

彼女の話によるとネフシュタンの鎧とかいうものを起動させるために歌うことが必要だったらしく、逆らえば電撃を浴びせられて、歌わされたという。

歌って鎧が起動した後は軟禁状態だったという。

その際に彼女が怯えていたのを俺とクリムは追及しなかった。

あのくそ野郎が何かしようとしたことは容易に想像ができる。

「キミを閉じ込めていた黒幕の名前は聞いているかね？」

「ファイ……ネ、確か、ファイネっていつていた」

「ファイネ？これまた変な名前だな」

一通り話し終えたタイミングでクリムは質問を終えた。

さて、ここからが問題だ。

「春日部国際警察にキミの身柄を預ける」

「なっ！」

俺の言葉に彼女は目を見開く。

「ジン、それは」

「一応、本願寺さんに事情は話す。その後は警察に任せた方がいいだ

ろう。一応、搜索願が出されているかもしれないからな。犯人と間違えられたら堪らない」

「ん、だよ」

バンと机が叩かれる。

彼女が怒りに染まった目でこちらをみていた。

それを俺は表情を変えずに向ける。

「何なんだよーアタシみたいな呪われている奴は要らないってか！」

「誰もそんなことは言っていない。キミは普通の生活に戻るべきだと俺は思っている」

「ぎっけんな！この——」

「うるさい」

ガチャリとドアが開いて響がやって来る。

寝起きで機嫌の悪そうな顔をしている響は俺の方へやってくると腕を掴む。

「お腹空いた。ご飯、食べに行こう」

「……そう、だな」

「待てよ！こっちはまだ」

「うっさい、チビ」

ギロリと響が睨む。

バチバチと二人の間で見えない火花が散っているように思えた。

「ジンと昔に何があったか知らないし、キョーミもない。今は私のジन्दから、過去の遺物はとっとと失せろ」

「っ！」

「お腹空いた、行こう」

もういいという風に響は俺の腕を引っ張って外に出ようとした。

彼女は立ち上がると俺を突き飛ばして外に出ていく。

「待ちたまえ！」

クリームが叫ぶも彼女は振り返らない。

一瞬、みえたもので少しばかり気分が沈んだ。

「……今のキミは冷静とはいえなかったな」

「そんなの」

自分が一番、わかっている。

彼女を守るつもりが傷つけている。昔からずっと似たようなことばかりを繰り返しているのだから。

はあ、本当に。

「悪い、響、飯は適当に済ませてくれ」

「あ」

俺はクリスを追いかけることにした。

「あれ、ジン？」

雪音クリスはすぐに見つかった。

彼女の傍にはどういうわけか城戸真司がいる。

「何やってんだ？」

「いやあ、ご飯をたかりに行こうとしたらぶつかっちゃっていき、泣いていたから気になって」

「お前、流石に十代の女の子に手を出すのはどうかと思うぞ」

「違うって！それより、この子は……」

「知り合いだ。一応」

「何の用だよ」

「こちらをみる彼女の目は鋭い。」

「話があった。そっちはないかもしれないけれど、さつきは冷静じゃなかったからな」

「アタシはない」

「まあまあ、そんなギスギスしないでさ？何があったか知らないけど

や」

「うつせえ！関係のない奴が割り込むな！」

「そりゃ、俺は関係ないよ！でもさ、親友と、親友の知り合いが喧嘩しているのを無視するなんてできないじゃんか！」

口をとがらせる真司から告げられるのは善意の言葉。

黒い感情など一つもない。

純粹に俺と彼女のことを心配してくれている。

「すまないな、真司、こつちは大丈夫だから先に事務所へ入っていくれるか？終わったら何か食べに行こう、奢ってやるよ」

「やったー！待っているからな！」

子供みたいな笑顔を浮かべて真司は探偵社の方へ走っていく。

俺とクリスは向かい合う様に立つ。

「まずはごめん、突き放すようなことばかり行って」

「今更……」

「そうだな、今更だ。俺はお前を助けた後に見捨てる様に逃げたからな」

「ちがっ！それは……アタシが、お前のあの姿に恐怖して」

「誰だって恐怖するさ。目の前であんなものをみれば」

少し、クリスへ近づく。

彼女は下がらない。

まるで向き合おうとしているかのようにこちらへ踏み出す。

「さつきも俺はキミを遠ざけようとした。でも、それはキミが嫌いとか、そういうものじゃないんだ。できれば、キミには普通の生活を送ってほしい。そう思ったから警察へ預けようとした」

「ジンは、アタシのこと、嫌いなのか」

「嫌いじゃない、大事、だと思っている。だって、血は繋がっていないとはいえ家族同然に過ごしていたんだから」

幼少期、俺は雪音夫妻のところでお世話になっていた。

両親が事故で死んでしまったからだ。天涯孤独になってしまった俺を雪音夫妻は引き取り、息子のように面倒をみてくれた。そして、クリスが生まれて四人家族のように生活をしてきた。

でも、その生活は唐突に終わりを告げる。

八年前の南米のバルベルデ共和国。

そこで、俺は。

「っ！」

俺は振り返ると同時にクリスを守るように抱きしめる。

体を貫通する熱に顔を歪めた。

「っうう」

「ジン!？」

撃たれた。

利き腕じゃない方だが、血が少しばかり零れた。

「何だ、アンタら?」

道を阻むように武装した集団が立っていた。

何人かが拳銃を突き付けて、首筋には黒い奇妙な水膨れのようなものができている。

「その女をこちらへ渡せ」

流暢な英語で一人が銃を突きつけながら俺へ警告してくる。

見た目もそうだが、この人ら日本人じゃないな。

白昼堂々と拳銃を振り回しているという事に警察、しっかりしろよ
といたい。

「悪いけど、彼女は渡せないな」

「死ね」

男たちが一斉に銃を撃つ。

「悪いけどさ」

飛来したダークカブトゼクターが全ての弾丸を弾き飛ばす。

「簡単に死ぬるかよ……俺の後ろには大事な奴がいるんだからさ」

飛来したダークカブトゼクターを掴んでベルトへセットする。

【Henshin】

ヒビイロノカネの鎧が展開されてダークカブトに変身する。

「カメンライダー」

武装した集団の誰かが言葉を漏らす。

チツチツと指を動かして否定する。

「悪いけど、俺はそんな大層な存在じゃない。最低限の人しか守らないくらいでなしだよ」

カブトクナイガンで敵の一人の銃を撃ち落とす。

光弾で撃たれたことで落ちた銃はドロドロに溶けている。

「カイザの定番だ！」

リーダー格のサングラスの男が叫ぶと首筋に水膨れのようなものがついた連中が前に出る。

着ていた上着を脱ぎ捨てて、中から現れたのはデルタギアと酷似したドライバー。

「変身！」

眩い光と共に男達は黄色い鎧を纏った戦士へ姿を変える。

Xを模した仮面に紫の複眼、黒銀色の鎧。

腹部のドライバーの側面に武装がついている。

「まさか、カメンライダーがいるとは驚きだが、これだけのカイザがいれば勝ち目はないだろう。邪魔をしないのなら命は取らないぞ？ベルトと女は頂くがな」

「冗談、てめえらみたいな下種に渡すわけないだろ」

肩をすくめながら駆け出してカイザとかいう集団とぶつかりあう。

「ジン……」

アタシは目の前の光景をみていることしかできない。

一対多数だというのにジンは一歩も引かない。それどころか連中と互角に戦っていた。

だが、決定打がない。

違う。

私が邪魔をしているんだ。

ジンは私へ弾丸や敵がいかないように気を配っている。

そのために敵の攻撃を受け流すか、無力化させるばかりで反撃ができていない。

足手纏い。

四文字がアタシの中に浮かぶ。

何も、変わってねえ！

八年前にジンが助けてくれてから。

爆撃からアタシを庇ってジンを拒絶してから何にも変わってねえじゃねえか！

苛立ちと同時に広がるのは無力感。

そして。

——守りたい。

ジンを守りたい。

昔は拒絶してジンを傷つけて、何をといわれるかもしれない。

パパとママを失って、拉致されて、怖い思いばかりしてきたアタシをジンは拾い上げてくれた。

そんなジンを守りたい。

気付けば、頭の中に歌が浮かんだ。

「っ！」

アタシは迷わずに胸元のペンダントを握り締めて歌った。

——イチイバル。

詳しいことはわからねえけど、シンフォギアという特殊な力。光と共にアタシは鎧をまとっていた。

両手に構える武器が変化してガトリングになる。

「ジンに」

ジンを狙わないように注意しながら銃口を向ける。

「手を出すなあああああああああああ！」

叫びと共に無数のミサイルと弾丸が放たれた。

「うわーお」

ダークカブトは背後からの支援に感嘆の声を漏らす。

数が多くて少しばかりでこずっていたが、後ろでクリスが響と似たような鎧をまとい、ミサイルやら弾丸を放ってくれたことで時間ができた。

「昔とは、違うようなあ」

力強い意志を持つて戦おうとしている彼女の姿を見て、仮面の中でため息を零す。

彼女が折角、おぜん立てしてくれたのだ、ここで負けるなんて。

「男の子じゃねえよなあ！」

【キャスト・オフ】

「チェンジ・ビートル！」

キャスト・オフしてライダーフォームになると同時にクロックアツプしてカブトクナイガンで次々とダメージを与える。

「ライダーキック」

「ライダー、キック！」

横一列に並んだタイミングでエネルギーを纏ったキックを放つ。

「クロック・オーバー」

終了の音声と同時にカイザたちが青い炎を吹き出しながら灰になつて消滅していく。

カイザが全滅したことで武装した連中は悲鳴を上げながら逃げ出した。

「ジン！」

変身を解除したところでクリスが駆け寄って来る。

「お前、肩を撃たれて」

「ああ、そのことなら」

「バカ！すぐに手当てを……」

無理矢理、上着をめくられる。

だが、

「傷が塞がっている？」

「まあ、あの後、色々あつてき……中々、死なねえ体になった」

「アタシの責任、だよな？」

「違うよ」

疲れてぺたんと座り込む。

あれは事故のようなものだ。

戦場とはいえ、あんなところに高性能地雷が埋まっているなど、誰が予測できよう。

「ただ、運が悪かった……それだけのことだ。それだけの事実」
「だからって」

クリスが服の裾を掴む。

必死に、何かを繋ぎ止めようとするように。

「泣くなよ」

「バカやろー！泣くわけねえよー！」

「そっか、そうだよなあ、はあ……」

クリスが泣き止むまで俺はそこから動けなかった。

「どういうことだ!」

『何かしら?』

襲撃した男は通信機の向こうにいる協力者へ叫ぶ。

相手は興味なさそうに尋ね返す。

「あんな、あんな化け物がいるなんて聞いていないぞ! くそつ、割に合
わねえぞ!」

『事前に伝えていた筈よ。連中は危険だと、だから委員会から横流し
したカイザを与えた』

「だとしても、あんなつ!」

男は歩みを止める。

暗闇の向こうに誰かが立っていた。

男は腰のホルダーからいつでも拳銃を抜ける様に身構える。

「……誰だ」

通信機を隠して静かに問いかけた。

「キミ達が何者かということに興味はないんだ」

闇の中からゆっくりと現れたのは細身のどこにでもいるような日
本人。

愛想笑いを浮かべながらゆっくりと男へ近づこうとしていた。

「来るな」

銃を抜いて男は警告を飛ばす。

「さつきもいったけれど、キミ達が何者かということに興味はない。だけど、僕達、ううん、僕の大事な場所に手を出すような連中は何があろうと許さない」

「動くなどいつている！」

警告を飛ばす前で彼の顔に黒い筋が入る。

「僕の居場所を奪う奴は許さない！」

ホースオルフェノクに姿を変えた木場勇治に男は悲鳴を上げながら発砲した。

「死んだわね」

雑音の走る通信機を女性は放り投げる。

薄暗い屋敷の中、全裸の女性は豪華な椅子へ深々とその体を沈めた。

彼女は計画が失敗したことを察するがどうでもいいという表情を浮かべる。

「原作」という情報を聞いた時はバカらしいと感じた。

そんなもの通りに動くつもりはない。

だからこそ、あの男から必要な情報を引き出した後、その道筋、全てを壊すことにした。

思い通りにいかなかったこともあったが修正をすればいい。

「それにしても、脅威ね」

フィーネが思い浮かべるのは春日部探偵社の連中。

あの情報がなければおそらく気付かなかっただろう。

それほどまでに連中の隠密性は異常過ぎた。おそらく「二課」の連中も把握していない。

調べれば、調べるほど、フィーネにとって春日部探偵社は脅威だ。

作られたのは昭和初期。名もなき探偵が築き上げてそこから現在は四代目所長である東郷ジンが率いている探偵社は春日部シティにおいて駆け込み寺として知られているばかりか裏の世界では決して喧嘩を仕掛けてはいけな場所と言われていた。

「シンフォギアと異なる力か……確かにノイズだけでは心もとないだろう、だが」

そのための手駒は揃えている。

「ご機嫌のようですねえ、フィーネ」

「あら、来ていたのね」

フィーネは振り返らない。

だが、そこに彼らは来ていた。

原作とやらを話した男の情報を盗みみて、フィーネが揃えた手駒。

計画の全貌は知らない、けれど、フィーネに付き従う優秀な怪物たち。

四つの手駒にフィーネは言葉を投げる。

「計画は動き出した。貴方達にも活動してもらおうわ。邪魔をしてくるであろう連中を潰してもらうためにね」

「ええ、任せてください。そのために我々はいるのですから」

一人は領き、一人は妖艶にほほ笑み、一人は目線を合わせずだるそうにしている。一人は紫のライダースーツに身に纏い無表情に佇む。

「頼りにしているわ」

フィーネは机の資料へ視線を向けた。

「私は必ず目的を果たす」

第六話：拳と銃と剣

特異災害対策機動部二課という国家秘密組織がある。

元々は大戦時代に存在していた風鳴機関を基にした組織、現在はノイズや様々な脅威に対抗するための組織としての活動を主としていた。

二課にはシンフォギアと呼ばれるシステムがある。

聖遺物と呼ばれる欠片のエネルギーを用いて構成される鎧型武装であり、限られた人間しか使用できないという問題はあがるが、ノイズという脅威においてシンフォギアは有用性を持っていた。

風鳴弦十郎は二課の司令官。

元々、警視庁公安部に所属していた彼を慕う者が多い。

そんな彼の表情は険しかった。

「弦十郎君」

「了子君か、すまない」

険しい表情に研究者で同じ二課のメンバーである櫻井了子が声をかける。

「どうしたの？ 険しい顔をして」

「いや……この情報に何ともいえんと思ってるな」

「春日部探偵社のことね」

彼らの手元には二課のエージェントが集めてきた春日部探偵社の情報があった。

春日部探偵社についての情報を集めることは簡単だ。

問題は。

「流石は春日部探偵社……いや、所長が優秀ということか」

「最低限の情報しかウチが入手できないなんてねえ」

「ああ、だが、それよりも」

弦十郎の視線はエージェントが撮影した二枚の写真。

立花響と雪音クリスという少女。

「ガングニールを纏う少女と俺達を守り切れなかった少女があそこに

いる」

「どうするの?」

「接触すべきだろう、ノイズに対抗するための力が必要だ……勿論、協力者として」

「そうねえ、うちのシンフォギアは翼ちゃんだけだし」

弦十郎は拳を握り締める。

「そういえば、翼は」

「あ、そのことなんだけど」

ぺろりと舌をだした彼女の表情で弦十郎は察する。

要らぬ火種が起ころうとしていることで弦十郎は急いで二課の本部を後にした。

「平穏が欲しい」

あれから一カ月が過ぎた。

雪音クリスはうちのスタッフになった。

その代わりとすべきか、クリム・スタインベルトは探偵社を去る。

彼は目的があり春日部探偵社に属していた。その目的を果たすためという事で別れた。

——来るもの拒まず、去る者追わず。

探偵社を設立した初代所長が決めた方針。

代替わりしても決して破つてはいけないいくつかの約定。

クリームがいなくなったことで不便なことが発生しているがいずれ慣れるだろう。

「ジンさん、現実逃避、終わった?」

「もう少し、してえよ」

しんのすけに言われて俺は前を見る。

オフィスにあった机の上で互いにメンチを切りあう二人の少女。

元の顔が整っているだけに殺意に満ち溢れている顔、それはもう、

恐ろしいものだ。

女性が大好きなしんのすけですら逃げの一手しか考えていない。

かくいう俺も逃げ出したい。

だが、それをすれば目の前の二人は即座に標的を俺へ切り替えて襲い掛かるだろう。

過去に実践して身をもって知ったことである。

この場に助けしてくれる連中はいない。

いるのは巻き込まれまいとするしんのすけだけだ。

「てか、お前らはなんでにらみ合っているんだ?」

「ジンと買い物、行く」

「ア?ざけんなあ、ジンと買い物に行くのはアタシだってんだろ!」

そうだった。

事務所に置いてあったお菓子などがきらしていたからその買い物へ行くことにしたんだ。

そこでクリスと響がついていくと言いついて出て現在。

「この喧嘩、ジンさん折れないと終わらないんじゃない?」

「はあ、そうなるかあ」

余計な騒動を呼ぶような気がするから抵抗があつたが仕方ない。

「そこまで言うなら二人で行くぞ」

にらみ合っていたが満面の笑みでこちらへやってくる。
互いを潰そうとしながら。

「前途多難だねえ」

しんのすけの漏らした言葉に俺は沈黙で答えた。

全く、その通りだよ。

再びやってきたシヨツピングモール。

前はノイズの妨害があったが、無事に終わりそうだ。

「お前ら、頼むから背後で喧嘩もどきしないでくんない？」

買い物は三人でやってきている。

しんのすけ？ 奴は逃げたよ。

「だって……」

互いににらみ合う二人。

「何が原因なのかは知らないがほどほどにしとけよ。警察の厄介とか
ごめんだから」

俺の言葉にしゅんと俯いた二人、少し言い過ぎただろうか？

近くのカフェを指さす。

「どうせだから、あそこで何か食べるか」

「うん」

「ああ」

提案に二人は嬉しそうに頷いた。

ま、余計な騒動を起こさずに仲良くしてくれるならとやかきうつつ
もりはない。

喫茶店に入りテーブル席へ腰かける。

運ばれてくるのはパフェ。

二人ともおいしそうにパフェを頬ぼっている。

これだけならどこにでもいる普通の少女にみえた。

だが、実際は普通の人を抱えるにしては重た過ぎる十字架めいたも
のを背負っていた。

果たして、彼女達が普通に生活することはできるのだろうか？

切欠があれば、あるいは。

「バカバカし」

何を考えているんだか。
ため息を零した直後、店をノイズが襲撃した。

「さて、どうですかねえ？」

タキシードに帽子の初老の男性が片手に独特なデザインの杖らしきものを持ちながらノイズが突撃した店を眺める。

突入して五分。

通常ならば、ノイズによって店内の人間は全て灰にあっていよう。

そう、通常ならば。

「的確な射撃ですねえ」

店内から放たれた光弾。

それは男の傍にいたノイズ全てを射抜いた。

土煙を切り裂くように一条の光が突き抜けて男へ迫る。

「おっと」

杖を操作してノイズの壁が形成される。

ノイズの壁が音を立てて吹き飛び、眼前に拳が突きつけられた。

「人間？」

「ええ、驚きましたか？」

響は目の前にいた相手が人間だという事に気付く。

男はからかうように首をかしげて指を鳴らす。

鳴らした直後にノイズが後ろから響を襲おうとする。

「ちよせいー」

店内から無数の弾丸の雨とミサイルがノイズを射抜いた。

「さて、色々聞きたいことがある。だけど、まずは俺が食べようとしたものを台無しにしてくれたから一発くらい殴らせろよ」

ゆつくりと店内から現れたのはデルタ。

フォンブラスターを構えながら苛立ちを隠さずに杖を構えている

男へ告げる。

「おい、下がれ！」

「うるさい、チビ」

クリスの叫びに響は後ろへ下がる。

入れ替わるようにして放たれた無数のミサイル。

男は冷静に懐から銀色のUSBメモリを取り出す。

ミサイルが直撃して大爆発が起こる。

「うしー」

だが、それは一瞬のことだった。

巻き起こる竜巻。

爆風を消し去る。

「中々にやりますねえ」

現れたのは白い怪物。

侍を連想させる姿だが、全身から放つ気迫は只者ではない。

その気迫にあてられてクリスは後ろへ下がってしまったそうになる。

クリスの横からデルタが前に出た。

「(ジンー!)」

デルタはゆらりと面倒そうに体を動かしながら前に出て、白い怪物へ問いかける。

「アンタ、何者だ？」

「私の名前はウエザーと呼んでいただく。今日はキミ達へ宣戦布告しにきました」

「宣戦布告う？」

「その通り、我々はフィーネに属するもの。フィーネはキミ達を酷く警戒していてね、だから叩き潰すことにした。春日部探偵社、キミ達は標的になったのですよ」

「あ、そう、まあ、俺達と敵対するなら、覚悟しとけ？」

デルタは親指を下へ向ける。

「俺達はしぶといし、くらいついたら簡単には離れない」

「覚えておきましょう、では、挨拶はこれくらいにて」

「逃がすわけねえだろ？」

響が拳を振り上げようとした時、ウエザーは体からメモリを排出した。

「響、待て！」

人の姿の前に拳が迫る瞬間。

バイクが響へ激突する。

咄嗟に両手を交差して攻撃を防いだようだが、衝撃でデルタの方まで飛んできた。

「大丈夫か？」

「うん、でも、アレ」

いつの間にかウエザーの男は姿を消している。

タイミングを計っていたのだろう。

入れ替わるようにして巨大な壁が現れた。

「うお？」

「何だ、これ？壁」

「剣だ!!」

少し離れてみればわかるのだろう、地面に突き刺さっていたのは巨大な剣。

その上に立つのは青と白を基調とした鎧を纏った女性。

「ああ、これは」

面倒な相手がやってきた。

デルタは仮面の中でため息を零す。

「デルター！この前の雪辱を晴らさせてもらおう！」

「あ、こっちはそんな気分じゃ」

「ウオイ」

横から手が伸びて胸倉をつかまれる。

瞳から光を無くした状態のクリスがのぞき込んでいた。

かなり怖い。

「一度しか聞かねえぞ？あの女はなんだ」

「あー、一方的に敵視されている感じ？」

「また女か！そのちんちくりんはともかくして、何でこうも！」

「うるさい、チビ」

「アア？」

「ぶっ壊すぞ」

胸倉が解放されたので後ろへ下がろうとしたところで剣が飛来してきた。

「今度は逃がさない！その二人そろってベッドの上で話を聞いてもらおう！」

「ああ!？」

刀使いの言葉に拳と銃を構える二人。

どうやら敵として認識されたらしい。

「ぐ」愁傷様

デルタは少し離れることにした。

「援護よろしく」

「指示すんじゃねえ！」

響は一瞬で前へ踏み込む。

悪態をつきながらもクリスはガトリングと腰部分のミサイルで牽制をする。

風鳴翼は刀状態のアームドギアで弾丸を弾き飛ばして、正面から響の拳を受け止めた。

受け止めたが衝撃は殺せず、後ろへ下がってしまう。

「奏のギアをこんな使い方！」

「また、それか」

翼の言葉に響は呆れた声を漏らす。

出会う度に奏、奏といってくる。

その彼女の言葉が。

「ムカつくんだよー」

拳を振るう。

腕のパーツがチャージするように一度、開かれる。

そして、閉じることで響の拳の威力が増す。

「そんなものー！」

対峙する翼が正面から刃で受け止めようとした。瞬間、横から爆風が起こる。

まるで予測していたように響の体が横へ吹き飛ぶ。

くるくると回転しながら足からアンカーのようなものが射出されて一気に跳躍。

振り切った刀を戻すことは出来ない。

風鳴翼の脇腹へ必殺の一撃が直撃するという瞬間。

横から二つの影が割り込んだ。

一つは響の拳を正面から受け止める。

もう一つは地面を踏み砕いて飛来していたミサイルを瓦礫で破壊した。

しばらくして土煙が晴れて乱入者の正体が明らかになる。

「ジン!？」

「司令！」

一人はデルタとしての変身を解除した東郷ジン。

赤いシャツに鍛え抜かれた肉体を持つ男、風鳴弦十郎。

二人の突然の乱入に戦闘は強制中断される。

「おい、この靴、高いんだぞお」

「あー、いってえ、関節外れたかも」

靴がボロボロになったことにショックを受ける弦十郎と腕をぶるぶるしているジン。

「ありえねえ、今の受けてその程度かよ」

クリスが武装を解除しながら呆れる。

規格外な出来事に遭遇してばかりだったが、今回は特に一番だと彼女は思う。

「やはりと思ったが仮面の戦士はキミか、東郷君」

「その変な刀娘、もしかしてと思ったが弦十郎の旦那の関係者か」

二人してため息を零す。

「司令！そいつらを知っているのですか！」

「ああ、知っているとも……」

弦十郎は悲痛な表情で彼をみる。

対してジンは興味なさそうに羽織っている上着を揺らす。

「疲れた、帰るぞ」

ベルトを肩にひっさげながら歩き出すジン。その姿に翼は我慢できな

「貴様、待て！」

「待たない、疲れた、帰る、じゃ、旦那、後はよろしく」

「……わかった」

「おじさま!」

翼が信じられないという表情を浮かべている中で響とクリスマスも鎧を解除して彼を追いかける。

「やはりと思っていたが……彼と会うことになるとは」

「あの男のことを知っているのですか?」

翼の言葉に弦十郎は渋る。

「おじさま!」

「彼の名前は東郷ジン、俺達、大人が守れなかった子供だ」

「ねえ、ジン」

「なんだ?」

愛車を運転する彼に響は声をかける。

ジャンケンに負けたクリスは後ろでぶーたれながらも耳を澄ませていた。

「あの人外みたいなオッサンと知り合い、なの?」

「そうだなあ、知り合いだ。まあ、因縁ありきの関係だがな」

「因縁?」

首をかしげる響にジンはそこから先を言うべきか悩んだ。

しかし、彼のことだから響やクリスの纏う鎧について問い合わせて

くる可能性がありえる。

それを考えれば今のうちに話すべきかもしれない。

「数年前、まあ、三代目の所長の時なんだが、連中、特異災害対策機動部と仕事をする機会があった……聖遺物とかいう特殊な力を宿した物質の確保という事で俺達は呼ばれた」

「あ？探偵なの？」

ふてくされていたクリスが尋ねる。

「探偵なんだがなあ、その時の所長によって異なるんだよ。当時は発掘とかに興味津々だったからな……」

ジンの脳裏に焼き付いて離れない。

飛び交うノイズ。

中心でケタケタと笑って狂った人物。

そして、届かなかった手。

自然とハンドルを握り締める手に力がこもる。

「ジン？」

「どうしたんだよ」

「ああ、何でもない。その時に探偵社のメンバーが犠牲になったんだよ」

「ノイズに？」

「いいや、人の手によって」

告げた言葉に絶句したことがわかる。

「響、クリス、俺達、探偵社の相手をするのはノイズや怪物だけとは限らない。中には醜い人間、犯罪者もいる。少し前の組織が良い例だ。忘れるなよ。一番、恐ろしいのは人間だ」

話をしている間に探偵社のビルがみえてきた。

「ま、面倒な話は終わりにしてなんか食べに行くか」

探偵社の道へは行かずに別のルートを選ぶことにした。

登場人物

東郷ジン

年齢：23

春日部探偵社現所長（五代目）

白髪交じりの黒髪の少年。

灰色を基調とした上着を羽織っている。

どんな依頼も必ず達成する春日部探偵社の所長。

争いごとにも対応できるほどの戦闘スペックを持っている。

OREジャーナルの城戸真司とは腐れ縁ながらも親友である。

親からもらい受けたシトロエン・2CVを愛用している。

マスコミの心ない報道でボロボロになった響を保護したり、過去に傷を持つ人を探偵社のスタッフとして雇っている。

クリム・スタインベルトとはロイミュード撲滅の協力者として関係を築いている。後にドライブの適合者を見つけて探偵社を離れたクリムとも交流は続ける。

デルタギアとダークカブトのベルトを所持しており、世界に紛れ込んでいる転生者と何度も戦ってきた。

響

年齢：16

春日部探偵社スタッフ（戦闘面対応）

パーカー、もしくは口元をマフラーで隠すような服装をしている少女。

本名は立花響。

二年前に起こったツヴァイウイングの悲劇と言われるノイズ襲撃事件で生き残った一人。本来ならば、明るい性格なのだが、事件の後に心のない報道によって周囲から拒絶、幼馴染もいつの間にか姿を消

したこと、父親が蒸発したことが切欠で精神が崩壊寸前までいつてしまい、野垂れ死ぬところをジンに助けられる。

ジンによって母と祖母と一緒に救われたことから彼に執着に近い愛情を抱く。

二年前の事件で体に何かの破片が埋め込まれていたが摘出される。

それ以降、ノイズに対して憎悪に近い感情を抱き、感情が高ぶると鎧（後のシンフォギア）を纏うようになる。

鎧などを破壊の力と称して、自身は破壊することしかできないと思っている。

当初は滅茶苦茶に暴れるという戦い方だったが、のちに矢車へ師事して拳を主体とする戦い方へ変わっていく。

大勢の人を守るための力とは思っておらず、ジンやしんのすけ、探偵社や母と祖母さんと限られた人を守る意識はしている。

矢車が所持していたドライバーを手にしたことでパンチホッパーに変身することができる。鎧を纏えば、うるさい女がやってくるため、面倒な時はパンチホッパーで戦う。

矢車想

年齢：27

春日部探偵社スタッフ（戦闘面、稀に厨房対応）

元ZECTシャドウ部隊の指揮官。

昔はパーフェクトハーモニーを信条としていたらしいが様々な出来事から現在はやさぐれた性格になっている。

探偵社にいるのは偶々、自分を拾ってくれたジンに付き合う形で所属しており彼と決別すればすぐに出ていくつもりでいる。

当初は指導するつもりはなかったのだが、響の戦い方をみてもう会えない弟分を思い出して戦い方を教えていく。

基本的にひねくれた性格だが、自分を慕ってくれる、好意をよせてくれる人物に対しては一定の好意を返す。

過去に転生者に出会い、酷い目にあつたことから大の転生者嫌い。転生者と聞くと容赦なく相手を叩き潰そうとする。

元ZECTという秘密組織に所属していたことから裏の世界に多少なり詳しい。

基本的に独断行動ばかりしている。

木場勇治

年齢：21

春日部探偵社スタッフ（事務員 戦闘面対応）

資産家の息子として生まれ、家庭環境にも恵まれたことで穢れなく育った青年。

大学において、転生者によって殺されるもその際にホースオルフェノクに覚醒。

怒りのあまり相手を殺そうとしたところでジンに止められる。

オルフェノクの姿をみて両親から恐れられてしまい、ショックを受けるもジンに誘われた探偵社を新たな居場所とする。

基本的に争いを好まず、探偵社の仕事においても困っている問題の解決という内容に参加している。

戦闘能力においては探偵社一なのだが、優しい性格の影響ですべてを引き出しておらず、争いは嫌いと言明しているために、響から苦手意識を持たれている。

オルフェノクである自分を拒絶されたことから無意識に探偵社という温もりある場所へ依存しており、その場所を奪う存在に対しては容赦しない姿勢をみせている。

後方支援で戦闘へ出ることは少ないが非常時等においては参加。

場合によってはジンのデルタギアを使用して戦う場合もある。

転生者によって思想や生活を歪められたという共通点を持つジンや仲間達を大事に思っている。

クリム・スタインベルト

年齢：？

春日部探偵社スタッフ（仮） ↑情報収集担当。

十五年前に命を落として記憶や人格をドライブドライバーへ移した存在。

現在はベルトになっており、人間としては死亡している。

春日部探偵社においては自身の目的であるロイミュード撲滅のために協力関係を築いており、適度に依頼に参加する。

正式なメンバーというわけではないが探偵社のメンバーと信頼関係がある。

当初はジンを戦士ドライブの適合者にと考えていたがジンの抱えている秘密などを知り、ドライブを完成させるためのデータ集めに協力してもらう。

ゼロドライブ、プロトドライブにジンが変身可能のためデータ集めをしてもらい、戦士ドライブ完成に協力してもらう。

矢車と無関係の人間を傷つけた転生者との戦いに乱入してきたクリスのコピー（ロイミュード108）との戦いにおいて、ジンが完成型ドライブとして戦ったことでドライブが形になったと判断。探偵社を離れることを決意した。

後に春日部国際警察のある刑事を戦士ドライブへ任命する。

雪音クリス

年齢：16

春日部探偵社スタッフ（戦闘面、重火器担当？）

グラマラスで小柄な体格。言動は少し乱暴。

東郷ジンとは家が近所だったことで親しく、幼いころは将来、結婚したいとまでいうほどジンに好意をよせていた。

本編より八年前に南米バルベルデ共和国でNGO活動中に両親が紛争による爆弾で死亡。自分を庇ったことでジンが変貌した姿を見

て、一度、拒絶してしまうも彼によって助けられて日本へ帰国、特異災害対策機動部が接触したことでイチイバルの適合者になる。その後、転生者に拉致されてネフシユタンの鎧を起動させるための拷問を受ける。

起動させた後に性的暴行を受けそうになったがフィーネに助けられる。それから軟禁生活を送ることになった。

偶然にも転生者へ報復にきた春日部探偵社に保護されたことでジンと再会。

最初は遠ざけようとしていたジンとぎくしゃくしていたのだが、城戸真司と話をして、イチイバルのシンフォギアを起動。無理矢理、春日部探偵社スタッフになる。

ジンに対しては拒絶したことで負い目を感じていたが、響とのやり取りを見て嫉妬、ヤンデレになった。

野原しんのすけ

年齢：5

春日部探偵社アクションスタッフ（命名：ジン）

春日部シテイに住まう五歳児。

嵐を呼ぶ幼稚園児ともいわれている。

両親と妹が不在の間は春日部探偵社に出入りしている。

ジンとはソウルフレンドという間柄。

チョコビの取りあいなど同年齢のやり取りをしている場合がある。

アクション仮面やヒーローものが大好き。

本人は知らないが精神的に摩耗していたジンの心を救った人物。

基本的に幼稚園児のため、危険な仕事は参加していないが色々なところについてくる。

第七話：遊び心

「まーさか、翌日にやってくるとは思わなかったぞ」

「すまない、どうしてもキミ達と話をしたかったんだ」

シヨツピングモールの激闘から翌日。

ゆっくりと惰眠をむさぼろうとしたところで着信。

相手は目の前にいる風鳴弦十郎。

映画をみて、食って寝るといふ生活を行うことで超人的な力を手にしている人物。

ノイズ相手に直接的なダメージは与えられないが人類最強という称号を手にしてもおかしくはない。

しかし、人格者としてはとてもできた人物で信頼、信用における人物だ。

個人においてはという前置きがついてしまうけれど。

「話の内容はうちのスタッフのことだろ？」

「悪いが調べさせてもらった。雪音クリス君……それと、立花響君だな？」

「旦那、アンタが良い人だから一応、警告しておく。響へ、アイツに不用意なことは言わないようにしてくれ」

「わかっている。この前の戦闘を見ていた。彼女は——」

「アンタの想像通りだ」

「すまない、キミには俺達の不手際ばかり」

「言葉にして伝えてくれるだけ、アンタは良い人だ。後は、広木のオツサンくらいだよ」

「防衛大臣とは」

「まあ、あの時以来、会っていないなあ。テレビで見るくらいだ」
「そうか」

そこで沈黙が続く。

「ところで、彼女達は」

「寝室で爆睡中」

「そ、そうか……しかし、キミがまさかシンフォギア装者を保護してい

たとは……」

「シンフォギア？　そういや、あの刀使いもいつていたが」

「まさか、知らなかったのか？」

「全然、俺のコレと似たようなものかと思っていたが？」

足もとに置いてあるアタツシユケースをこつこつと蹴る。

「いや、違うんだ。シンフォギアというのは」

弦十郎によってシンフォギアについての説明がなされる。

話を聞いていたジンはため息を零す。

「はあ、成程、理解できた」

「それで、相談なんだが」

「アイツらを旦那のところへ預けるとか検査の類はなしで、こっちで

調べているデータでよければ渡すぞ」

「良いのか？」

手を出す。

「代わりに条件がいくつか、その一つとして、俺達に深く干渉しないこと」

「わかっている。ここが特殊な場所という事は理解している」

彼が領いたことを確認してジンは事前に用意しておいたデータを差し出す。

クリムが調べてまとめていた響とクリスのデータ。

「これだけのデータがあるのか!？」

驚く弦十郎。

「どうやら二課の所有しているシンフォギアはこちらと比べると得られているデータが少ないらしい。」

「もう一つは？」

「それはおいおい、決めるかな。てか」

ちらりとジンは扉の方を見る。

「あの子はどうするつもりだ？」

「ぬ!？」

弦十郎が振り返るとドアが開いて風鳴翼が現れる。

「翼!？」

「司令！そいつはあの鎧の男です！警戒すべきでは」

「翼、落ち着いて聞いてくれ、彼は、東郷ジンは敵ではない」

「ですが！ノイズを倒す力を有しているばかりか、シンフォギアを持っていてる者を保護しているなど！」

「旦那、どうする？話を改めるなら、別の日でも俺は構わないけど、こうして付きまとわれるっていうなら、提案があるけど」

「提案？」

ニヤリとジンが笑い、弦十郎は困惑した表情を浮かべていた。

探偵社から少し離れたところにある工場。

既に廃れていて、誰も立ち入ることはない。

そこにシンフォギアを纏った風鳴翼、向かい合う様にジンがいる。

ジンはベルトの類がなく、どこかで手に入れた日本刀を携えていた。

「貴様、なぜ！鎧を纏わない」

「必要ないからだよ」

「舐めるな！防人として鍛えたこの剣、腑抜けた貴様など一突きだ」

「やってみろよ？ほら、旦那、開始の合図、奴さんはやる気に満ち溢れているぞ？」

「はあ、仕方ない」

——はじめ！

弦十郎の合図とともに突っ込んでくるのは風鳴翼。

直線的な攻撃だが、その速度を常人が捉えることは出来ないだろう。

だが。

「遅い」

あっさりと回避するジン、そればかりか足で彼女をひっかけて地面へ転倒させる。

バランスを崩したが地面へ手をついて、逆立ちして脚部のブレードを回転しながら放つ。

——逆羅刹。

「翼!?!」

「大丈夫だって」

振るわれる技をジンは横滑りしながらそのまま翼の手を足で狙う。

「くっ！」

手で地面を叩くようにして上空へ舞い上がる。

「芸達者だな、おい」

大型化させた大剣が青いエネルギー刃を放ちながら落下してくる。

爆発と衝撃が広がっていく。

弦十郎は腕で石などが飛来するのを防ぐ。

しばらくして土煙が晴れる中。

「ほい、俺の勝ち」

煙が晴れた先、そこでは刀の剣先を翼の眼前へ突きつけているジンの姿があった。

「バカな！」

「バカな！」

信じられないという表情をしている翼の前でジンは欠伸を噛みしめる。

「お前は遊び心が足りないんだよ」

「なっ!?!遊び心だど!?!」

「そうそう、がちがちに固まっている。そんなんじゃ、いつか身動きできなくなる」

「ふざけるな！私は剣で——」

「はあ、こりゃ相当の……ア?」

ジンの視線が周囲へ向けられる。

弦十郎も気づいたのだろう、ジンと翼へ駆け寄った。

黒いバンが数台、停車する。

ドアが開くと同時にぞろぞろと複数のカイザが姿を現す。

「何だ、これは」

戸惑いの声を漏らす翼。

「旦那」

「対策委員会の連中か……カイザを完成させていたのか」

ぞろぞろと現れたカイザは腰に装着されているブレイガンの銃口をこちらへ向けてくる。

前へ出ようとする翼を弦十郎が止めた。

「翼、お前は前に出るな！」

「ですが！」

「子供を守るのが大人の仕事だ」

拳を構える弦十郎の姿にカイザたちはバカにしたような失笑を漏らす。

自分達が超人で弦十郎のような男など敵ではないと思っているのだろう。

横でジンがベルトを差し出した。

「旦那、覚悟はあるか？」

突き出されたベルトをみて弦十郎は頷く。

「覚悟はあるとも！」

叫びと共にバースドライバーを装着する。

ドライバーの側面についていたセルメダルをドライバーに装填、ハンドルレバーを回転させた。

「変身！」

光と共に弦十郎の体が黒い防護スーツ、セルティックアーマーに覆われるとともにバースへ変身する。

「お、おじさまが変身した」

「へー、そういう可愛い顔もできるんだな」

「かわっ!？」

ジンの指摘であたふたする翼をみながらデルタギアを装着、デルタムーバにデルタフォンを差し込み、デルタに変身する。

「さて、暴れるか」

光弾が飛び交う中でバースの拳による衝撃波で多くのカイザが吹き飛ばす。

バースは本来ならセルメダルを多用して様々なユニットを用いるのだが。

「まあ、元から規格外な人だしなあ、変身したらしたで、こうなるのは当然か」

自ら鍛えた拳と映画で見た技を用いてカイザを圧倒する。

デルタはカイザブレイガンのエッジを手でいなしながら背後のカイザへ肘鉄を叩き込む。

カイザギアはデルタギアの後に開発されたアイテムで当然のことながら性能はデルタより上である。

だが、デルタを纏っている男は一对多である戦闘に慣れているどころかそういう戦闘ばかりを潜り抜けていることのでかなりの経験を積んでいた。

多少、人でなくなっていた存在の相手など赤子の手をひねるようなもの。

フォンブラスターによって次々と体から青い炎を吹き出して消滅するカイザたち。

時間にして十五分程度。

襲撃してきたカイザたちは全滅していた。

二人とも変身した状態で周囲を警戒するが現れる気配がないのでドライバーを外す。

「しかし、誰がここの情報を伝えてきたのだろうか」

「心当たりはある」

「なに？」

ジンの言葉に弦十郎が驚いて尋ね返す。

「少し前にフィーネとかいう正体不明の相手とやりあった。そいつの側近にロイミュードがいたから、そこから漏れたかも」

「ロイミュード、確か蛮野博士が作ったアンドロイドの名称だったな」

「ああ」

「おじさま、無事ですか！」

翼が弦十郎の傍へ駆け寄る。

「ああ、少し窮屈はしたが問題はない！」

ドライバーを返そうとした弦十郎だが、ジンが止める。

「余計な迷惑をかけたし、それはやるよ。元々、持っていても俺は使えないし、アンタなら他の人間へ渡すみたいなことしないだろうしな」

「すまん」

「どうして……」

謝る弦十郎の傍で翼がぶるぶると腕を震わせた。

「どうして、そこまでの強さを持つていながら戦おうとしない!?」

「翼!」

「もし、貴様みたいな奴が、いれば、奏は……奏が死ぬことは」

「カイザは人間だ」

「ジン!」

弦十郎を止めてジンが翼の前に立つ。

「今、なんと」

「俺と旦那が戦っていた相手は人間だと言ったんだよ」

「そんな!」

「カイザの力は強大だから、体内に特殊なエネルギーを宿す必要があった。倒されて青い炎を吹き出すのはエネルギーが暴走したことで起こる現象だ。お前は防人といったよな? 守るために戦う者だとぐいっと風鳴翼の胸倉を掴む。

「覚悟ができているのか? 人を斬れる覚悟があるのか? ……お前に!!」

「それは」

「風鳴翼」

ジンは真剣な表情で翼へ告げる。

「今のままじゃ、お前は失っていくぞ。周りのもの、自分すら」

そういつてジンは離れていく。

振り返らずに彼は立ち去る。

「ふーん、この程度じゃ、相手にならないかあ」

高い場所からロイミュード108は本来の姿で戦いの様子を眺めていた。

情報をオルフェノク対策委員会へ流したのは彼女である。

デルタのベルトが指定した座標にあると。

あつさりとオルフェノク対策委員会は食いついた。

やはり量産型しか所有していない組織としてはオリジナルギアが欲しいのだろう。

膨大なネットの海で残されていた情報を入力していたロイミュード108は呆れた声を漏らす。

「人間の欲望というのは底なしだねえ」

じやらじやらと手の中にある三枚のメダルを弄りながらロイミュード108は考える。

「ああ、また撃破されたのかあ」

ロイミュード108はため息を零す。

108体しかない自分の同胞。

来るべき約束の数を揃えるために活動を始めているようだが、最近、仲間達が次々と破壊されている。

「仮面ライダー、かあ」

ロイミュードの仲間がかつて伝えてきた情報。

実際のところ、108はその姿を見たことがない。

グローバルフリーズ時に多くのロイミュードのボディを破壊したが、002の進化した姿に敗北したと聞いている。

「同じ人物ではないだろうなあ、そうなるとう適合者が見つかったということかあ」

ちらりと倒された同胞の情報を収集しながら彼女は先ほどの戦いを思い出す。

「ああ、何だろうなあ」

彼の戦いを見ているだけで彼女の中の何かが激しく暴走する。

体内のエネルギーがまるで生きているかのように活性化して、コア・ドライビアが暴走してしまいそうだ。

「はあ、まだ動いちやダメなんだよなあ」

フィーネの協力者という立場だが、勝手に動けばコアが破壊されてしまう。

今は彼女の協力者であるウエザーの指示で各々が動くタイミングを見計らっている。

「次はアイツだし、はあ、早く会いたいなあ、愛しい人……それと」

ここにいないコピー元のことを考えてロイミュード108の体が激しい怒りに包まれる。

「動き出した時がてめえの最後だぞ。オリジナルウ」

一瞬、ロイミュード108のボディに変化が起こりながらも誰もその姿を目撃しなかった。

第八話：最悪な再会

「ああ、これは夢だ」

明るい世界の中、幼い自分ともう一人がいる。

目の前の光景が夢であるとすぐにわかった。

その途端、不機嫌になる。

目の前の相手は笑顔を浮かべていた。かつては陽の温もりのように大事だと感じていた相手。

その手を振り払うように響は乱暴に手を動かしたところで目を覚ます。

「最悪な目覚めだ」

今はどうなのだろう？

むくりと体を起こしながら響は布団から抜け出す。

探偵社のいくつかある部屋の一つ。

響の私室として与えられた部屋。

ラフなシャツと下着だけという格好の響は部屋を出て、その足である部屋に向かう。

東郷ジンの部屋。

目の前に嚴重な錠前が施されているが響は関係ない。

「邪魔」

バキヤンと音を立てて壊れる錠前。

響にとってこの程度の錠前の破壊など造作もない。

「こんなことしても無駄なのに」

少し前はクリムのシフトカーが妨害してきたが、今やシフトカーはいない。

だから、こんな錠前を設置したのだろう。

無意味だ。

壊す力を持つ響にとってこんなものなど。

「ジン〜」

ニコリと笑みが浮かぶ。

ジンの温もりへ触れられる。

その楽しみを前にした響だが一瞬で動きが止まった。

「ぬぐぐぐー！」

「大人しく、しろよー！」

響の目の前でクリスとジンが取っ組み合いをしている。

クリスはシャツ一枚で、上のボタンが開いて、大きな果実が揺れていた。

ジンは必死にクリスの手を抑えていた。

「なに、しているの？」

「早い者勝ちだ。失せな！」

挑発してくるクリスに響は小さくため息。

「ぶっ殺す」

「あ、ヤベ」

朝からジンの部屋は崩壊した。

「響さん、頭のタンコブ大丈夫？」

「……痛い」

響はしんのすけと一緒に道を歩いていた。

あれから崩壊したジンの部屋は修復作業中。

そのため、探偵社は本日、お休み。

クリスは木場勇治に連れられて街へ、響は――。

「ところで、着いてくるの？」

「あ、おかまいなくう〜」

「気にするから言っているの」

眉間へ皺を寄せるがしんのすけは平然としている。

調子が狂うと思いつながら響は歩く。

ついてくるしんのすけ。

響が向かっているのは実家。

立花と書かれている表札。

「今日が約束の日だから、ね」

表情を崩さないまま、響は家の中に入った。

立花響は春日部探偵社に入る時にある約束をジンと交わした。

三カ月に一回、家へ近況報告をすること。

自分の所為で母と祖母がひどい目にあってしまった。そんな自分

が二人に会うべきなのかどうかという疑問はある。けれど。

「おかえり、響く、あら、しんちゃんもいらっしやい」

「あ、おかまいなくう〜」

「何で、お前が先に挨拶するんだ」

出迎えるのは響の母。

呆れながらも母と向き合う。

「その、ただいま、お母さん」

「おかえりなさい、響」

にこりとほほ笑みながら出迎える母と祖母にぎこちないながらも

響は笑顔を浮かべた。

響は二人に探偵社での仕事を話す。

流石にロイミュードやノイズを破壊しているなどの情報は告げら

れないので少し前に起こったアイドルストーカー事件やカラス男の逮捕劇などを話す。

横でしんのすけは祖母が用意した和菓子を食べていた。お菓子を与えればこの五歳児は少し大人しくなる。

横でもぐもぐと饅頭を食べている五歳児の横で響が話を終えると二人とも「元気そうで安心した」という。

「恨んで、いないの?」

「そんなことないわ」

「響は何も悪くない。前にもいったでしょ?」

温かく出迎えてくれる人がいる。

そのことはとても嬉しかった。

けれど、素直に喜ぶつもりになれない。

自分は壊す力を持っている。そんな彼女がこんな温かい場所にいていいわけがないのだ。

嬉しそうに自分を出迎えてくれる二人にぎこちない笑顔を浮かべつつ、話をする。

「いやあ、温かい家ですなあ」

「そうだね、私も、思うよ」

「何で、いつも家に帰らないの?」

しんのすけの疑問に響は表情を変えない。

「帰ったら不幸になる」

「何で?」

「私は壊すことしかできない女だから、ジンと出会って救われたけれど、きつと、家にいたままだったらお母さんもお祖母ちゃんも壊していた」

「ふーん」

「私からも、聞いていい?」

「いいともー!」

「どうして、しんのすけはジンと一緒にいるの?」

前々から響は気になっていた。

探偵社に所属するようになった時からしんのすけはジンと一緒に

いた。その理由をジンへ問いかけたこともあったが彼は教えてくれない。

どうせだから、としんのすけへ問いかけることにする。

「うーん、おっ？」

答えようと考えていたしんのすけは前からくる存在に気付いた。

二人。

一人は服を着崩した少年、年齢は響より下だろう。

もう一人は派手な衣服を纏い、妖艶な表情をしている女性だ。

「やあく、はじめましてえ」

のんびりしたような口調で彼は響へ挨拶をした。

無視して去りたかったが道を阻むように立っているため通ることができない。

「貴方が立花響よね？」

「違うといっても信じないんだろ？」

「当然よ、アンタのことは調べてあるもの」

ニヤリと笑みを浮かべる女性になぜか苛立ちを覚える。

「お前は邪魔なのよ。立花響、我が主の為にも排除する」

「そうなのお、悪いけれど、ここで死んでね？」

目の前で二人の姿が変わる。

一人は蛇を模した髪と杖を持つ怪人、メデューサ。

もう一人は灰色のドラゴン怪人、ドラゴンオルフェノク。

「しんのすけ、逃げて」

「ほいー！」

響は歌を奏でて鎧を纏う。

最近、わかったことだが、この鎧はシンフォギアというらしい。

シンフォギアを纏った響は拳を構える。

「へえ、真っ白い鎧だねえ、楽しめそうだ」

笑みを浮かべながらドラゴンオルフェノクが鋭い腕を振るう。

響は正面からその拳で迎撃した。

振るわれた拳と衝撃でドラゴンオルフェノクが仰け反る。

その後ろから光弾が飛来して、響は足で蹴り飛ばす。

「あら、やるわねえ」

メデューサは髪をかき分ける仕草をしながら光弾を放つ。
その光弾の一発がドラゴンオルフェノクを掠める。

「危ないなあ」

「そこにいるからよ」

「あ、そー」

仲間意識がないのだろう。

ドラゴンオルフェノクは地面を蹴り、響へ迫る。

二対一という不利な状況であろうと響は拳を構えた。

「うるさい、お前らまとめてぶっ壊してやる」

「はあ……」

「まーた、ヒナは」

「大丈夫ですか？」

響達が戦闘をしている近く、そこを偶々、リディアンという学校に通う生徒達が歩いてきた。

ため息を零したのはリボンをした少女、小日向未来である。

「親友のこと、探しているんでしょう？」

「うん、おばさんに聞いている話だと春日部シティで働いているそうなんだけど……」

「どこかまでは教えてくれないんだ」

「聞いたんだけど、今はまだそつとしておいてほしいって言われているの……でも」

響に、親友に会いたい。

未来は心の中で思う。

最悪の状況下で会えなくなってしまった親友の身を案じながらも急な引越で会えなくなり、手紙を送っていたのだが返事も来ない。

心配だけど、会えない。

「まるでアニメだよねえ」

仲の良い友達と話をしながら歩いていた時。

轟音と共に目の前の壁が吹き飛んだ。

「……え？」

突然のことに思考が止まる中、土煙と共に二体の怪物が姿を見せる。

「いやあ、話に聞いているよりやるねえ」

「あの方が警戒するだけある」

メデューサとドラゴンオルフェノクはぱらぱらと舞う土を払う。

「か、怪物!？」

現れた二体の怪物に彼女達は悲鳴を漏らす。

「あーあ、見られちゃったあ」

体を揺らしながらドラゴンオルフェノクが未来たちの方へ向かう。

「ち、近づいてきた!」

「おい、何をしている?」

ドラゴンオルフェノクの姿に未来達は怯える。

「ええ？だつて、目撃者は消せつていわれているでしょ？」

「チツ、勝手なことを」

メデューサは悪態をつきながらも止めはしない。

目撃者を消せという指示は出ていたらしい。

「ごめんねえ、ま、運が良ければ生き返るかもねえ」

ドラゴンオルフェノクが怯えている未来たちへ近づいた時。

「余所見か？」

壊れた壁の向こうから大きな音が聞こえてきた。

爆音。

そう呼ぶべきような音と共に衝撃が未来たちを吹き飛ばす。

「な、なにこれ!？」

「アニメじゃなあい！」

「わ、わ！」

「え？」

その中で未来は見た。

煙を払いのける様に現れた少女。

マフラーのようなもので口元を隠しながら未来の目の前で灰色の

怪物を殴り飛ばした。

見間違えるわけがない。

忘れるはずがない。

「ひびき……っ？」

未来の漏らした声に響はちらりと視線を向ける。

しかし、すぐに前を見た。

「動かない方がいいぞ？」

今まで傍観していたメデューサが手に何かを掴んでいた。

「はなせええ！」

「……チツ」

いつの間に捉えたのかメデューサの手の中には暴れるしんのすけがいた。

「動けば、このガキの命はないぞ？」

「最低だな、でも、それで私が止まると思うか？」

「どうだろうな、だが、殺されたら困るんじゃないのか？」

本来なら無視していただろう。

だが、響はその選択をとれなかった。

「助けたかったらそれを解除しなさい」

動けない響にメデューサが告げる。

響は渋々という形でシンフォギアを解除した。

「あー、いってえの、コイツ」

ドラゴンオルフェノクが拳を振るう。

殴られた響が地面に倒れた。

口の中を切ったのか、数滴の血が零れる。

「響さんーこのおー」

暴れるしんのすけだが、メデューサの拘束から逃れられない。

「さあて、本当なら甚振って殺してやりたいところだけど、変な反撃されてもこまるしねえ、ここで死ねよ」

ドラゴンオルフェノクが鋭い爪で響の体を切り裂こうとした時。

どこからか光弾が飛来して、ドラゴンオルフェノク、メデューサにそれぞれ直撃した。

「このおー」

拘束が逃れると同時にしんのすけはおならをメデューサの顔にかけて脱出。

大急ぎで響の下へ駆け寄る。

「今の!？」

「なんだあ？」

光弾を受けながらも起き上がる二体。

「成程お、ロイミュードと同じくらい頑丈なわけだ」

一台の白いバイクが未来たちの傍に停車する。

白い上着とフードで素顔を隠していて顔はみえない。

片手に車輪の着いた銃のようなものを構えていて、狙撃したのは彼だとわかる。

「響さんー大丈夫？」

「問題ない」

駆け寄ってきたしんのすけの心配してくる声に響は頷いた。

口元を拭いながら立ち上がる。

「しんのすけは隠れていて」

「でも、血……」

「へいきへつちやらだよ。この程度、問題ないから」

シンフォギアではなく、響はゼクトバツクルを起動する。

ピヨンピヨンとどこからかホツパーゼクターがやってくる。ただ

し、矢車のホツパーゼクターと異なり茶色だ。

跳んできたホツパーゼクターを掴む。

「ぶっ潰してやる」

ホツパーゼクターをゼクトバツクルへ乗せる様にして変身する。

【チェンジ！パンチホツパー！】

ヒヒイロノカネを響は身に纏う。

茶を基調とした鎧、白い複眼。

パンチホツパーである。

「へえ、お嬢ちゃん、仮面ライダーなんだ」

「そんなんじゃない」

「あ、そうなんだ。でも、俺は仮面ライダーなんだよねえ！」

派手な音と共に男は白い仮面ライダーへ変身する。

「追跡！撲滅！いずれもマツハ！仮面ライダー——」

「うるさい」

変身の口上を遮りながらパンチホツパーが地面を蹴り、大ぶりな一

撃を振るう。

ドラゴンオルフェノクは拳を受け止めようとするが、その威力に吹

き飛ぶ。

「何だよ、さつきより威力高くないか？」

「しんのすけを人質に取ったんだ。私はキレてる」

淡々と言いながらホツパーゼクターを動かす。

【ライダージャンプ！】

【ライダーパンチ！】

地面を蹴り、宙を舞うと同時にタキオン粒子を波動に変換し、右腕に収束させながら必殺の一撃【ライダーパンチ】を放った。

その拳を受けたドラゴンオルフェノクは民家の中に消える。

「チツ、騒ぎが大きくなりすぎたな」

白い仮面ライダーの攻撃を躲しながらメデューサは撤退した。

メデューサが撤退したことで白い仮面ライダーはバイクに乗って去ってしまう。

「……あの白いのカッコイイなあ！アクション仮面の次の次くらい」

去っていった白い仮面ライダーの姿を見て漏らすしんのすけ。

敵がいなくなったことで変身を解除した響。

「響、響ッー！」

未来が響へ駆け寄ろうとした。

「来るな!!」

大きな拒絶の声に未来は動きを止める。

そこにいたのは自分が知る親友とは大きくかけ離れた姿。

全てを憎み、拒絶している目。

太陽のように明るく、誰にでも優しく、輝いた笑顔はどこにもない。

「響、怒っているの？あの日……なにもいわずに引越したこと」

「当たり前だろう。あの日、私を見捨てて、一人安全なところに逃げた奴のことを！」

拒絶の言葉が未来に突き刺さる。

目の前が真っ暗になりそうになった。

あの時、響をはじめとした生存者全員のバッシングが激しくなっていたことは知っていた。

おそらく、あのバッシングに巻き込まれたのだろう。

「違う……違うの、響、響を見捨てたわけじゃないの、私だって引越すのは嫌だった。反対したけど、手紙しか送れなくて」

「手紙なんて一通もきていない！そんなウソ、よくいえたな！」

「そんな、こと、ちが」

「私が地獄の中にいた時、真っ暗闇にいた私に手を差し伸べなかった奴が、今更、親友面するな!!」

「違う」

「うるさい！来るな！」

伸ばそうとした手を響は払いのける。

フードをかぶりなおしながら彼女は歩き出す。

しんのすけは少し戸惑いながら響を追いかける。

残された未来はそのまま座り込んでしまった。

「響さん、大丈夫？」

「殴られた事？別に」

「そつちじゃないよ」

しんのすけはよじ登るとそのまま響の頬へ手を触れる。

「ちよつと、なに？」

「響さん、泣きそうな顔している」

「そんなことないよ」

本心だ。

泣きたいなんてことはない。

自分は壊すことしかできない女だ。

今更、親友だった相手と再会したところで何も感じない。

いや、あるのは裏切られたという激しい怒り。

「でも、オラからみたら響さん、泣きそうにみえる」

「……しんのすけは優しいんだ」

少しわかった気がする。

どうして、ジンがしんのすけと一緒にいるのか。

幼いしんのすけはとても純粋だ。だから、人の痛みもわかるし、手

を差し伸べる。

「(きつと、ジンも失っているから忘れないようにしているんだ) 人として忘れてはいけないものを。」

「オラは響さんの味方だぞー!」

胸を張るしんのすけの言葉に響は頷いた。

「ありがとう、しんのすけ」

第九話：優しい者

白い空間。

絶世の美女というべき存在とほっちやりとした男性しかそこにいない。

「では、力はこれでよろしいですね」

「ヒヒッ！ああ、これでいい！ぼ、僕の輝かしい未来の為に!!」

「いつてらっしやい」

シユンと消え去る男性。

「さて、次くらいでそろそろ成果を出してほしいものです」

「おい！だったら俺を戻せよ！」

先ほどまでの笑顔から一転して冷淡な表情になって、振り返る。

そこにはロイミュード108によって殺された男。

命を失い戻ってきたことで生前、つまり本来の姿をしている男がいた。

転生者は殺されたり、死亡するとこの白い空間へ戻って来る。

彼女が選んだ魂はここへ戻ってこなければならぬのだ。一つの例外を除いて。

「あんなつまらない特典じゃねえ、もつと強い力を俺に！そうすりゃ、今度こそは好き勝手」

「もう結構です」

ブチュと音を立てて男の体から魂が抜き取られる。

「へ？」

事態を理解できないまま、男の体は消滅して魂が女性の手の中に納まる。

「お前は失敗したのです。役に立たない奴を複数回も転生させるほど、甘くはないのですよ」

魂が明滅する。

何か訴えているようだが、女性は聞こえない、いや聞いていなかった。

いつの間にか女性の足元にはぐつぐつと煮えたぎる釜が現れる。

「転生者が転生させた神に逆らった場合、いいえ、偉そうな態度をとった場合、どうなるか……それは死ぬことすらできない永遠の地獄へ落とされるのです。いやあ、怖いですね、辛いですね、悲しいですねえ」

明滅が激しくなる魂だが、彼女は躊躇いもなくその中に落とした。「さて、次の駒はちやんと見つけてくれるかなあ？ 反応はちやんとあの世界にあるんだ。逃げられるなんて思わないでね？ 絶対に見つけてあげる。貴方は永遠に私の傍にいないといけないんだから」

「クリスちゃんは優しいね？」

「アア？ 何のことだ」

木場勇治の言葉にクリスは睨みつける。

美少女が睨みつけても怖いというより可愛いものなのかと心の中

で思いながら木場勇治は続けた。

二人は浮気調査のため尾行をしていたのだが、目的の写真が撮影できたことで帰ることになったのだが。

「放っておけるかよ。家族が離れ離れなんて」

親と離れ離れになった兄妹を見つけた。

雪音クリスの家族はもういない。

迷子の二人を放置するという事をクリスは出来なかった。

そんな彼女を木場は優しい子だと思った。

「……そーいや、お前はなんでジンのところにいるんだよ?」

話しかけてくる二人と笑顔でやりとりしている木場をみて、前から思っていた疑問をぶつけることにした。

個性的な春日部探偵社の面々の中で木場勇治は酷く平凡な存在に思える。

へらへらしていて、争いごとは嫌いそうな優等生。

灰色の怪人へ変身できるという事を除けば平凡な人物に思える。

「あ、お母さんとお父さん!」

クリスが手を握り締めていた女の子が指を伸ばす。

指の先には子供たちを探していたのだろう、汗だくの男女がいる。

おそらく両親だろう。

「ほら、いっしておいで」

木場に言われて二人は頷いて走り出す。

「もう迷うなよ!」

クリスが言うのと二人は頷いて、そのまま二人の下へ向かう。

子供を見つけたことで嬉しそうに両親は抱きしめていた。

「……僕にとって、今はあの事務所のメンバーが家族のようなものなんだ」

「あ?」

木場が漏らした言葉に疑問の声を漏らす。

「何でもないよ。行こ——」

帰ろうと促そうとした時、警報が鳴り出す。

「ツ!ノイズ!?!」

「クリスちゃん！」

木場の焦った声にクリスが振り返ると現れたノイズが親子を襲おうとしていた。

悲鳴を上げながら親は必死に子供を守ろうと抱きしめている。

そんな彼らをノイズはまとめて消そうとしていた。

「やめ——」

シンフォギアを纏おうとしていたクリスの横を風がすり抜ける。

一瞬でノイズが灰になった。

親子を守るように灰色の怪人が立っていた。

馬のような一角獣のような姿をした灰色の怪人の手には一振りの剣が握られている。

その剣がノイズを一掃したのだ。

「カッコイイ！」

子供たちが歓声を上げる中で両親の顔に浮かぶのは恐怖。

「速く、逃げて！」

人の姿に戻った木場が両親へ叫ぶ。

「は、はい！」

すぐに子供たちを抱えるようにして逃げていく。

「木場……」

追いついたクリスは木場の背中が酷く寂しそうに感じた。

「いやあ、助けたのに感謝されないというのは空しいですねえ」

「てめえ！」

二人の前に現れたのはウエザーと名乗った男。

腕に杖をのせながら手を叩いて彼らの傍にやって来る。

「ウエザー！」

「この間はどうも、私、井坂深紅郎と申します」

帽子を外して会釈をするウエザーこと、井坂に二人は警戒を強めた。

「ああ、ご安心を、ノイズはただの人払いです。用事があるのは貴方でしてね」

井坂が指すのは木場勇治だった。

「僕？」

「ええ、ガイアメモリの力を用いず、人ならぬ者へ至った貴方に酷く興味がある。できれば、解剖して私のメモリの力の糧にしたいほどです」

帽子をかぶる際に井坂の瞳が木場を捉える。

その目は不気味な狂気を内包していた。

「ぞっけんなー！てめえみたいな変な奴に木場はやらせねえ」

「お嬢さん、噛みつく相手は考えた方がいい。相手を間違えると命はありませんよ？」

「ちよせえー！てめえみたいな変態は吹き飛びな！」

クリスは歌を奏でてシンフォギアを纏う。

最初は不慣れだったシンフォギアだが、木場や矢車と鍛錬を重ねた末に力を完璧に制御できるようになっていた。

クリスの両手にガトリング砲が展開される。

井坂へ問答無用の弾丸の雨が降り注ぐ。

普通の人間ならあつという間にミンチへ姿を変えていたことだろう。

そう、普通の人ならば。

「危ないですねえ」

竜巻が吹き荒れて、弾丸が周囲へ飛び散る。

ゆらりと姿を見せるウエザードーパント。

パチンと指を鳴らすとクリスの周囲へ雷撃が落ちる。

「ハン！その程度で落ちるかよー！」

ひらりと回避しながらガトリングの銃口を向けようとした時。

既に目の前でウエザードーパントが立っていた。

「なっ!？」

「考えなさいといったはずですがねえ」

ウエザードーパントが指を鳴らそうとした時、横から掴む手があった。

「やめろ」

木場勇治が立っている。

「き——」

クリスは言葉を失う。

あの男は誰だ？

一瞬、そこにいたのが木場勇治であることにクリスはわからなかった。

それほどまでに木場のイメージと今の木場はかけ離れている。

笑みを浮かべることなく氷のようにぞつとするほど冷たい目。

「僕の大事な仲間に手を出すというなら、お前を許さない」

「それは興味深い、どうするといふのかな？」

「お前を、倒す！」

叫びと共に雄叫びをあげる木場。

周囲の時が一瞬、止まる。

木場の体が灰色の光に包まれると同時にホースオルフェノクに変身した。

ホースオルフェノクが拳をウエザードーパントへ振るう。

正面から受け止めるウエザードーパントだが、衝撃によって後ろへ仰け反ってしまう。

「素晴らしいパワーだ！これなら」

ウエザードーパントが雷撃を落とす。

ホースオルフェノクは体を疾走形態へ変えると恐ろしい速度で雷撃を回避していく。

そのままウエザードーパントへタックルを仕掛けようとしたが水の壁に阻まれる。

「素晴らしいですねえ、ますます解剖してメモリの力にしたいくなりましたよ！」

ウエザードーパントが雷撃を落とそうとした時。

「アタシを無視するんじゃない！」

横からクリスが無数のミサイルを放つ。

完全にホースオルフェノクに意識が向いていたウエザードーパントは反応できずにミサイルのすべてをその体に受けてしまう。

「ちい、邪魔です！」

氷の刃をクリスに向けるもホースオルフェノクが彼女を抱えるようにして走り去る。

「クリスちゃん！」

「てめえ一人だけで戦っているわけじゃないだろ！アタシも戦えるってこと、忘れるな！」

「…………ごめん！」

ホースオルフェノクの後ろに乗りながらクリスは歌う。

歌は嫌いだ。

死んだ両親のことを思い出し、痛みつけられたときのこと過ぎる。

だが、今は戦うために必要だ。

そのために歌う。

自分の傍にいる大事な人を守るために。

「もってけ！大サービスだ！」

大量のミサイルと弾丸を放つ。

「ですから、この程度は」

一斉掃射に周囲の視界が奪われていく。

「まさか！」

ウエザードーパントが気付いた時、目の前に疾走形態から人型に戻ったホースオルフェノク。

手には聖剣が握られていた。

躲すこともできないままウエザードーパントの体が聖剣で切り裂かれる。

「ぐううう……………はははははははははは！」

狂ったように笑いだすウエザードーパント。

「狂っちゃまったか？」

「いやはや、これは失礼……私はどうやらあなた方を過小評価していたようだ。ここは失礼させてもらいますよ」

ウエザードーパントは周囲に霧を展開するとそのまま姿を消す。

「逃げやがったか」

クリスはシンフォギアを解除して、木場は人へ戻る。

「おい、大丈夫か？」

「うん……そっちは大丈夫？」

「当たり前だろ」

木場の言葉にクリスは胸を張る。

何度か戦闘をこなしていることで彼女は実力が身につき始めていた。

「それより、アンタは大丈夫、なのか？」

「え？怪我とかはないけれど」

「そ、そういう意味じゃねえーよ！」

理解できないという風に木場は首をかしげる。

クリスは少し悩みながら。

「さっきの人達、アンタの姿に怯えていただろう？そういうのキツイんじゃないか？」

嘗て、自分も同じことで拒絶してしまったから。

だからこそ、拒絶された相手のことが少なからずわかる。

拒絶したからこそ、見えるものというものがあつた。

「大丈夫だよ。周りの人に拒絶されても、大事な人達から拒絶されなければ」

最後の言葉に込められている感情がどういふものなのかクリスはわからない。

けれど、それが今の木場を形作っているものなのだろう。

「帰ろうか、クリスちゃん」

「わーっつたよ、あ？」

帰ろうとしたクリスはこっちへぱたぱたと駆け寄って来る兄妹に気付いた。

彼らは木場とクリスをみて笑顔で手を振って来る。

「お前ら、どうした？」

クリスが尋ねると兄と妹は互いに顔を見てから。

「助けてくれてありがとう！」

ぺこりと感謝の言葉を告げる。

「……え？」

突然のことに呆然とする木場。

「あのね、助けてくれたらお礼をいいなさいっていわれたの！」

「お兄ちゃんもお姉ちゃんもすっごいかつこよかった！まるでヒーローみたいだったよ！」

「ありがとう！」

戸惑う二人の前でペこりと頭を下げから両親の方へ向かっていく。

少し離れたところで両親が頭を下げていた。

子供たちの行動を見て思うところがあつたのだろう。

「何か、恥ずかしいな」

ぼりぼりと頬をかきながらクリスは呟く。

「そうだね」

頷きながら木場は去っていく親子の姿をみている。

その目は何かを懐かしむ様なものだった。

第十話：強き者と防人

「引き受けるの、それ？」

春日部探偵社、ジンの手に持っている依頼書をみて響は尋ねる。

「選りすぐりする立場でもないしなあ、困っている人がいれば助ける。

それが探偵社の方針だ」

「でも、護衛依頼だ」

「前のアイドル護衛の影響かねえ？」

首を傾げながら依頼内容を確認する。

「まー、でも、この依頼は俺達が引き受けるべきだろうなあ」

依頼内容の一文をみせる。

その内容を覗き込んだ響は納得した。

「仕方ないねえ」

「まー、俺達の想像している通りのものなら………な」

依頼書を眺めながらジンはため息を零した。

「というわけでえ、うちに仕事がきちやっただんですよお」

春日部国際警察署。

署長を務めている本願寺純が開口一番、告げた言葉に室内にいたメンバーはぼかんとする。

「あのお、署長、仕事というのは？」

いち早く復帰したひろしが尋ねる。

「それがねえ、ひろしちゃん。有名なゲーム会社のイベントに脅迫状が送られてきたという連絡がありましてねえ、その護衛をうちが引き受けることになっちゃったんですよお」

「護衛任務ですか、でも、それなら普通に警視庁の——」

「それがねえ、別の仕事があるらしくて手が離せないらしいんですよ、おまけにそのイベントにあの風鳴翼ちゃんがくるみたいでしてねえ。放っておくわけにもいかないのよ」

「我々が選ばれたという事ですか」

本願寺の言葉を貴虎が引き継いだ。

「そうなのよお、まあ、今日の運勢は赤なので、行けると思っただけどねえ！」

ひらひらと赤いネクタイを揺らす本願寺にひろしは苦笑いを浮かべた。

デスクで書類作業をしていた進ノ介もやれやれと首を振る。

脅迫ということはただ事ではない。

進ノ介は不安を抱きながらミルクキャンデーを飲み込んだ。

「何故、貴様がここにいる!？」

「トップアーティストがデカイ声をだすなよ、周りに迷惑だぞ」

依頼を受けてやってきたジンと響は待合室へ通されたのだが、そこにいたのはあの風鳴翼だった。

ジン達の姿を見て大きな声を上げる翼にやれやれと釘をさす。

「むっ、どうしてここに」

「依頼があつてやってきたんだ。それ以外でこういうところにはこない」

無縁過ぎるからなあと豪華なソファへ腰かけるジン。

同じく腰かけるとぴったりとジンへ寄り添う響。

何とも言えない表情を浮かべている翼。

普通の人なら気まずい空気だと思うだろう。

だが、ジンと響は気にしていなかった。余計に重たい空気が漂い始めている中。

「翼さん、遅くなって……おや？」

ドアが開いてスーツ姿の青年がやって来る。

「緒川さん、その」

「いえ、大丈夫です。春日部探偵社の方々ですよね？僕は緒川慎二と
います。翼さんのマネージャーをしています」

「あ、これはどうも、春日部探偵社の東郷ジンです」

相手が名刺を出せば自分も出す。

名刺交換を終えた緒川は向かい側、翼の隣へ腰かける。

「いやあ、遅くなって申し訳ありません」

再びドアが開く。

入ってきたのはカジユアルなスーツを着た若者。

「今回の企画の責任者である壇黎斗です。よろしくお願いします」

彼の登場によって今回の依頼についての話し合いが始まる。

「先週の話です。わが社へこのような脅迫文が届けられました。最初はただの悪戯だと考えていましたが、このような出来事が続けて起きました」

黎斗がみせたのは割れている窓ガラス、破壊されている機材の類。

「これ、警察には？」

「一応、話してはいますがまともに相手をしてくれませんでした。そして、一昨日にこれが」

「どれどれ？」

ジンは手紙を覗き込む。

——今宵のイベントを中止せよ、さもなければ、イベント会場で歌姫が血にまみれることになるだろう。我に奇跡の小箱あり。

「歌姫って……コレ？」

響が翼をみる。

翼は一瞬、眉間を動かすも表情は変えない。

傍に壇黎斗という部外者がいるからだろう。

ジンはある一文を見ていた。

「どうされました？東郷さん」

「ん？ああ、ここの一文が」

「奇跡の小箱ですか？それに心当たりが」

「ある」

緒川の疑問にジンは迷わずに答える。

「だけど、それをいえば、余計に周りを不安にさせることになるし、向こうがそれを狙っているかもしれない。とりあえず、響」

「なに？」

「お前は歌姫の護衛な」

「ええ……まあ、仕方ない。わかった」

嫌そうな顔をしながら響は頷く。

「イベントはやるつもりなのでしよう？」

「はい、上やスポンサーはそれを望んでいます」

「翼さんに危険が及ばないようにお願いします……」

「じゃあ、響、その歌姫を楽屋へ連れて行ってくれ」

「はい」

面倒そうにしながら立ち上がる響、緒川に言われて翼は無言で部屋を出ていく。

残されたのはジン、緒川、黎斗の三人。

「さて、一応確認だが、お前の自作自演ということはないだろうなあ？」

「……当たり前だあああああ！この天才的頭脳を持つ私があ！こんなことするわけないだろうがア！」

先ほどまでの爽やかさはどこへいったのやら、壇黎斗は普通の人がドン引きするほどの狂気的笑みを浮かべる。

その姿にジンと緒川はため息を零す。

「お前も苦労するなあ、緒川」

「ジンさんほどではありませんよ。それよりお久しぶりです。司令から話は聞いていますよ」

「根回しが早くて助かるよ……俺一人じゃ、この阿呆を抑えられる自信がない」

「すいません、僕もありません」

はあ、とため息を零す二人。

実のところ、壇黎斗という男。天才的な頭脳は持っているが酷く人として狂っていて、前に自分の計画の為に多くの命を犠牲にしようとしたことがある。その時、緒川やジン、当時の探偵社のメンバーが計画を叩き潰したのである。

先ほどの初対面のような振りをしたのは風鳴翼に知られないようにするためである、もし、緒川が面識アリと知れば、余計な騒動を招

くことは理解していた。

一応、大人しくしているが何か仕出かさないよう常に二課の監視の目があった。

「ところで、ジンさんの言っていた心当たりというのは」

「ガイアメモリだよ」

ため息を零しながらジンは答える。

「エコの街、風都でばらまかれた特殊なアイテム、生体コネクタを体に打ち込み、ガイアメモリを差し込むことでその者は超人、ドーパントと呼ばれる存在になる」

「そんなものが……」

「つても、数年前の話なんだけどなあ」

ジンの記憶している限り風都でガイアメモリはかなりレア度が高いもののため、一般人が早々手を出せるようなものではない。ましてやこんなことのために手に入れる事態が奇跡に近いといってもいい。

「お困りのようだなあ！神の恵みが必要かなあ？」

揶揄う様に壇黎斗がジンへ顔を近づける。

いつの間にか彼の手には白いゲームカセットが握られていた。

「お前、それは」

「私に不可能はない！破壊されたガシヤットの再現など造作もないのだあー！」

「……いつの間にそんなことを」

緒川が頭を抱えていた。

「どうやら二課の目を掻い潜って開発していたらしい。」

「お前は懲りるとかそういうことはないのか？」

「神を縛るものなど存在しないいヴァアアアアアアアアアアアアアアア!？」

言葉を最後まで放つことなく緒川が用意していたハリセンで容赦なく殴り飛ばす。

「自重しろ、アホ」

天才とバカは紙一重である。

その言葉を二人は嫌というほど、理解した瞬間だった。

風鳴翼と響の間に会話の類は存在しない。

響自身、会話をする気が毛頭ない。

翼も元々、不器用の方であるため、話を切り出せない。
そんな重たい空気が漂っていた中。

「あれ、響ちゃん？」

「あ？」

自分の名前を呼ぶ存在に響は振り返る。

「刑事のしんちゃん」

「よっ」

やってきたのは泊進ノ介、響の中で刑事のしんちゃんて定着していた相手だ。

前のアイドル護衛事件の時からだ。

「泊さん、こちらは？」

今回は見知らぬ人物がいた。

制服警官のような服をきている。違いがあるとすれば、胸元に「国際警察」という文字とマークがあること。

そして、無表情。

「彼女は響ちゃん、ほら、前に話した春日部探偵社のスタッフだ」

「初めまして、春日部国際警察に配属されました詩島霧子です」

「響、よろしく」

短く挨拶して、響は進ノ介に尋ねた。

「何しに来たの？」

「俺達の部署にアイドル護衛の依頼がきてな、そこでこここの責任者に話を」

「ジンが今、話している。あっち」

「そうか、サンキュー……ところで、こちらの方は」

「泊さん！風鳴翼さんのことを知らないんですか？」

「えっと、護衛対象であることは聞いているんだけど、ほとんど、知らない」

「どうやら本当に知らない様子。」

進ノ介の態度に霧子は呆れるしかない。

「この国のトップアーティストを知らないなんて最上さんが呆れてしまいますよー！」

「ふうん」

「初めまして、風鳴翼といいます」

沈黙していた翼が挨拶をする。

「春日部国際警察の詩島霧子です」

「泊進ノ介です」

「責任者の壇さんはあちらの会議室にいます。そちらの方がいいですよ」
「たように探偵社の人と打ち合わせをしていますよ」

「ありがとうございます。霧子、行こう」

「はい」

ぺこりと会釈して進ノ介と霧子は離れていく。

「警察もやってくるのか……」

「依頼は必ず完遂するから」

漏らした言葉が届いたのか響は短く答える。

翼が視線を向けたが響は離れたところにいた。

「(なんだ、あれはミニカー?)」

手の中に赤いスポーツカーのようなものをのせながらぶつぶつと
呟いている響の姿に翼は疑問を抱いていた。

今回のイベントは幻夢コーポレーションと提携しているゲーム会

社との合同企画。

群雄割拠の時代に現れる主人公が様々な強敵と戦いながら天下泰平を目指すというゲーム。

風鳴翼はイメージソングとして参加していた。

今回のイベントの終盤でゲームのキャラクターの一人のコスプレをした風鳴翼がゲーム本編で流れる曲を歌う。

風鳴翼がみられるということも多くファンが訪れていた。

「ガイアメモリ？」

「ああ、風都という街でばらまかれていたアイテムなんだが、おそらく襲撃者はそれを使うと考えられる」

「それはとても危険なものですか？」

ジンと進ノ介、霧子は会場に不審者がいないか見回りをしている。

「俺も詳しいことは知らない。ただ、メモリにはかなりの毒素が含まれていて、使用を続けていけば精神が蝕まれるとか」

「危険じゃないですか！」

「そういうことであれば、カモン！シフトカーズ！」

進ノ介の腹部に装着されているクリムことベルトさんが会場の護衛の為にシフトカーを集めた。

「ところで、ジン。このゲーム会社の社長さんと知り合いなのか？」

「まー、色々」と

壇黎斗との因縁は小説一冊分の話がある。

最終的にしんのすけのカンチョーによって世界が救われたなどと言えるわけがない。

「クスッ」

カンチョーされてレベルダウンした壇黎斗の姿を思い出して笑ってしまふ。

「どうしたんですか？」

「ああ、何でもない。さて、会場の見回りは終わったから、開始までは歌姫の護衛だけなんだが……」

「あの二人、大丈夫かなあ？」

進ノ介の予感的中していた。

室内に入ると重苦しい空気が漂っている。

少しばかりの距離をあけた状態で響はカチカチとゲーム機を弄っていた。

ライブまでの時間がないことから翼はメイクなどを受けている。だが、あまりに重たい空気にメイク担当の人はやりづらそうにしていた。

そして、マネージャーの緒川がこの場にいない。

「まあ、こうなるよなあ」

「予想はしていたがとてつもない空気だね」

呆れた表情を浮かべるベルトさん。

同じことを思っていた進ノ介も同意した。

ジンは気にせず少し間を開けて響の隣へ腰かける。

即座に響が開いた距離を埋めてくる。

「距離が近い」

振り返ると同時に置かれていたペンを響へ投擲する翼。

舌打ちしながら足でペンを蹴り飛ばす響。

「邪魔、するなよ」

「護衛なら護衛らしくしていなさい」

一触即発。

そんな空気の中でジンは購入していたポテチの袋を開ける。

「大物なのか、バカなのか」

「今回は泊さんに同意します」

離れたところへ腰かける進ノ介と霧子。

「てか、何でこんな空気なの?」

やれやれと肩をすくめるジン。

響はゲームの手を止めて画面をジンにみせる。

「この攻略が難しい」

「……お前、遊んでいるな」

「いいじゃん、本番まで時間あるし……ジンもポテチ食べているじゃん」

「まーなあ、どれどれ」

「たるんでいる!!」

我慢ができなくなったのだろう。

バンと机を叩きながら翼が振り返る。

「人の護衛をすると言いながらたるんでいる!そんなので務まるのか!?!」

「大丈夫だ。まあ、うん」

少し考えながらジンは立ち上がる。

「さて、ちよつと出かけてくるわ」

「わかった」

響はゲーム機の画面へ戻る。

翼が響の前にやって着てゲームを取り上げた。

「話は終わっていない!」

「私は話をしていない」

にらみ合う翼と響。

「お前みたいなのがどうして、奏のギアを纏っているのか!」

「知るか、こつちも好きで纏っているわけじゃない。ノイズをぶつ壊せるから利用しているだけだし」

「貴様!」

「そ、そこまで!ほら、本番もそろそろ始まるから!」

止めに入る進ノ介。

このままでは本気でやりあいかねない。

先ほどの会話は気になるところだが、護衛としての仕事に意識を向けていた。

「私はお前を認めない」

翼はそういつて外へ出ていく。

残された響は乱暴に置かれたゲーム機を回収すると外に出る。

「行かないの?」

「あ、そうだった。霧子」

「はい!」

響の後を追いかける進ノ介と霧子だった。

イベントが始まった。

最初に責任者である壇黎斗が笑顔でゲームについての説明を行っていく。

今回のゲームにおける目玉、そして主要キャラクター。

ゲームの簡単な操作方法などリアクションを交えながら行う。

腐ってもゲーム会社の若き社長。

あつという間に多くの観客を魅了させる。

会場が熱気に包まれた最高のタイミング。

その場面で、風鳴翼の登場。

会場が沸き上がるのは当然だろう。

トップアーティストとして奏でる彼女の歌声に誰もが魅了されていく。

「すげえな」

風鳴翼の歌を始めてきた進ノ介は感嘆の声を漏らす。

「素晴らしい歌声だ」

同意するようにクリームも頷いた。

沸き上がる会場。

さらなるヒートアップのタイミングでソレはやつてきた。

「泊さん！」

霧子が会場の空を指さす。

いつの間にか風鳴翼の前に人の形をした怪物が現れていた。

背中から伸びる羽を動かしながら複眼は風鳴翼を捉えている。

「警告を無視してライブかあ、いい身分だなあ、まあいい！潰してやるよ！」

「やめろ！」

進ノ介が止めようと駆け出した時、怪物の後頭部から伸びている細長い尾のようなものから無数の針が放たれる。

飛来した針のいくつかが形を変えて進ノ介の体を壁に縫い付けた。

「さあ、俺の剣を味わってもらおうか！」

いつの間にか怪物の手に細長い剣のような針が握られている。

振るわれる刃を翼は後ろへ下がって躲す。

「（人がいなければ！）」

怪物の出現で逃げ惑う人がいる。

大勢の観客の中で翼はシンフォギアを纏うことは出来ない。

国家の最重要級の秘匿であるギアを纏うには二課の司令の許可がいる。

「ノイズでなくとも、このようない！」

下がろうとした翼と入れ替わるように響が前へ出る。

「なっ、よせー！」

「変身」

響は飛来してきたホッパーゼクターを掴んでパンチホッパーに変身。

目の前のトンボの怪物へ拳を放った。

シンフォギアと比べると爆発的なパワーはない。

しかし、ライダーの力は並の怪人であれば大ダメージを受けてしまう。

「シンフォギアではない!?!」

驚く翼の前でパンチホッパーが二撃目を繰り出そうとしたが空へ逃げられてしまう。

「ああ、メンドイ」

悪態をつきながらパンチホッパーは翼を脇へ抱えて走り出す。

「何をー」

「うるさい、ここで暴れたら問題」

騒ぐ翼を無視しつつ、パンチホッパーが逃げようとするが、阻止するように地面へ無数の針が突き刺さった。

「逃がすかよ！俺をコケにしやがってえ！」

「別にしてない」

「うるせえー！」

トンボの怪物がパンチホッパーへ迫ろうとした時。

「やめろー！」

拘束から解放された進ノ介がタツクルを仕掛ける。

攻撃を受けた怪物は地面へ落ちそうになるがすれすれのところで堪えた。

「行こう！ベルトさん！」

「OK！Start your engine！」

イグニツションキーを捻りながらシフトカーを装填。

仮面ライダードライブに変身してドア銃でトンボの怪物を狙撃した。

攻撃を受けたトンボの怪物は会場の外へ飛び出す。

「逃がすかー！」

ドライブが怪物を追いかけるのに対して、パンチホッパーは動かない。

「何故、怪物を追いかけない!?!」

動かないパンチホッパーに翼は訴える。

「アンタの護衛」

「なに!?!」

「私はアンタの護衛を引き受けている怪物の迎撃は依頼内容にない。あと」

——戻ってくるし。

パンチホッパーの言葉通り、衝撃と爆発がステージに起こる。少し離れたところに着地するドライブ。

「やったか!？」

土煙の中、トンボの怪物は平然としていた。

「効いていないというのか!？」

驚きの声を漏らすベルト。

「どいつも、こいつも俺の邪魔をしやがってえ！」

叫びと共に長い尾から放たれる無数の針。

「チツ」

パンチホッパーは拳を振るおうとして両手を広げてすべての針を受け止めた。

「響ちゃん！」

ドライブが叫ぶ中、爆発の中からふらふらとパンチホッパーが姿を見せる。

「まずはてめえだ！」

トンボの怪物はパンチホッパーに狙いを定めたらしく、間合いを詰めて手の針を突き立てようとする。

誰もが間に合わないと思われた時。

光弾がトンボの怪物の額を射抜いた。

「ぐがっ!？」

光弾を受けて地面に倒れるトンボの怪物。

「盛大に遅刻しちまった」

ため息を零しながら会場内に乱入する者がいた。

右手に黒と紫のゲームパッド型ガシヤコンウエポンを装着。そこから煙が出ている。

「すまないな」

倒れそうになったパンチホッパーを支える。

「ジン……」

「交代だ。俺がやる」

「わかった」

ふらふらと下がったパンチホッパーと入れ替わるようにして東郷ジンが前へ出た。

「次から次へと！なんなんだあ！俺の邪魔をしやがってえええええ！」
「悪いな、そういう仕事なんだよ」

左手に紫色のゲームガシヤットが握られていた。

【マイティアクションX！】

背後にゲーム画面が表示されて、周囲に無数のメダルのようなものが広がっていく。

「グレード1、変身！」

ガシヤットを差し込み、目の前のパネルを突く。

選択されたパネルが輝き、ジンの体を包み込んだ。

光の中から現れたのはずんぐりむつくりした者だった。

黒いバイザーに赤い瞳、頭部に黒い尖った髪のようなものがあった。

「え、何、あれ？」

「私もわからない」

突然の姿に味方側も困惑していた。

「可愛い……」

ぽつりと漏らした者がいたとか。

「ふざけてんじゃ！」

「そんなわけねえだろ、慌てると損するぞ？」

【レベルアップ！】

ドライバーの桃色のハンドルを開いた途端、ずんぐりむつくりした体から一転して細身の人型となった。

「ゲムム、レベル2だ、さて、行くか」

腕に装着しているガシヤコンバグヴァイザーをチェーンソーのよう
に攻撃形態へ切り替えて刃を振るう。

刃を受けたトンボの怪物は攻撃をまともに受けて仰け反る。

「このっ！」

「ほい」

【鋼鉄化！】

周囲へ現れていたエナジーアイテムの一つにゲナムは触れる。鋼鉄化によって放たれたトンボの怪物の針は弾かれてしまう。

「チィッ！」

「さて、さっつさと……ッー！」

全員へ降り注ぐ殺意。

あまりの濃厚さに誰もが動きを止めてしまう。

【トリプルスキヤニングチャージ！】

「くそっ！」

上空から降り注ぐエネルギーの必殺技。

ドライブとゲナムは翼や霧子たちを守る。

爆風と煙で視界が奪われた。

しばらくして、煙が晴れるとそこにトンボの怪物の姿はない。

「逃げられた!? それにしても、今の攻撃は」

「まさか……」

「クリムの予想している通りだろうな」

やれやれと肩をすくめながらドライバーからガシヤットを外す。

くるくると手の中でガシヤットを遊ばせながらジンは周りを見た。

「さて、クリム、ちよつと任せた」

「むっ？」

「あ、ちよつと」

ドライブが止める暇もなくジンは足早にパンチホッパーに近づいた。

「外すぞ?」

小さく頷いたことを確認してからドライバーのホッパーゼクターを外す。

ヒビイロノカネの鎧の中から響が姿をみせる。

ただし、背中から血を流して。

「響さん！」

霧子が驚いて駆け寄る。

「救急車を！」

「はい！」

「……そんな」

ぺたんと翼は座り込む。

その目は背中から血を流している響へ向けられていた。

「響さん、背中への傷が浅くてよかったですね」

「ああ、出血が多すぎて今は輸血つてところだけだな。霧子、親御さんの方には」

「連絡済みです」

病院に運び込まれた響は麻酔で寝ている。

様態を聞いて一安心する進ノ介と霧子は座っているジンの姿を見つけた。

「東郷さん！」

「ん、ああ……悪い、少し休んでいた」

「顔色が悪いようだが」

「これのせいだよ」

ジンが懐から取り出したガシヤット。

「それは、さっきの」

「プロトマイティアクションX、自称神の頭脳を持つ男が作り上げたプロトタイプ、プロトタイプ故体にかかりの負担がかかる。短時間の変身でこれだからなあ」

少し呼吸を整えて立ち上がる。

「さて、仕事はまだ終わってねえから行くか」

「え、響さんの傍にいないくて」

「今は仕事が優先だ。それに麻酔でアイツは寝ているからな」

「でも！響さんは貴方の恋人では？」

「恋人じゃねえよ!?相棒だ……目を覚ましたら文句は言われるかもしれないが仕事優先だ」

色々とウソが霧子へ吹き込まれているかもしれないと思いながらジンはイベント会場へ向かった。

「うわ、パトカーだらけ」

「警視庁のパトカーだ」

「おい！進ノ介え！」

「現さん!？」

ライブ会場へ向かうとそこにはたくさんのパトカーが停車していた。

眺めている進ノ介達のところへ警視庁の刑事である追田現八郎がやってくる。

「お前ら国際警察だけに任せてはおけないってことで本庁から応援に来たんだよ。詳しいことを話せ……って、隣のとめえは！」

「あ、ゲンパチさんだ」

「誰がゲンパチさんだ！追田現八郎って名前があるんだよ！」

「はいはい、じゃー、俺は黎斗にあって来るわ。後で来るだろ？」

「ああ、また後で！」

現場に集まっていた警察と話を始める進ノ介達をみながらジンは施設の中に入る。

「遅かったではないかああああああああああああああああああ！」
「テンションたけえな、おい」

壇黎斗が宛がわれている部屋。

その中に入ったジンを笑顔で彼は出迎える。

彼は狂気の手顔を浮かべながら高速でキーボードを叩いていた。

動きを見るだけでジンは彼の機嫌がよくわかる。

「これ、返すぞ」

「待てい！」

黎斗は薄緑色のガシヤットを投げってくる。

「何だ、これ？」

「レベル1、レベル2は取れた！ならば、次の段階へ行こうではないかあ!!もう一個おまけ」

投げられた緑と黒のガシヤットを受け取る。

「お前、自分が監視されていること忘れてないか？」

「知らぬわあ！この神の頭脳を止められるものなど、誰もいなあい！」
しんのすけのカンチョーが必要なのではないだろうか。

本気で心配になったジンである。

「ところで」

「急に真顔モードになるなよ」

先ほどまでの狂気の手顔を引っ込めて黎斗は机にある資料を置く。

「何だ、これ？」

「提携先のゲーム会社で一週間前に退職した人間がいた」

「今回の騒動の主犯だと？」

「退職する前にこのゲームの企画のことで揉めたらしい。風鳴翼を使うなんて、それ目当てのプレイヤーしかこないのではないかと意見し

たという」

「それで首か？」

「企業は企業なりの考えがあるというが、まあ私には関係のないことだ。ああ、あと、キミが遭遇した怪物はトンボではなくメガネウラだ」

「あ？」

「古生代に生息していたと言われる全長七十センチの巨大生物だ！ガイアメモリは地球の記憶を内包しているのだろうか？なら、ば！そういうタイプのメモリがあってもおかしくはない！」

「確かに、一理あるな」

「わかったら、とつとといきたまえ」

今は新たなゲームの製作で忙しいとキーボードを叩き始める。

ジンはため息を吐きながら手に入れた二つのガシヤットを懐へ入れた。

「サンキューな」

感謝の言葉を告げて部屋を出る。

「フン」

「東郷ジン！貴方に、話がある」

「こんな道の真ん中で話というのもあれだから、近くのテラスで話そう」

風鳴翼と一緒に近くのテラスにある椅子へ腰かける。

「話ってというのは？」

「立花のことだ」

「アイツのことならアイツへ聞くのが……っていうのが普通だけど、そういうことが無理か」

「……ああ」

お互いに不器用っぽいもんなあ。

心の中でジンは思いながらも決して口にしない。

口にすれば何かが起こることは明白だった。

あの二人を相手にしていれば嫌でも学習できる。

「んで、立花響のことで何を知りたいんだ？アイツがシンフォギアを纏っている経緯なんかは知らないぞ」

「そうじゃない、その………力を立花はどうして振るうのか、その理由が気になった」

翼はぼつりぼつりと自らの疑問をぶつける。

ぶつけられたジンはため息を吐く。

「なっ!？」

「ああ、違う違う。お前のため息を吐いたわけじゃない。俺が言いたいのは、まあ、なんだ」

言葉を考えながらジンは告げた。

「難しく考えるな。お前は考えすぎなんだよ。お前の中でどれほど天

羽奏が大きい存在なのかは知らない。だが、今、ガングニールを纏っているのは天羽奏じゃない。響だ。そのことだけは覚えておけ」

「それは……」

「まずはそこからだと思うぞ？アンタが立花響という存在を知ろうと思ふのなら」

ジン は立ち上がる。

「ああ、あと一つ」

伝えるべきか悩みながらもジンは話すことにした。

「守るということをよく考えることだな。俺が言えるのはそれだけだ」

「それは、一体」

「お前は防人を自称していたけれどさ、その防人のすべきことは何かってことだよ」

「それは……」

視線を鋭くしてジンは問いかける。

「お前が守りたいのは国か？それともそこに住まう人か？どっちだよ」

「そんなこと、どちらも」

「言っておくが違うからな。まあ、よく考えておけよ」

ジンは端末を取り出す。

「はあ、行くか」

響が目を覚ましたという連絡を受けてジンは一旦、イベント会場を離れることにした。

「……ジンはいないのか」

病室でむくりと響は目を覚ます。

起き上がろうとしたところで背中に激痛が走る。

「傷か」

風鳴翼を守ろうとして傷を受けたことを思い出す。

「はぁ、何やってんだか」

恨んでいるなら無視してもよかった。

だが、はつきりってそこまで恨んではいないのだろう。

あの時のライブが全てを狂わせた。

狂ってしまった針を戻すことは出来ない……ならば前を向くしかない。

その過程で過去の原因の一つと遭遇した場合、自分がどうするか。

「守るか……変わったかな？前より」

ただ恨むだけだった自分。

何もかも壊して、全てをぶっ壊してやりたいと思っていた。

それに変化が起こっている。

自分はこれからどうするのだろうか？

どうなるのか。

響がぼーっとしているとジンが入って来る。

「ジン！」

「元気そうだな。体の傷は？」

「まだ痛い」

「だろうな。ガイアメモリで受けた傷は自然治癒以外で治す方法がないからな。しばらくは休め」

「ねえ、ジン」

「あん？」

「私、変わったかな？」

ベッドのシーツを掴み、俯きながら尋ねる。

自分は変わっているのだろうか？その不安の答えを求めるようにジンへ、いとしい人を求める。

「良いことを教えてやろう」

にこりとジンがほほ笑む。

「人は変わったかなと思った瞬間が、変わっている証拠らしい」
「なに、それ？」

にししとジンが笑う。

「俺の人生の先輩が教えてくれたんだよ」

「その人、変わっているね」

「かもな」

ジンは響の頭をポンポンと撫でる。

大好きな人の手の温もりが気持ちよくて目をつむった。

「ジンは私のこと、見捨てないよね」

「ああ、俺が死ぬか、お前が自立するまでは面倒みてやるよ」

「じゃあ、結婚を」

「ガキが早い」

ペチンと額を指でついてジンは立つ。

「仕事に戻る。安静にしとけよ。後で何かお見舞いの品を持っていくからよ」

「うん」

ベッドへ響が横になったことを確認してジンは部屋に出る。

「さて、さっさと仕事を終わらせませうか」

夕方に再びライブが行われる。

場所は変わっているがそこに再びメガネウラは現れるだろう。その時に決着をつける。

「さあ、始めようか」

男はふらふらとライブ会場へ向かっていた。

警告は念のため飛ばしていたが無意味。どうやらイベントは再び行われる様子だ。

「愚かだよなあ、アイドルなんか入れるからゲームの面白みがわからなくなる。そんなこともわからない奴はクズだ」

ぶつぶつと言っているその目は濁り切っていた。

定まっていない焦点の瞳はライブ会場へ向けられている。

似たような言葉を繰り返しながら男は懐からガイアメモリを取り

出す。

Mと側面に表示されているガイアメモリを起動させようとした。

「いやあ、予想通りにこっち来るとか驚きだわ」

聞こえてきた声に男が顔を上げる。

いつの間にか立っている男がいた。

灰色のコートを纏い、腹部にゲームドライバーを装着している。

東郷ジンは手の中できるとプロトマイティアクションXガ
シャツを振り回していた。

「誰だあ、お前?」

「ン?お前の邪魔をする人」

「そうか」

【メガネウラ】

「じゃあ、死ねよ」

メモリを起動して首元に現れた生体コネクタへ差し込む。

吸い込まれていくメモリ、同時に男の体をメガネウラドライバーへ
作り替える。

「はあ、俺さ、実のところ、アイツの歌、そこそこ好きなんだよねえ」
ため息を吐きながらガシャツを起動する。

【マイティアクションX】

「だからさ、お前を潰す」

ガシャツを差し込み、目の前の選択パネルを突く。

選ばれたパネルと同時にジンはゲムムに変身する。

「さあ、テストプレイの時間だ」

【ステージセレクト!】

ゲームドライバーのステージセレクト機能を使って場所を教会へ
変える。

「ランダムとはいえ、これはどうなんだ?」

メガネウラドライバーが急接近してくる。

ジャンプして攻撃を回避しながらゲムムはゲームドライバーを開
いて、レベル2へその体を変えた。

腕に装着されているガシャコンバグヴァイザーでメガネウラド

パントの背中を狙撃する。

攻撃を受けたメガネウラドーパントはのけ反りながらも尾から無数の針を放ってきた。

「おっとー！」

攻撃が掠つてしまい、ライフゲージが減少する。

「さてさて、試してみるか」

ホルダーに入っている一つのカシヤットを起動する。

【シャカリキスポーツ！】

パネルから現れる自転車型のスポーツゲーム。

「よっとー！」

スポーツゲームに乗り、ペダルをこぎながらメガネウラドーパントを翻弄する。

針や手の中の針を振るうも回避して、次々と翻弄していくことで相手が苛立ちの声を上げた。

「グレード3」

【レベルアップ！】

【シャカリキ！シャカリキ！バッドバッド！シャカツトリキツとシャカリキスポーツ！】

ゲナムにスポーツゲームが合体。

スポーツアクションゲームレベル3へその姿を変える。

両肩に装備されているトリックフライホイールの一つを外して投擲した。

メガネウラドーパントが針で防ごうとするが回転しながら繰り出されたトリックフライホイールに弾かれて直撃する。

大ダメージを受けたメガネウラドーパントは後ろへ吹き飛ばす。

「さて、もう一つ、試すか」

ホルダーからもう一つのカシヤットを取り出す。

緑と黒のカシヤット。

【名探偵ダブル！】

「何これ？」

気になりながらもキメワザスロットにカシヤットを差し込む。

「クリティカルストライク！」

雑音交じりの音を放ちながらエネルギーを纏ったキックをメガネウラドローパントへ放つ。

攻撃を受けたメガネウラドローパントは大爆発を起こす。

煙の中からメモリが転がり出てくる。

疲労に染まっている男は痙攣をおこして倒れた。

「ガイアメモリ破壊機能があるって試したけど、行けるな、これ」

キメワザスロットから名探偵ダブルガシヤットを外しながら眺める。

「さて、警察を」

呼ぼうかと考えた直後、背中に衝撃を受けてゲンムは倒れる。

その際にドライバーからガシヤットが外れて地面に転がっていく。

「油断はいけないなあ、愛しい人お」

「てめっ！ロイミュード108！」

熱のような痛みを感じながらジンは振り返る。

そこには雪音クリスと同じ顔をしている少女、ロイミュード108が銀色の鎧をまとっていた。

「酷いなあ、今の私はロイミュード108って名前じゃないよ？」

「あ？」

「イリス、それが私の名前だよ。まあ、進化態としての姿はまた別だけどねえ」

ニコニコと笑みを浮かべながらロイミュード108ことイリスは結晶のような鞭を振るう。

咄嗟にジンは横へ跳んで回避しながらガシヤットを拾い上げる。

「おっと、ダメだよお、愛しい人！」

変身しようとしたタイミングでイリスが鞭を振るう。

バチヤンと地面が砕けた。

「あつぶねえなあ！おい！」

「だってえ、変身されたら愛しい人の顔がみられないじゃん！今日は私の新しい衣装をみてもらいたいんだからさあああああ！」

連続して振るわれる鞭をギリギリのところまで躲していく。

ガシヤットを差し込もうとするタイミングで速度が増す。
当たれば致命傷。

そんな攻撃に意識を向けなければならなかったために変身することができない。

「流石だねえ、でも、どうせだし」

——ギア、あげていこうかあ。

イリスが深い笑みを浮かべた。

無理矢理ガシヤットを起動しようとした時、脇腹に激痛が走る。

「づあっ！」

口から苦悶の声漏れる。

地面から結晶の鞭が出ていた。

「もう一本……」

「誰も一つしか扱えないなんていつてないもんねえ？」

笑顔を浮かべながらイリスは鞭を引く。

べとりと血がついた鞭の先端を彼女は舐める。

「ううん、素敵い、愛しい人の血っておいしい！」

「うわあ、ドン引きだよ」

脇腹を抑えながらイリスを睨む。

「あ、変身できないよね？大丈夫、殺して愛しい人剥製にして愛するか
らー！」

「全然、嬉しくねえよ！」

痛む体を抑えながらガシヤットを起動する。

【マイティアアクションX】

「変身、グレード2」

差し込むと同時にハンドルを開いてゲムムレベル2へ変身する。

痛みに堪えながらバグヴァイザーを構えた。

その時、どこからか歌が聞こえてくる。

「この歌声……」

ザン！とイリスの目の前に刃が降り注ぐ。

「つたく、何だよお？」

イリスの目の前に降り立った巨大な剣。

その上には。

「あー、アメノハバキリかあ」

「見つけたぞー！ネフシュタンの鎧！」

風鳴翼はシンフォギアを纏って刃をイリスへ向けている。

イリスはあーと思い出したような表情を浮かべた。

「そういえば、この鎧って二年前にアンタ達が起動させようとして失敗した鎧だったっけえ？すっかり忘れていたよお」

「貴様あー！」

怒りながら風鳴翼は刃を振るう。

鞭でイリスは刃を受け止めた。

「ジン！大丈夫かねー！」

シフトスピードがやってくる。

「クリム……マッドドクターを呼んでくれ」

「その傷でまだ戦うつもりか？すぐに避難を」

「嫌な予感がする」

ジンは目の前で戦う二人のやり取りを見て嫌なものを感じ取っていた。

「進ノ介が来るまで」

「クリム！」

シフトスピードを握り締めてジンは訴える。

「頼む！」

「あれは！」

風鳴翼が飛び出したことで泊進ノ介と緒川がトライドロンの目的地へやって着た。

シンフォギアを纏っている翼と鎧を纏っているイリスが戦う光景を見て緒川が息をのむ。

「あれはネフシュタンの鎧！まさか、本当に」

「緒川さん、あれを知っているんですか？」

「それは……」

「進ノ介！」

シフトスピードがやってくる。

「説明している暇がない！すぐにあの二人を止めるんだ！」

「どういうことだよ！」

「急げ！ジンの予想が正しければ、風鳴翼は自らの命をなげうってでもあの鎧を取り戻そうとするぞ！」

「はあ!?命?どういう」

「時間がないんだ！すぐに変身してくれ！」

「後でちゃんと説明してくれよ！」

ドライバーを装着して進ノ介はドライブタイプワイルドへ変身。

ハンドル剣を構えて駆け出す。

「おい、やめろ！」

「邪魔をするな！」

「ドライブかあ、面倒だなあ」

風鳴翼は激昂しながら刃を振るう。

ドライブは咄嗟にハンドル剣で受け止めるが相手の剣技の方が上ですぐにいなされてしまった。

「くそっ、歌姫がこんなに強いってマジか！」

「なんとということだ！ドライブと同等の性能があるのか！」

分析したクリムは驚きの声を漏らす。

くるりと回転しながら反撃しようとしたドライブだが足に鞭が絡みついて宙に投げ飛ばされてしまう。

「邪魔だつてえの！失せろやああ！」

叫びと共にドライブを近くの木々へ投げ飛ばす。

「グッ！」

「進ノ介！」

「ここで見てなよ！ドライブう！どうしたあ？歌姫さん、この程度かあ？」

翼を挑発するイリス。

刃を地面に突き立てて翼は覚悟を決めた。

「防人の矜持、ここで見せる時！」

「翼さん！駄目です！」

緒川が何かに気付いて止めに入ろうとしたがイリスの鞭が迫る。

ドライブがハンドル剣で弾き飛ばす。

「危ないから！下がって！」

「いけません！翼さんは！翼さんは死ぬつもりです！」

「どういうことだね!？」

ドライブが抑えている中で緒川が叫ぶ。

「翼さんは絶唱を使うつもりです！それを使えば、命を落とす危険があります！」

緒川が止めようとするも既に遅い。

風鳴翼は絶唱を奏でた。

絶唱は装者の負荷を考えずにシンフォギアの力を限界上に解放する手段。

その力の奔流に緒川やドライブは近づく事すらできない。

「ハハッ、マジかよ」

力の奔流を目の当たりにしてイリスは息をのむ。

直撃すればロイミュードである自分もただでは済まない。

人間のような直感をイリスは感じ取っていた。

逃げようにも翼は既に目前に来ている。

「クソが」

目の前で力の暴力がイリスを襲った。

「くそっ！」

ゲンムに変身したジンはレベル3の力を無理やり使って暴力の渦を突破していく。

巨大なクレーターが出来上がっている中を突き進む。

レベル3のゲンムが中を探す。

「風鳴翼……」

「私は死なない……」

くるりと目が合い、ゲンムは言葉を失う。

風鳴翼の目や口から血がどくどくと流れていく。

ギアが解除され崩れ落ちる翼をギリギリのところまでゲンムが抱きかかえる。

「このバカ、無茶しやがって」

倒れた翼はまだ脈がある。

すぐに緊急搬送の手配をしなければならぬ。

「クヒャヒャヒャ」

煙の中、イリスの笑い声が聞こえてきた。

「やるなあ、絶唱を初めて受けたよお……まあ、コアのコアの損壊は逃れたけどさあ」

ボロボロの体のイリスは狂気に染まった笑みでゲナムをみている。「待っている。すぐに終わらせる」

血まみれの翼を横へ寝かせてゲナムはガシヤットをドライバーから外してキメワザスロットへ差し込む。

【キメワザ！】

【マイティ！クリティカルストライク！】

「てめえを此処で破壊する！」

「無理だねえ、愛しい人、お前に私は壊せない！」

繰り返される鞭をゲナムは走り抜けながら傍に転がっていたエナジーアイテムを掴む。

【高速化！】

一瞬でゲナムはイリスの背後に回り込む。

「これで終わりだ！」

エネルギーを纏ったキックがイリスを貫いた。

【会心の一発う！】

音声と共に大爆発が起こる。

『だから無駄だったのにい！』

爆発の中から108というナンバーが浮き出る。

『コアドライブビュアを持っていない愛しい人じゃ私を破壊することは出来ないよお、まー、ネフシユタンの鎧を回収しないとイケないからあ、ここでさようならだねえ』

「……くそっ」

108のナンバーが消えたことで追跡は不可能になった。

ゲナムは翼を抱きかかえて歩きだす。

「翼さん！」

煙を払いのけて緒川がやってくる。

「すぐに救急車を」

「はい！」

変身を解除したジンは一瞬、顔を歪めた。
プロトガシヤットは体に負担をかける。

その負担が今になってやってきたのだろう。

「大丈夫か？」

進ノ介がジンへ声をかける。

「俺よりも今はこの子だ」

すぐに駆け付けた救護班によって翼は搬送される。

「ジン！」

「旦那、すまない」

「気にするな……といたいがお前のことだ。気にしてしまうのだろう。だから言おう。お前は頑張った。それ以上は言わん」

「すまない」

やってきた風鳴弦十郎にジンは頭を下げた。

弦十郎はポンと肩に手を置く。

「それより、ネフシユタンの鎧のことだが」

「アンタら二課の保有していたあれだろ……どんだんあの時のライブの件が絡んできたな」

「ああ」

頷く弦十郎。

「何かが起ころうとしている。多くの何かを巻き込んだ何かがある」

「何かが起こる予感めいたものがひしひしと伝わってくる。」

「こりや、俺も本腰入れないといけねえかな」

ため息を吐きながらぺたんとジンは座り込んだ。

冷たい嫌な風が二人の間をすり抜けていく。

第十一話：トレジャーハンターみさえ

松明が唯一の明りといえる洞窟の中を進む者達がいた。彼らは慎重に洞窟の中を進む。

「……」

一人は探検家のような服に帽子、鞭を腰から下げた女性。もう一人は金髪で荷物を背負った青年。

そんな青年の後ろに赤ん坊を抱いている少年。

彼らはいわゆるトレジャーハンターである。

金銀財宝、失われた文明の謎を解き明かすために活動していた。

トレジャーハンターとして有名になっている野原みさえは歩みを止める。

「みさえさん」

立ち止まったみさえの後ろで仁藤攻介が視線を追いかける。

視線の先。

そこには立っている骸骨がいた。

片手にプラカードのようなものがあり「いますぐたちされ」と書かれている。

「ホッホー！これまた！」

「攻介兄ちゃん？」

「譲、定番ぼくなってきたぞ！」

にやりと仁藤が笑みを浮かべると同時にみさえが鞭を振るう。

鞭は天井から伸びている糸から骸骨を切り離す。

骸骨が音を立てて地面に落ちると同時に暗闇の中からたくさんの蝙蝠が飛んでくる。

みさえは咄嗟に譲とひまわりを抱きしめるようにして伏せた。

仁藤はその上から覆いかぶさるようにして三人を守る。

蝙蝠がいなくなつて三人は立ち上がった。

「行きましよう」

「ねえ、攻介兄ちゃん、僕達が探している財宝って何なの？」

「俺達が探しているのは太古の昔に存在していたエンチョー族が持つ

ていたとされる最古のメガネだ。文献として存在はしているが誰も見つけたことがない。それを発見できれば歴史的発見であるし、とんでもない財宝だ！」

「おおー！」

「たやー！」

譲とひまわりが驚きの声を上げる。

「幻と言われているエンチャー族の証明にもなるしね」

みさえはぴたりと立ち止まる。

洞窟の奥。

開けた空間にたどり着いた。そこには無数の棺のようなものが並んでいる、中心の場所には人の顔のような像が設置されていた。

開けている口。

その中に置かれている古いメガネのようなものがある。

みさえは口の中に手を入れて慎重にメガネを取り出した。

「おおーこれが噂のメガネかあー！」

仁藤はメガネを突きながら弟子の譲へみせる。

「古いから何も見えないねえ」

ぼつりと感想を漏らす譲。

その時。

——してください。

「んあ？」

暗闇に声が響く。

皆が身構える中、設置されている顔の瞳が赤く染まっていく。

——私のメガネを返してくださいあい！

声が響くと同時に周囲の棺が音を立って開かれる。

中から現れるのはメガネを装着したミイラ。

ミイラは「メガネを返してください」と同じ言葉を繰り返しながら手を前に広げて近づいてくる。

みさえは咄嗟に火をミイラの顔へ突きつけた。

しかし、ミイラは平然と近づいてくる。

「駄目、火が効かない！」

「だったら俺の出番だよなあ！」

【ドライバーオン！】

仁藤が指輪を腹部のベルトへかざすことでビーストドライバーが起動する。

「攻介兄ちゃん、僕も！」

「いいや、譲はここで見ていろ！ひまわりちゃんも抱えていないといけないからな！」

「変・身！」

【LION！ライオン！】

金色に輝くライオンを模した古の魔法使い。

それこそ仁藤攻介が変身したビーストである。

細身の刀身の武器、ダイスサーベルを取り出す。

「さあ……ランチ、あれ？朝飯食べたっけ？」

「どっちでもいいから早くしなさい！」

「はいはい！いただきまーす！」

みさえに怒鳴られたビーストはため息を零しながら目の前のミイラへ攻撃を仕掛ける。

殴られたミイラのメガネが外れて地面へ落ちた。

「メガネ、メガネ！」

メガネがなくなつて慌ててミイラは探し始める。

「そうか！」

みさえは愛用している鞭を振るう。

一瞬で複数のミイラからメガネを叩き落す。

「おし、まとめていただくぜ！」

【セイバーストライク！】

音声と共にダイスサーベルから表示された出目は5。

バツファロー型の魔力弾が一齐にミイラを飲み込んでいく。

ミイラは爆発と同時に無数の魔力を放出した。

魔力は全てビーストドライバーに吸い込まれる。

「どっちそうさん！」

両手を合わせて叫ぶビースト。

直後、地震が起こる。

「まずい！崩れるわ！」

みさえの言葉通り音を立てて遺跡が倒壊を始めていた。

「攻介兄ちゃん！」

「ああ、くそっ！」

変身を解除した仁藤も慌てて出口へ向かう。

みさえ達は着た道を全力疾走。

遺跡の外に置いてあった飛行機で脱出する。

数日後、みさえたちはエンチョー族の遺跡から香港へ来ていた。彼らの次の獲物は楊貴妃すら探し求めたと言われる幻の不老不死の秘薬。

その情報が黄金大飯店というところにあるという。

「しっかし、不老不死ねえ、本当だとしたらえらい話だな！」

「でも、不老不死の伝承って各地にあるよね？」

「たああい！」

譲の疑問に同意するようにひまわりが手を伸ばす。

「各地にある伝承の中でも一番、手に入れやすい情報を見つけてきたのよ！」

「みさえさん、それは少し」

「(セコイなあ)」

心の中で仁藤と譲は同じことを思ったが口にしない。

口に出せば最後、自分達はみさえの得意技ぐりぐり攻撃をその身で受けてしまうからである。

何度か野原家長男がその身に受けているのを目撃してきたことから二人は理解していた。

口は災いの門であると。

「じゃあ、まずはその飯屋を探すことからスタートだな！」

「出来れば、そこでご飯を食べたいなあ、お腹ペコペコだよ」

「そうねえ、エンチョー族の遺跡から直行してきたからそこで何か食べるというのもありね！」

彼らは調査を開始する。

様々な中華料理屋を調べて、訪問を繰り返してきたがめぼしい情報

はない。

「ないなあ」

十件目。

「ないね」

二十件目。

「たああい」

「ないわねえ」

三十件目。

「おかしいわねえ……」

そこからさらに数件を巡り。

「仕方ない、どこか適当なところで食べるとしましょうか、あそこか」

適当なボロイ店を指さす。

あまりの年季具合に譲は少し臆した。

「え、ここ？」

「譲う！中華料理は汚くて小さい方がおいしいんだぜ！これ中国の常識！」

「そうなのかなあ」

「ほら、行くわよ」

みさえを先頭にして彼らは店内へ入る。

店はかなりボロい。

彼らを出迎えるのはシニヨンと呼ばれる髪型でチャイナドレスを纏った巨乳の女性。

ボンキュボンというスタイルで美女なら野原家の大黒柱と長男は興奮していただろう。

しかし、この場にいるのはトレジャーハンターのみさえ、考古学バカの仁藤、中学生で初心の譲は少し顔を赤くした程度である。

「イラッシャーイ！」

「うまいもんくれ！腹減ってんだ！」

「攻介兄ちゃん、そんなのでいいの？」

「いいんだって！」

「まあ、こういうところじゃ攻介君の直感は当たるからね」
みさえは異を唱えることなく着席する。

こういう時の仁藤の直感は当たるということを知っているからこそである。

美女と入れ替わるようにして老婆がやってきた。

「うまいもん食わせてやるよ！」

「楽しみだぜ！早く！」

「慌てる乞食は貰いが少ないよ！」

「腹減つてんだよう〜」

「待つてな、死ぬほどうまいものくわせてやる」

老婆はそういうと店の奥に向かう。

まだかまだかと待つこと数分。

少しして肉パオが運ばれてくる。

「待つてましたあー！」

仁藤が懐から取り出したのはマヨネーズ。

譲も少し遅れてマヨネーズを取り出した。

くるくると回転させながら肉パオへマヨネーズをかける。

「いつみても思うけれど、マヨラーは怖いもの知らずねえ」

みさえはそう思いながら目の前の料理へ口をつけた。

直後、譲、ひまわり、みさえの顔が青ざめる。

「(何、これ!?)」

「(たああい!?)」

「(マズっ!)」

青ざめる中、仁藤だけは平然と料理を食べていた。

「うっめえー！マヨネーズかけても最高だぜ！」

元氣よく叫ぶ仁藤。

その時、老婆が仁藤の腹部と指を凝視していた。

正確には彼がつけているドライバーと指輪。

「アンタら、只者じゃないね？」

老婆はみさえへ囁く。

「えっ？そうかしら？」

「アンタらにこのオウゴンリユニクパオの作り方を教えてやる」

ぼそぼそと老婆は何かをみさえへ囁く。

「そして、最後にこの龍の心臓を乾燥させたリユウタンフンをかけて完成ね」

「龍？どうみても——」

老婆から渡された調味料の容器はどうみても桃色の豚でしかない。

そんなものを渡されて戸惑うみさえ。

直後、机の上に黒タイトの男が落下してきた。

「あぶねえな！料理が潰れちまうだろうが！」

「そういう話じゃない！」

仁藤へみさえが叫ぶ。

ドアを開いてドドドドと全身タイトにサングラスをかけた男たちがみさえ達を囲む。

「痛い目をみたくなければ、大人しくそれを差し出しな！」

黒タイトをかき分けるようにして三人の男が現れる。

低身長で中肉、小太り、細身の男達。

便宜上、彼らを三兄弟とする。

「痛い目をみたくなければ差し出しな！」

「そういうことだ」

そういうと三人は服を脱いでいく。

しかし、長男だけ上着を脱いだ後、シャツを取ろうとしてうまくいかなかった。

次男と三男が足と頭を引っ張る。

バランスを崩して長男のズボンはめくられて中からパンツがみえた。

「バカア！ズボン脱がしてどーするんだ！」

「何なのよ！アンタ達！」

みさえが叫ぶ中で三人は拳法の構えをいくつか行う。

そうして、身構えて襲い掛かる。

老婆はひらりと回避していく。

次男が拳を繰り出すもあっさりと躲される。

三男は駆け出そうとして躓く。

長男が竹棒を使って攻撃を仕掛けるもあっさり避けられるばかりか地面のでっぱりに竹棒がひっかかってそのまま店の外へ放り出される。

「何か、こんな感じの映画があった気がする」

ぼつりと譲が漏らす中、三兄弟は傷だらけになっていた。

「どうだ！これに懲りたら大人しく差し出せ！」

老婆は振り返らずに逃げ出す。

三兄弟が追いかけてしようとしたが立ちほだかるようにグラマラスな女性が立ちほだかる。

「うひょお！」

グラマラスな女性の姿に三兄弟が驚きの声を上げる。

「アンタら痛い目にあいたいのかあ！」

「あいたい！あいたい！」

「バカ！何言ってるんだ！」

長男が叫んだ直後、彼女の拳やキックが三兄弟に炸裂する。

「早く！リュタンフンを持って逃げて！」

「え？」

「おらあ！」

みさえからリュウタンフンを奪おうとする男を蹴り飛ばす。

「逃げるわよ！」

みさえの言葉で仁藤達も逃走するが黒タイトの男達が追いかけてくる。

その時、頭上に「黄金大飯店」という看板があったがみさえ達は気づかなかった。

「何なんだ！あいつら！人のランチタイムを邪魔しやがって！」

「攻介兄ちゃん、そういう事態じゃないと思うよ!？」

追いかけてくる連中の一人を蹴り飛ばしながら仁藤達は走る。

逃走をしていたが壁のある通路にぶつかってしまった。

みさえは鞭を振るう。

鞭に怯える男達。

「アンタ達！あそこを登って逃げるわよ！」

仁藤達が屋根に上ったことを確認してみさえも続こうとした時、
ジエームスと名乗る男の車が現れて乗り込む。
しかし、ジエームスこそ連中のボスだった。
みさえたちは捕まってしまう。

水上ボートの中。

「ほら、かかってこいよ!」

「俺達は逃げも隠れもしないぜ?」

「こんな状態で戦えるわけがないでしょ!」

みさえ達はロープで手足を縛られていた。

彼女達を挑発する三兄弟。

「ほら、どうした?かかってこい」

「みさえさん、気にすることはねえって、こいつら弱いし」

「なんだと!」

「あーあー。みなまで言うなつて！お前らが弱いからこうして動けない俺達を挑発してんだろ？わかってるって」

「攻介兄ちゃん、余計に煽っているよ」

譲がため息を零した時。

「ぎやーぎやーうるせえ奴らだな！」

「二「お疲れ様です！ボス！」」

三兄弟が頭を下げて、ジエームスがやってくる。

「アンタ！」

「フン、リュウタンフンを手に入れた方がいいが、オウゴンリュウニクパオを作れる婆さんを逃した……アンタは作り方を知っているか？」

ジエームスはウエイトレスをみる。

「私！ただのウエイトレスだから知らないね！」

「確かに私は作り方を聞いたけど、なんでお婆さんが教えてくれたのかわからないし」

「お婆さんいつていた、古の魔法使いを率いる者がいれば、選ばれた者達であるから作り方を教えるつて」

「古の魔法使いつて仁藤君のこと？選ばれし者つて？」

「つまり、お前は作り方を知っているわけだ。だったら作ってもらおうか？でなければ、その金髪や小僧の命はねえぞ」

「わ、わかつたわよ！」

脅されて数十分後。

みさえは肉まんを作った。

「これがオウゴンリュウニクパオかあ！」

ジエームスは肉まんを頬ぼる。

直後、顔をかきむしりながら吐き出す。

「これはオウゴンリュウニクパオじゃないなあ！ただの肉まんじゃねえか！」

「アンタ、老人だったのね!？」

白い肌は化粧だったらしく老けた老人の顔が現れる。

みさえが絶句している中、ジエームスは怒っていた。

「仕方ないでしょ！ボソボソ話していて聞き取れにくかったし！私な

りの感覚で料理したまでよ。足りないっていうんなら、これでもどぞ！オラオラオラオラオラ！」

リュウタンフンを肉まんへ振りかける。
舞い上がる粉末。

しばらくしてリュウタンフンから粉が出なくなった。

「あ、空になっちゃった。はい残念く」

「みさえさんも良い勝負しているねえ」

「たああい」

譲の言葉にひまわりも同意する中、ジエームスは怒りで体を震わせた。

「皆殺しだ！貴様ら生きて返さんぞ！」

「ちよつと！私達は巻き込まれただけよ!?勝手なことを言わないで！」

「うるさい！やい！三兄弟！こいつらを始末しろ！」

ジエームスの指示で走り出す三兄弟。

みさえ達の方へ行くと思つたら反転してジエームスを蹴り飛ばす。

ジエームスは数メートルほど吹き飛びながら壁に激突する。

「な、何をー」

三男が国際警察のマークが入っている旗を掲げた。

「フン！俺達は国際警察のス。パイだったんだよ！」

「ただの弱い奴と思つたら大間違いだぜ！」

「今までは演技だからな」

そういつて三兄弟が構えをとる。

今までのものと異なつてしつかりしていた。

彼らの動きに配下の者達は戸惑い始める。

「フン！国際警察など、私の敵ではない！お前ら！」

ジエームスの指示で部下たちは懐からガイアメモリを取り出す。

【マスカレイド】

メモリを差し込んで部下たちはマスカレイドドーパントへ姿を変
える。

マスカレイドドーパント達と戦う三兄弟だが、怪人に鍛えた人間で

は勝ち目がなく瞬く間に壁へ叩きつけられた。

入れ替わるようにしてみさえとウエイトレスが前に出る。

拳や蹴りで次々とマスカレイドドーパント達を圧倒していく。

「やるじゃねえか！」

「いけいけ！」

「すげーぞ！」

「この人達、傍観しているし」

「ま、いんじやねえの？」

戦う女性たちをしり目に男子達は傍観していた。

二人の女性によってマスカレイドドーパント達は全滅する。

「ええい、こうなれば！」

ジェームスが壁を叩く。

音を立てて背後の隠し扉が開く。

そこから白と紫の怪物たちが現れる。

カーバンクルと呼ばれる怪物だ。

「へへへ！こいつは人間では勝てんぞお！」

既に勝ったつもりでいるジェームス。

やれやれと仁藤は立ちあがる。

「みさえさんとウエイトレスさんは下がっていてくれよ」

「攻介兄ちゃん、僕も行くよ」

ひまわりをみさえに預けてカーバンクルの前に立つ仁藤と譲。

「さあて、行くぞ！譲！」

「うん！」

「ドライバーオン！」

「ドライバーオン！」

二人はドライバーを起動する。

「変・身！」

「変身！」

「LION！ライオン！」

「チェンジ！ナウ！」

仁藤はビースト。

譲はメイジへそれぞれ変身する。

「さあ、ランチタイムだ！」

「えっと、行くぞ！」

ダイスサーベルを構えて突撃するビースト。

ウィザーソードガンでメイジはビーストをサポートする。

「さあ、まとめて終わりだ！」

ビーストの必殺技によってすべてのカーバンクルが倒される。

カーバンクルから魔力を吸収した。

「ふうー、これだけ食べればキマイラもしばらくは満足するだろう」

「後は！」

みさえがジエームスを睨む。

頼みの綱のカーバンクルがあっさりと倒されたことでジエームスは動揺しながらもシートへ腰かける。

「へへっ、私がお前達みたいな奴に捕まってたまるか！」

シートのスイッチを押して空へ舞い上がる。

そのまま安全な場所まで逃げようとしたジエームスだが。

「なっ!？」

上空にいたヘリにシートは飛び込んでしまう。

そこには国際警察のマークと拳銃を突き付けている制服警官達。

「ここまでだ、ジエームス」

「なっ、あ」

愕然としているジエームスの前で一人が無線機を起動する。

「捕まえました！」

夕方。

船は港に停船している。

そこからぞろぞろと黒タイツの集団が連行されていく。
港は香港国際警察によって封鎖されている。

「ほら！キリキリあるけえ！」

武装警官によってマスカレイドドーパントになっていた者達は拘束されていた。

ふと、長男はサムズアップする。

その先には彼らへ手を振るみさえ達の姿があつた。

「しっかし、リュウタンフンは外れだったみたいだな」

空になった容器を弄びながら仁藤はため息を漏らす。

「でもさ、不老不死の秘薬なんて発見されない方がいいと思う」

「譲君の言うとおりだと思うわ」

みさえも同意する。

「もし、本当に不老不死の秘薬があつて、それを求めていたらジエームス爺さんみたいにがめつくなくなっていたかもしれないし」

そういつてみさえは地図を取り出す。

「次の財宝を見つけたわよ！」

「まーった！みさえさん！残念ながら一旦、日本へ戻らないといけな
いぜー！」

「あ、譲君」

「はい、そのそろそろ帰らないと」

譲はまだまだ中学生。

成人である仁藤はともかく彼は義務教育等もあるので日本へ戻ら

ないといけない。

「そっか、じゃあ、日本へ戻りましょう！」

みさえの操縦する飛行機は日本へ進路をとる。

そんな彼らをウエイトレスは見送った。

彼らの姿が見えなくなつてから彼女は人ごみの中を歩いていく、いつの間にかナイスバディの女性から老婆へその姿を変えて。

第十二話：予期せぬ来客

「シッー」

「ッー」

春日部探偵社の屋上。

そこで二人が拳をぶつけ合う。

一人は響、

もう一人は矢車想。

矢車はいつもの黒衣、響はジャージ姿である。

鋭い蹴りを矢車が繰り出せば、それをいなして相手の臓器を砕きかねない威力の拳を響が放ち、矢車は足でさばく。

互いに当たれば致命傷ともいえる一撃を放ちながらも下がる様子はない。

ピ。ピ。ピ！

屋上に響き渡る電子音。

簡易机に置かれているタイマーがきつちり三分を告げる。

「ここまでだ」

「はっ」

頷いた響と矢車は簡易机に置かれているカップラーメンを手に取り取る。

「師匠しようゆ」ラーメンと「弟子しお」ラーメンの蓋を開く。
ずるずると二人がラーメンをすすする音だけが屋上に響いた。

「響、お前、何かあったか？」

「……別に」

一瞬、響の脳裏をよぎったのは切り捨てた筈の存在。
自分には関係ないと決めていた顔だ。

「甘い期待はするな」

諭すように……けれど、強く矢車は言う。

「裏切られるような可能性があるとするなら関わるな。光へ手を伸ば

したら焼けただれる。それだけだ」

「わかつている」

「ならいい、お前は甘いからな」

「矢車師匠は……強いですね」

「期待しない、光を求めない、俺は地獄に行く。そう決めているからな」

——最近は、少し緩んでいるかもしれないが。

続きの言葉はラーメンを食べながら飲み込んだ。

「それにしてもお前は沢山、食べるな」

「育ち盛りなので」

“大盛”とプリントされているラーメンを食べている響に矢車は内心、驚いていた。

いつもの鍛錬を終えて響は室内へ戻り、矢車は屋上で横になる。

「ねえ、本当に行くの?」

春日部探偵社が少し離れているところで四人の女子学生がいた。

小日向未来、安藤創世、寺島詩織、板場弓美、私立リディアン音楽

院に通う四人だ。

彼女達は少し前に特異災害対策機動部二課と話をした。

その時にあることを知った未来はどうしても親友だった立花響に会いたいと望み、ようやく春日部探偵社の存在を知ったのである。

「って、春日部シティまで来たのは良いけれど、遠すぎるよお」

「春日部探偵社、ネットで調べてみましたけれど、色々活躍しているみたいですよ？少し前だと、大泥棒のカラス男を捕まえましたとか」

「すっごいねえ、リアル探偵みるのも初めてだけど！」

話し合う三人に対して未来は真剣な表情で探偵社を目指していたのだが。

「どこにあるの？」

廃れた建物ばかりで肝心の春日部探偵社が見つからない。

未来は焦ってしまふ。

「あれ、お姉さんたちなにしてるの？」

「うわっ!？」

真後ろから声をかけられて板場が悲鳴を漏らす。

後ろには野原しんのすけと愛犬シロがいた。

一人と一匹は不思議そうに四人をみている。

「あれ、キミ、この辺の子？」

「ううん、オラ、これから探偵社に行くんだ」

「アン！」

「探偵社……」

「それって!？」

「ねえ、それって春日部探偵社のこと!？」

四人の視線が集まる中、しんのすけは笑みを浮かべる。

「えへへへ、何か照れるなあ」

「「何か、変な子」」

「うふふ、可愛い子ですね」

三人は驚いた表情で寺島をみた。

しんのすけとシロを筆頭として春日部探偵社のあるビルを目指す。

「ねえ、しんちゃんは どうして探偵社へ？」

先を歩くしんのすけへ安藤が尋ねる。

いつの間にかしんのすけをしんちゃん呼びになっていた。

「オラ、探偵社で働いているの」

「「え?」「」」

四人が驚きの声を漏らす。

「え、しんちゃん、いくつ?」

「オラ、五歳」

「あははは、五歳児が働けるわけないじゃん」

アハハと笑う板場にしんのすけが黒い証明書をみせる。

「少年就職許可証?」

「あ、そういえば、春日部シティは一定の基準を超えていれば就職にできるという話を聞いた気がします」

「ウソお、そんなアニメみたいな展開い?」

驚きながら彼らはビルに到着する。

階段をあがっていくと春日部探偵社というプレートがぶら下がっているドアがあった。

「ここだぞお」

未来は意を決してドアを開ける。

しかし、ドアの向こうに誰もいない。

「あ、れ?」

「誰もいない?」

「休業中でしょうか?」

「そんなことないぞお、ねえねえ、お姉さんたちは探偵社に何の用事?」

「今更!?!」

驚く板場。

「ねえ、しんちゃん。私、響に会いたいの」

「お?響さん?」

「うん、今、ここに」

「何で、いんの?」

探偵社の入口から響が鋭い目で未来を睨んでいる。

敵を見るような目で睨まれてしまい、未来は下がってしまいそうになりながらも声をかけた。

「響、私」

「気安く話しかけるな。お前と話すようなことは何もない」
シャワーを浴びたばかりなのだろう、響は首元にタオルかけている。

ぴしやりと拒絶して部屋から出ていこうとする。

追いかける未来だが、入り口から着たジンに動きを止めてしまったことで未来、響、ジンという風にサンドイッチしてしまう。

「ぶっ！」

「あ、ご、ごめんなさいー！」

慌てて謝る未来だが、響は今にも人を殺しそうな目をしている。

「お客さんか？」

ジンは室内にいる未来や安藤たちに気付く。

「依頼人か？」

「あ、その」

「響さんへ会いに来たみたいだぞお」

「フーン」

ジンは未来をみて周りを見た。

「まあ、話くらいは聞こうか？」

そういつてソファアへ座るように促す。

響は何も言わず外へ出ていく。

四人だとびつたりになってしまいがちながらも正面にジンが腰かけた。

「響に用事だとか？」

「はい、その、響と話がしたくて」

「ふーん、話をしてどうするんだ？」

「え？」

ジンの問いかけにぽかんとした表情を浮かべる未来。

言葉の意味が理解できないという風だ。

「話をしてそれで終わり？」

「え、あの」

「親友に久しぶり〜、元気だったあ？と行って終わり、それで昔みたいな関係に戻れると本気で思っているのか？」

その目は何かを探るようなものを秘めていたが対面している未来は気づかない。

「違います！私は響ともう一度、昔みたいに仲良くしたいんです。あの時は、何も言わずに引越してしまいました！でも、響にちゃんと手紙を書いて送って——」

「返事はきたの？」

しんのすけが尋ねる。

「え？」

ぽかんとした表情で未来が声を漏らす。

「お手紙書いたんでしょ？だったら返事くるよね？」

未来は記憶をたどる。

手紙は書いた。

そして、その手紙を両親へ送ってもらう様をお願いして。

「あ」

気付いた。

気付いてしまう。

未来は直接、手紙を出していない。

全てを親に頼んで自分は何もしていなかった。

もし、親がその手紙を送らずに捨てていて「送った」と告げていたとしたら？

「ああー！」

「ヒナ？」

「あああああああああああああああああああああああー！」

頭を押さええて叫ぶ未来。

彼女が落ち着いたのはそれから数分経過してからのことだった。

「すいません」

「別にいいさ。依頼人が事務所で暴れることはよくあるし」

「大抵、響さんか矢車さんが潰すけどね〜」

俯いている未来へシロが近づいて膝の上へ飛び乗る。

「アン！」

シロは慰めるように未来の頬を舐める。

「くすぐりたい……」

「ああ、シロー！なんて羨ましいことを!? オラに代わりなさあい！」

「アホやってんじゃねえよ。シロもおいで」

しんのすけを抑え込み、シロを呼ぶところからへ戻って来る。

優しくシロの頭を撫でながらジンは真っ直ぐに未来をみた。

「それで、どうするつもりだ?」

「え?」

言葉の意味がわからずジンをみる。

「諦めて帰るか? それとも、響と話をするために頑張るのか」

「頑張ります! 響ともう一度、ううん、今度こそ向き合う、逃げるなんてしたくないですから」

真剣な未来の表情。

その目をまっすぐにみてジンは手を叩く。

「合格、じゃあ、しばらくお試し期間ってことで、うちで働け」

「え!」

「なにその、アニメみたいな展開!」

「あらあら」

誰もが驚く中で未来は頷いた。

「そっちの学業の合間で、だけどな。問題はあるか?」

「いいえ!」

「そうか、こっちでお願いはしておくから」

ジンに未来は頭を下げる。

「お願いします!」

「ねえね、未来さんは響さんとお知り合い？」

「友達、だったの」

帰り道、友達と一緒に帰る未来。

「今は違うの？」

「……友達でありたいと思っっているよ」

本音を言えば、親友だと思っていた。

けれど、それは自分だけだった。自分は響が苦しんでいる時に傍でいてあげられなかった。それどころか気持ちいを伝えたつもりになっていた卑怯者。

「だいいじょーぶ」

マイナスの思考へ沈みかけていた未来にしんのすけの声が届いた。「未来さんが頑張れば響さんもわかってくれるよ。響さんだって悪い人じゃないもん」

「そう、かな？」

「うん！オラの父ちゃんと母ちゃんもよく喧嘩するけれど、最後は仲直りしているゾ！オラも妹のひまと喧嘩するけれど、仲良しだから、未来さんも今は喧嘩していても響さんと仲直りできる！」

力強いしんのすけの言葉に未来は勇気をもらった気がした。

「そうだね、頑張るよ」

「そーそー！頑張りましたまえ！」

「うふふ、もう」

しんのすけの言葉に未来は笑みを浮かべる。

そして、心の中で決意した。

もう一度、今度は絶対に逃げずに親友と向き合おう。

「ありがとう、しんちゃん、私……頑張る」

「がんばれよ」

「何を考えている？」

探偵社の屋上へ出てきたジンへ寝ていた矢車が尋ねる。

「うん？別に……ただ、いつかは向き合うべきことをすこしだけ早めただけだ」

「アイツを光の道へ戻すのか？」

「反対か？」

矢車へジンは問いかける。

「アイツが決めたことなら俺は口を挟まない。俺は地獄に行くだけだからな」

「いつまでそうやってグレるつもりだ？」

「ずっとだ」

ジンはこの話を続けることをやめた。

彼の決意は固い。

もう一つの話もジンは切り出すことにする。

「特異災害対策機動部二課の連中の仕事を手伝うことになった」

「ほお、お前は国家とか政府が嫌いだと思っていたんだが？」

「大嫌いだ。あんなもん、潰れてしまえばいいと思うほどに」

手すりを強く握りしめているジン。

激しい怒りを込めていた彼だが、しばらくして振り返る。

「だけど、全てが憎いわけじゃない。中には俺個人をみてくれた人がいる。広木さんとかなあ」

「何があった？」

矢車はジンの様子がおかしいことに気付く。

飄々としている彼の肩が震えていた。

「死んだ……広木さんが死んだんだよお」

ぽつりと漏らした言葉に付き合いの長い矢車は察する。

「そうか、また、お前が好きな人が逝ったのか」

「ああ、だからさあ」

目元を拭いながらジンは立ち上がる。

「広木さんの弔い合戦に俺も参加する。けれど、これはあくまで俺個人の仕事だ。」

探偵社は関わらせるつもりはない

矢車は「そうか」といって目を閉じた。

「勝手にしろ。だが――」

あのお人好したちが黙っているかは知らないけどな。

矢車は起き上がる。

「俺は勝手にするぞ」

「ああ」

振り返らずに矢車は屋上から姿を消した。

第十三話：デュランダルと複数のコンボ

特異災害対策機動部二課は先の広木防衛大臣暗殺事件から数日後、様々な情報の分析の結果、本部の地下に封印されている完全聖遺物、デュランダル”が狙われていると考え、輸送を決断。

「翼が入院中という事で戦力が大幅にダウンしている中、強力な助っ人が輸送の護衛を申し出てくれた」

絶唱を放った翼は運よく一命をとりとめたが昏睡状態が続いている。

ノイズに対抗できる戦力がない今、輸送は危険ではないかという藤堯の言葉に弦十郎は助っ人の存在を告げる。

「強力な助っ人？」

首をかしげる友里あおいに頷きながら話す。

「ああ、東郷ジン、春日部探偵社の所長だ」

「……マジかよ」

ぽつりと藤堯が声を漏らす。

「よく、彼が協力をオーケーしましたね、その」

「まー、あんたらとは色々と因縁めいたものがあるけどなあ」

司令室のドアが開いてそこから東郷ジンが姿を見せる。

ボリボリと乱れた髪をいじりながら。

「しっかし、まさか女子高の地下に秘密施設があるとは思わなかったぞ?」

「ところで後ろの子達は？」

友里の言葉に面倒そうにジンは振り返る。

「ついてくるといって聞かなかった。俺一人でやるっていったんだがなあ」

「ジンのついていくところに私は行く」

「このバカと同意なのは腹立つけど、右に同じだ」

「探偵社としての仕事じゃないけれど、僕も手伝うよ」

響、雪音クリス、木場勇治の三人の言葉にジンはため息を零す。

「感謝する。だが、何が起こるかわからん、危険な任務であることは」

「おい、オツサン、アタシらをあんまりみくびるんじゃねえぞ」

「これでも僕達は色々と場数を踏んでいますから大丈夫です」

「まー、所長の立場からすると戦力として数えて問題なしとだけ」

「そうか、すまない……あと」

弦十郎の後ろから白衣にメガネ、お団子ヘアーという女性が姿を見せる。

「はーい！できる女！櫻井了子よ！ところであなた達のメデイカルチエックを……」

最後まで彼女が言葉を告げることはなかった。

響とクリスが今にも殺そうとするかのような形相で睨んでいたのである。

女の子がしてはいけない表情であると記しておく。

「代償に命を貰うかもよ？」

「そのようねー、ま、貴方みたいな素敵な男と話をできるのは最高かもねえ」

そういつて櫻井了子はジンの頬へ触れようとするがやんわりとその手を抑える。

「まー、今日は顔合わせなので、その他の細かい内容については旦那から連絡を貰うことになっているから、じゃ、これにて」

「あー、もう帰っちゃうの？」

「悪いけど、ここに良い思い出がないんで」

ひらひらと手を振りながら出ていくジン。

続いていく響とクリス。

木場は藤堯や友里へ簡単に挨拶をしてから後を追う。

「しっかし、どーするつもりだ？」

高機動エレベーター（命名、ジン）で地上へ戻ってきた彼らは探偵社へ戻ろうとしていた。

そんなジンへクリスが尋ねる。

「何を？」

「輸送任務って奴だよ。噂の歌姫様が寝ている中でやるなんざ、ノイズに襲われたどうするんだって話」

「旦那にはドライバー渡しているから対処はある程度、できるっついでいたけれど、頭だから早々、動けない、まあ、俺が頑張るつもりだった」

「ジンだけにやらせない。ノイズが出てくるなら私も——」

「響！」

聞こえてきた声に響は顔をしかめる。

マフラーで口元を隠しながら振り返った。

リディアン音楽院の制服姿の小日向未来がやってくる。

「何か用？」

淡々と彼女へ問いかけた。

「その、姿を見かけたから、どうして、いるのかなって」

「別に、仕事で来ただけ」

「仕事って危ない仕事？」

「関係ないでしょ」

「関係、あるよ……その一時的に探偵社の見習いスタッフになったから」

「あ？」

初耳だった。

響は先を歩いているジンを睨む。

「余計なことを」

「……響？」

「気安く名前を呼ぶな」

「……怒っている？」

「怒らないと思うか？お前は」

「ごめんなさい！」

続けようとした言葉の前で未来は頭を下げる。

「なに、を」

「私、手紙を響へ送ったつもりでいて、何もしてなかった！心配していたのに、駆けつけることもしなかった。後悔している。許してもらえとは思っていない。でも！」

真っ直ぐに未来へみられて響は後ろへ下がる。

その強い目の輝きに言い表せない何かが沸き上がってきた。

「今度は逃げない。ちゃんと、響と向き合うから」

「………勝手にしろ」

逃げる様に響はその場から離れる。

未来はそんな彼女の背中を見送るしかできなかった。

ジン達にはすぐに追いつく。

響は接近するとジンの横腹へ拳を繰り出す。

音を立ててめりこむ拳だが、ジンは表情を変えない。

「余計なお節介」

「そうか」

短いやり取りをして車に乗り込む。

助手席にいたクリスは何も言わず、木場も無言で車に乗り込む。

「帰るぞ」

「わかった」

頷いた響を車に乗せてジンは探偵社へ戻る。

「あれ？」

デュランダル輸送当日。

ジンは愛車のシトロエン・2CVで輸送開始地点まで向かっていたのだが。

「どうしたの？」

助手席（じゃんけんで勝ち取った）に座っている響が尋ねる。

「あそこ、国際警察が封鎖してるんだよ」

「え？国際警察も関わっているってこと？」

「まあ、いつてみるか」

ジンはアクセルを踏んで封鎖されているパネルの前で停車させる。

「申し訳ありませんが、ここから先はつて、ジン君？」

「どうも、野原係長く、お勤めご苦労様」

「ああ、どうも、じゃなくて！ここから先は！」

「ほい、許可証」

事前に風鳴弦十郎から渡されていた書類をみせる。

ひろしは書類を覗き込む。

「本当みたいだな、やれやれ」

ため息を吐きながらひろしは通行を許可する。

通ろうとしたところでジンは気になっていたことを尋ねた。

「広木防衛大臣暗殺事件の件、どうなっているんですか？あれって、国際警察の管轄になりますよね？」

「本来であれば、その予定だったんだけどね」

「何か？」

「警視庁がこの事件を引き受けているよ。なんでもどこぞの官僚から鶴の一声で決定したって署長が話していて……ヤベッ！」

青ざめるひろしだが、既に遅い。

シトロエン・2CVは走り去っていた。

「俺が漏らしたっていうなよお！」

ひろしはそう叫ぶしかなかった。

彼の声を聴きながらジンはアクセルを踏む。

「何を調べているの？」

「いんや、まだ調べていないさ」

「アタシ達に隠し事か？」

むすうと後ろからクリスが顔を出してジンを睨む。

「別に隠しているわけじゃないさ。話す必要があれば、話すよ……だから、待ってくれ」

「今日はよろしく頼む」

「ンで、護送する当人の車について」

「何よう。私の愛車にケチをつけるつもり？年季入りまくりの車に乗っている癖に」

「人の愛車にケチをつけるとは良い度胸だ。見た目は古いかもしれないが中身は新車にだってヒケを取らないぞ！その気になれば——」

目の前でヒートアップしていく二人に弦十郎はため息を零し。

響とクリスは不機嫌な目でジンを睨み、木場は来ていた緒川と打ち合わせをしている。

櫻井了子の車の後部座席にケースが積まれていた。

「あれが、デュランダルか？」

「そうだ。二課の保有する完全聖遺物。狙いがコレの可能性があるからな……」

打ち合わせによると弦十郎はヘリから指揮をとるといふ。

事態によつてはバスに変身して参加するつもりでもある様子だ。

櫻井了子の車を後ろからジンの車がついていく。

何かあれば、サポートする要因として緒川の運転する車に乗るメンバー。

「まあ、こうなるよなあ」

目の前で繰り広げられるじゃん拳。

響がグーをだせば、クリスがグーで防ぎ、

チヨキを出せば、チヨキで相殺する。

一撃でも当たれば勝者、敗者が決まり、そして、普通の人ならばらくは起き上がれないことだろう。

「これ、私の知っているじゃんけんじゃない」

「奇遇だな、俺も同じ意見だよ」

目の前で繰り広げられるじゃん拳は既に五分が経過している。

「お前ら」

時計を確認しながらジンが告げた。

「一分で終わらせる。そうしなければ、木場を連れていく」

じゃんけんの結果。

勝利したのは響だった。

「一応、仕事だからな？」

愛車の助手席で嬉しそうにしている響へ釘をさす。

「大丈夫。今度デートしてもらおうから」

「俺とお前はカップルじゃないんだがなあ」

「そう遠くないよ」

何の根拠があるのだろうか。

心の中で思っていたジンはハンドルをきる。

突然、車が大きく揺れて驚きながらも響は睨む。

「ノイズ！」

「バカ、今は飛び出すな！」

シンフォギアを纏って飛び出そうとした響を止めながらジンはアクセルを踏む。

前の車の速度が急に上がったのだ。

大きく切り離されてしまうとまずい。

運転席に隠されているレバーを引っ張る。

愛車に隠してあるニトロが起動して、速度が増す。

弾丸のように飛んでくるノイズを躲す。

「さて、もう少し頑張ってくれよ！」

悲鳴のような音を立てながら愛車の速度を上げる。

「っ！」

周囲に雷撃が降り注ぐ。

「おいおい、マジかよ」

「おやあ、奇遇ですねえ」

対向車線側からウエザードーパントがゆらりと現れる。

皮切りにドラゴンオルフェノク、メデューサ、そして魔進チエイサーまでも現れた。

「大集結かよー!」

ハンドルを操作しながらウエザードーパントの操る雷撃を躲すが。

「私もいるよお、愛しい人お」

耳元で囁くような声にジンの体が凍り付きそうになった。

バチユンと後方で嫌な音がした。

「ジン!タイヤが千切れた!」

「だろうな!ハンドルが言うことをきかない!捕まってる!」

ブレーキを踏んだことで愛車がドリフトしながら回転する。

しばらくして、白い煙を吐きながら急停車した。

「チツ!」

停車すると同時にシンフォギアを纏った響が飛び出す。

轟音を立てながら放った拳だが、集まったノイズの壁によって阻まれた。

「凄いですねえ、ノイズを一瞬ですか、でも」

ウエザードーパントが手の中の杖を振るうとノイズが現れる。

「このソロモンの杖がある限り、ノイズはいくらでも増やせるのですよお」

「どうでもいい……!」

拳を構えながら響は睨む。

「お前は叩き潰す。それだけだ」

「ちよせい！」

クリスはイチイバルをガトリングにして連射する。

メデューサは飛来する弾丸を避けながら反撃を仕掛けた。

ガトリングから弓状の武器へ切り替えて撃つ。

放たれる矢をメデューサは杖で弾き飛ばす。

「あらあら、乱暴ね」

「うるせえよ、てめえらみたいに邪魔をする奴はぶつ潰してやる！それだけだ！何より、ジンの邪魔をするなんざ許せねえ！」

「奇遇ね。私も同じことを思っているわ」

ぶわああとメデューサから膨大な魔力が噴き出す。

「フイーネの邪魔をする貴方達が目障りなのよ！」

「そうかい！」

スカートから無数のミサイルを射出しながらクリスは親指を下へ向ける。

「覚悟しやがれ！」

「へえ、中々やるねえ」

木場勇治はデルタギアで変身してドラゴンオルフェノクと戦っていた。

暴力的ともいえる攻撃をデルタは躲しつつ、反撃を試みる。

「残念〜」

ドラゴンオルフェノクはデルタの動きを先読みして拳を腕の鎧で受け流してタツクルした。

「ぐっ！」

衝撃によつてデルタは数メートルほど吹き飛ぶ。

「キミ、弱い、もっと強い子と戦いたいよお」

別の相手を探そうとするドラゴンオルフェノクの横を弾丸が通過した。

「ああ？」

苛立ちを隠さずにドラゴンオルフェノクが振り返る。

「悪いけど、キミ程度の相手なら僕で十分だ」

フォンブラスターを構えたデルタが静かに挑発した。

「ハハッ——面白いな、お前」
ドラゴンオルフェノクは挑発にのつた。

「邪魔をするな」

「そうはいかん！子供たちが戦っているのに大人である俺が何もしないということはできない！」

バースに変身した弦十郎は魔進チエイサーと戦う。

「子供？あれほどの力を持つていてか？」

チエイサーの問いかけに弦十郎はゆるぎなき覚悟で答える。

「力を持っているいないは関係ない！」

ドライバーを装着してセルメダルを弦十郎は装填する。

「子供を守るのが大人の役目だ！戦う理由はこれだけで十分だ！」

【ドリルアーム】

バースに変身してドリルアームを展開した。

「そうか、俺はロイミュードを狩る死神、そして、108がその対象な

のか見極める必要がある。それまでは破壊されるわけにいかん」
ブレイクガンナーをバースへ向ける。
大人と死神の戦いが始まった。

「愛しい人、逢いたかったよお」
「クリスの姿を模したままか」

愛車から出たジンに両手を広げてロイミュード108が出迎える。
外見は雪音クリスと同じ、違いがあるとすれば髪の毛がセミロング
になっていることとシンフォギアではなくオーブズドライバーを装着

していることだろう。

ドライバーには黄三色のメダルがはめ込まれていた。

「さっきの異常な速度はメダルの力か」

「そうだよおう、使ってみてよくわかったよ。このメダルの力はすさまじいって、あのクズが使いこなせていなかったただけでねえ」

ドライバーからメダルの一つを外しながらロイミュード108がほほ笑む。

「お前は使いこなせると?」

「勿論、あんなクズとも、そう、オリジナルとも違うもの」

狂気を孕んだ瞳でロイミュード108が真つすぐにジンをみる。

ジンは飛来したダークカブトゼクターを掴む。

「やるのお?まあ、愛しい人を壊す目的で来たんだけどさあ」

「ロイミュード108、お前はここで潰す」

「酷いなああ」

真ん中のメダルを緑にしてドライバーを傾ける。

「私の名前はイリスなんだから、ちゃんと覚えてよ」

【ライオン!カマキリ!チーター!】

ライオンを模した頭部、カマキリの刃の腕、そしてチーターの脚部。オーズの姿になると同時に高速で攻め込む。

【Henshin】

ダークカブトに変身と同時にカブトクナイガンで振るわれる刃を防ぐ。

「ぐっ!」

チーターの速度が加わったことで通常よりも威力が上がった攻撃にダークカブトは下がってしまふ。

「このコアメダルってすごいねえ!超進化していないのに、それと同等の力を引き出せるんだもん!」

【ライオン!ゴリラ!チーター!】

一旦、離れると同時にゴリラの腕力の力を得たオーズの一撃がダークカブトを狙う。

咄嗟に両腕を交差したが体は宙を離れてそのままジンの愛車へ激

突する。

衝撃で愛車のボンネットが大きく凹んだ。

「おい、人の愛車になんてことしてくれんだ」

苛立ちを隠さずにオーズへカブトクナイガン撃つ。

光弾を受けて仰け反るオーズだ。

「愛している。嬉しいなあ、でも、私の愛しているはちゃんと受け止めてくれない。悲しいよ。だから」

ドライバーから三つのメダルを外す。

そして、三枚の緑のメダルをセットした。

「見せてあげる。愛の暴力」

【クワガター！カマキリ！バッター！】

ガタキリバ、そう呼ばれるコンボへオーズは姿を変える。

前までは三色様々な色だったのに対して今回は緑一色、クワガタの頭部、カマキリの刃、バッタの脚。

全てが昆虫で統一されていた。

その姿にどうしようもない不安に包まれながらダークカブトはカブトクナイガンを構える。

攻撃を仕掛けてくるオーズを躲す。

瞬間、背後からオーズがもう一体、現れる。

「っ!?!」

驚きながらも攻撃を防ぐ。

別の角度からオーズが攻め込んでくる。

「おいおい、増殖かよ!」

「沢山だせる!といたいんだけど、今の私じゃあ、五体までが限界なんだよねえ、超進化できれば、変わるんだろうけれど!」

言葉通りに現れたオーズは五体。

そのうちの四体がドライバーからメモリを入れ替える。

【ライオン！トラ！チーター！】

【サイ！ゴリラ！ゾウ！】

【シャチ！ウナギ！タコ！】

【タカ！クジャク！コンドル！】

五体コンボ形態のオーズ。

「勘弁してくれよ」

心からの本音をダークカブトは漏らす。

「ジン!!」

「余所見は禁物ですよ!」

ダークカブトが五体のオーズと戦っていることに気付いた響は向かおうとしたがウエザードーパントの風の刃に阻まれる。

「お前と遊んでいる暇はない!」

足場のコンクリートをえぐり取って、掴んで投げ飛ばす。

ウエザードーパントは躲しながら水の塊を放つ。

躲して移動しながら空きの胴体へ全力の拳を叩き込む。

人なら十回ほどバラバラになっていたであろう一撃を受けたことで流石にダメージを折ったのだろう、膝を折る。

そのまま相手の首をねじ切ってやろうと考えた時。

「よろしいのかなあ?余所見していて」

響は振り返る。

ウエザードーパントの呼び出したノイズが櫻井了子の乗る車を襲撃していた。

後部が挟まれて宙を舞うケースが目に入る。

奪われてはまずい。

ウエザードーパントを蹴り飛ばして全力で走る。

ノイズ達がケースへ手を伸ばす。

ロックが外れて中から一振りの剣が現れた。

響はノイズを蹴散らしてその剣を掴む。

瞬間、世界が黒一色に染まった。

「なんだと!?!」

膨大なエネルギーが衝撃波となって周囲に広がる。

衝撃は周囲のノイズ全てを蹴散らし、戦っていたドラゴンオルフェノク、魔進チエイサー、メデューサ、オーズ、クリス、デルタ、バーズ、そしてダークカブトが動きを止めた。

「響……」

ダークカブトは膨大な力というべきエネルギーを身に纏う響の姿をみる。

全身が漆黒に染まり、赤い瞳は全ての敵を恨むかのように敵意で満ち溢れていた。

あれは危険だ。

「だけど、放っておけないよな……キャスト・オフ！」

「キャスト・オフ！」

「チェンジ・ビートル！」

アーマーをパージしてライダーフォームへ切り替える。

「あー！」

「お前の相手をしていられるかー！」

目の前のオーズを踏み台にして宙へ跳びあがる。

そのままの勢いを利用しながら弾丸のように急降下していく。

響がデュランダルを振り下ろす。

「ライダーキック」

タキオン粒子をエネルギーに変換して必殺のキックとデュランダルの一撃が派手にぶつかり合う。

「ああ、くそっ！」

バチバチと装甲が悲鳴を上げていた。

ヒビロノカネですらデュランダルの攻撃を受け続ければ長くは保てないだろう。

「だからってー！」

さらにライダーキックのエネルギーを集めた。

「ここで押し負けられるかよおおー！」

続けて放った二撃目のライダーキック。

それがデュランダルのエネルギーを弱らせた。

衝撃でダークカブトが吹き飛ぶ。
近くの地面に巨大なクレーターを作った。
続けて、周囲へ広がる衝撃波。
それはすべての戦いを中断させた。

「私、何を」

朦朧とする意識の中で響は自分がデュランダルを握り締めていることに気付いた。

体が鉛のように重たい。

手の中にあつたデュランダルを落として倒れそうになった時。
正面から温かい何かに包まれる。

「あ」

ボスツと抱き留められた響はぼんやりとした意識の中で相手を見る。

それは自分の大好きな人、東郷ジンの姿。

「ジン……」

「その様子だと大丈夫みたいだな、少し休め」

「うん……」

頷いた響はそのまま意識を失う。

「いやあ、やりますねえ」

気絶した響を抱き留めていたジンの前にウエザードーパントが現れる。

メモリを排出して井坂深九郎に戻っていた。

「まさか完全聖遺物の力を使って無事とはあ、是非とも解剖を——」

井坂が続けて言葉を告げることにはなかった。

響を抱きしめているジンの目。

その目をみて、井坂は言葉を失う。

「ハハッ」

井坂は笑う。

ドーパントとしての力を手にして様々な人体実験、非人道的なことを重ねてきた井坂すら震えあがってしまう彼の目。

「興味はまだ尽きませんが、今は撤退するとしましょう。またお会いしましょう」

笑みを浮かべながら井坂は姿を消す。

彼の撤退を皮切りにドラゴンオルフェノク、メデューサ、魔進チエイサーの姿もなくなっていた。

「ジン！」

「東郷君！」

クリスが響を抱き留めているジンに近づいた。

響を抱き留めているジンの体の至る所から血が出ていたがすぐに

傷が塞がる。

「ジン、大丈夫か？」

「俺は、まあ、大丈夫だよ」

ジンは肩をすくめながら抱きかかえている響をみる。

「……木場、響を頼む」

「あ、うん」

木場へ響を預けてジンは落ちているデュランダルを拾い上げる。

「グツ」

拾い上げた途端、胸元に走る痛みで顔を歪めながら転がっているケースへ乱暴にデュランダルをしまい込む。

「ジン！大丈夫か!？」

「旦那、俺達はまあ、大丈夫。ただ、愛車とかがなあ」

「すまん。請求はこちらへ回してくれ」

「懐の大きい旦那に感謝だよ。それと」

デュランダルのケースを差し出す。

「輸送はしない方がいいかもしれない。持ち出すことがばれてる」

「……そうだな」

頷いた彼へケースを渡してジンは木場達のところへ向かう。

「帰ろう」

「うん」

「ああ」

木場から響を預かってジンは歩き出す。

「東郷君……その」

「木場、敵は俺達を脅威と判断した」

「それは……」

「奴らが攻め込んでくるってことかよ」

後ろにいたクリスが尋ねる。

「そういうこともありうるだろうな。しばらく探偵社は休みにするから、その間に整理を」

「必要はないよ」

木場は首を振る。

「僕は覚悟を決めている。探偵社はどんな仕事も完遂して、全員が生き残る。そういう決まりだろう」

「木場のいうとおりだ！ジン、アタシ達はちゃんと覚悟しているからな！そこで寝ているバカもな」

「……弱気になつていたのは俺だけか」

ため息を吐きながらジンは顔を上げる。

「じゃあ、覚悟を決めろよ。これから本格的に俺達、探偵社はフィーネとのその配下の連中を叩き潰す！」

ジンの宣言に木場とクリスは頷いた。

フィーネと奴が奴の計画全てを叩き潰す。

第十四話：迷える子羊と最強のさすらい

「生きることを諦めるな！」

——ああ、これは夢だ。

あの日、ライブで破片が突き刺さって血まみれになっていた自分へ訴えてきた声。

その声で生きることが諦めなかった響は生き残ることができた。

いや、生き残ってしまったのだ。

あの後に起こった地獄は今でも鮮明に思い出せる。

同じ学校の人気者が死んで「貴方なんかはどうして生き残っているの!？」と訴えられて。

机の上に置かれた花のない花瓶。

家に嫌がらせの電話や張り紙、ペンキで「人殺し」と書かれていた。耐えられずにお父さんは出ていった。

何もかも嫌になって家を出て野垂れ死ぬつもりでいた。なのに。

「楽な道を選ぶな、ムカツク」

ああ、

ああ！

彼の声だ！

彼だけが自分を救い上げてくれた。

彼と一緒にいる。

何があっても彼から離れない。

永遠に彼と居続ける！

邪魔するものは！

「……ジン？」

響がうつすらと目を開けると自分の手を握り締められている彼がいた。

温もりが冷たい自分のどす黒いモノを溶かしてくれる。

いてくれるだけで温かい。

失っていたと思っていた嬉しいという気持ちが沸き上がる。

同時に、あの子の存在が過ぎった。

もしかしたらという気持ちはある。でも。

「起きたのか」

握り締めていた手を彼が離そうとしてしがみついた。

「どうした？」

「一人にしないで」

「……そんな泣きそうな顔するな」

握り返したジンは少し悩むような表情をして。

「お前が幸せになるまではいてやるよ」

「うん……一緒」

満足したように響は眠りについた。

「つくづく、最低だな。俺も」

漏らした声は響に届かなかった。

同時刻。

「春日部も久しぶりだ」

空港から一人の男が出てくる。

黒いテンガロンハット、赤いジャケットに白いベスト、ズボンというスタイルは多くの視線を集めていた。

何より、白ギターを背負っていることからくすりと若者たちは笑みを漏らしてしまう。

周りの視線など気にしない、むしろ集まっていることが当然のように笑みを浮かべながら男は空港を出る。

「さて、アイツはどうしているかな？」

誰かのことを思い出しながら彼は歩き出す。

そんな彼を尾行する二人組がいる。

サングラスで隠している顔で互いに頷きながら尾行を開始した。

「そんなことが……」

「まー、疲労でぐっすり寝ているみたいだけどな」

春日部探偵社のオフィス。

そこでパスタをズルズルと食べている雪音クリスと小日向未来が話をしていた。

話の内容は少し前に起こったデュランダル輸送事件のこと。

今日から本格的に小日向未来は探偵社の一員として色々な仕事を手伝うことになるのだが、響がいないことに疑問を覚えた未来はクリスへ尋ねて、事情を知ったのである。

「響は大丈夫なんですか？」

「力使いすぎて寝ているよ。クソツ、ジンが傍で看病していることが羨ましい」

「東郷ジンさんが？」

驚いた表情で未来が尋ねてきた。

「あー、まあな、あのバカとジンの付き合いは長いからな……まあ、アタシよりも短いが、時々、羨ましくなる」

「……」

ガチャリとドアが開かれる。

「目え覚ましたみたいだな」

「響ー！」

室内にやって着たのは響。

彼女は未来の姿をみて、一瞬、眉間へ皺を寄せながらも無視してソファーに腰かける。

「あの、響、私、今日からここで手伝いをするの！えっと、よろしくね」
目線も反応もしないまま響は机に置かれている漫画雑誌へ手を伸ばす。

視線すら向けられないことに傷つきながらも未来は隣へ座ろうとした。

「ここが春日部探偵社だな」

ガチャリとドアが開いた。

「あ、はい！」

慌てて未来は入り口へ向かう。

向かって動きを止める。

そこにいたのは強面の男性。

黄色い上着とズボン、日焼けした肌。

目つきがとても鋭く恐ろしい人物。

彼を見て、未来は怯えてしまった。

「あのお」

「ひっ！」

小さな悲鳴を漏らした未来にイライラしながら響が振り返る。

「組長、何してんの？」

「僕は園長です！お願いだから、組長つていわないで」

響の言葉で地面に崩れ落ちる園長。

「え、あの……」

強面の人が本気で泣き出したことで未来はおずおずと声をかける。

「探偵社へ、依頼、でしょうか？」

「はい」

泣きながら頷く強面の男性。

未来は驚きながらもソファアームへ誘導して、ジンを呼ばないといけな
いことに気付いた。

「うーっす、いやあ、帝国軍が今日も勝利したことで気分が良いわあ

……って、園長、何でいるの？」

「東郷くうん！たすけてくださあい！」

「ええ〜？」

抱き着いてきた園長にジンは戸惑いの声を漏らした。

ふたば幼稚園の園長、高倉は泣きながら事情を話す。

何でも幼稚園の土地を狙って黄泉組などという怪しい団体が連日連夜、嫌がらせをしてきているという。

最初は高倉の怖い顔に怯えていたが、彼が見た目に反して気弱な性格だと知ると様々な嫌がらせをしている。

ネコバスのタイヤをパンクさせたり、幼稚園児のいるクラスの教室にゴミを投げ飛ばしたり。

「あの、それ……警察には」

「相談しようと思いました。けれど、逆に仲間と疑われて」

「そんな強面じゃ、しゃーねーなあ」

「それに、最近発生している怪盗騒動で……手を回す余裕はないと」
「職務怠慢」

「そんな」

ぼつりと響の言葉が室内に響いた。

未来が息をのむ。

市民を守ってくれるはずの警察官が別の事件が忙しいからと高倉の訴えに動いてくれない。

「それで、園長は探偵社にどんな依頼を」

「はい——その」

依頼の内容にジンは頷いた。

「わかりました。その依頼、引き受けます」

——ありがとうございます。

高倉は頭を下げる。

ふたば幼稚園。

春日部シティに住まう子達が通う幼稚園。

規模はそこまで大きくないが、個性豊かな園児が入園している。

勿論、野原しんのすけもふたば幼稚園に通っていた。

そんな幼稚園へ黄泉組という連中が嫌がらせをしている。

「つていうことなんだが？」

「ほーほー、はじめて知りましたなあ」

「そんなわけないだろ！」

しんのすけの言葉に風間トオルが叫ぶ。

「毎日やってきて、ネネ、こわーい」

「ぼ、僕も…」

「……警察がくるとすぐに逃げる」

しんのすけと一緒に遊ぶネネやマサオ、ボーちゃんの面子からジンは話を聞いていた。

「ジンさん、オラも」

「今回はいい」

手伝いを申し出たしんのすけにジンは止める。

「え？でも」

「今回は少しばかり嫌な予感がする。俺達とお前達が知り合いという事もあまり知られない方がいいと思う。大丈夫だ。この幼稚園は俺達が必ず守る。気にするなというのは無理だろうけれど、普通の生活を送ってくれ」

「……うーん、ジンさん、必ず守ってくれる？」

「男に二言はない。必ずだ」

「じゃー、指切り」

しんのすけと指切りを交わす。

「男と男の約束だね！」

「おう！」

「こんなに離れていいんですか？」

代車を幼稚園から少し離れた場所に停車させて、ジンは監視していた。

未来が疑問をぶつけるとクリスがタブレットをみせる。

受け取ったタブレットの画面をみると幼稚園の入口から通路という通路が表示されていた。

「高倉園長の許可をもらって監視カメラを設置させた。俺達が堂々と監視しているとより姑息な手段に出られる可能性がある」

「……すごい」

「ま、今は様子を伺うってところだ」

コンビニで買い物をしてきた袋を全員へ差し出す。

「つて、牛乳とクリームパン!？」

「いや、ジャムパン、アンパン、各種様々だ」

「こういう時つて、アンパンじゃないんだ」

「そりゃ、刑事ドラマの見過ぎだろ」

クリスの言葉にジンは頷いた。

「どーやらお客さんがきたようだ」

ジンの視線は幼稚園児へやって来る柄の悪い集団をみていた。

彼らはゴミなどを幼稚園へ投げ飛ばす。

中には門をがしやがしやと蹴り飛ばして威嚇している。

「どーも、漫画でみたような手段ばかりだなあ」

「潰す?」

「そんな!」

「まー、まずはお話からいきますか」

響の物騒な提案に未来はぎよつとしながらジンは車から出ていく。

少ししてクリスと響が後を追う。

「え、あ、ちよつと待って!」

慌てて未来も車を出ていく。

「おーい、チミタチ、チミタチ」

「「ああ?」」

ジンが声をかけるとガラの悪い連中が一齐に振り返る。

はつきりいつて顔が世紀末伝説で登場するような顔ばかり。

未来はびくびくしていた。

響はちらりと一瞥して彼らを視線に入れないように動く。

「なんだあ、てめえら!」

「いやさあ、散歩をしていたら幼稚園の前で気色悪い男達が騒いでいるからさ。純真無垢な園児によくない影響を与えかねないと思って」「そーだ!そーだ!」

「お前は静かにしている!？」

外野のしんのすけが叫び、タオルが悲鳴を上げる。

ジンは交渉する気など全くなかった。

男達の額に青筋が浮かんでいる。

ガソリンにマッチ棒を放り投げている状況だ。

未来が青ざめている中、クリスと響は普通にしていた。

「お前、殺されたいらしいなあ!？」

「おい、みろよ!後ろの子、レベル高くね!？」

「兄ちゃん、その女たちを置いていったらいのちはぶげらあ!？」

「気色悪い、死ね」

「響!？」

男の顔面にめり込むようにキックを響が繰り出す。

「よっちゃんが!？」

「このあまあ!？」

「汚い目でアタシらをみるんじゃねえよ!？」

続けてクリスのビンタが仲間の一人を張り倒す。

「おお!母ちゃん直伝のビンタ!？」

「しんちゃん、黙っていた方がいいよ……」

「さて、アンタ一人なわけだけど」

「ぐぐぐ、せ、先生!先生!出番ですよ!？」

叫びと共に何かが通過した。

通過したソレを響はキャッチする。

「つつ、鉄球?」

一瞬、顔を歪めながら掴んだのは鉄球。

掴むのが遅ければ未来をかすめていたかもしれないなかった。

「ほお、俺の剛速球を掴むとはなかなかすげえな、お嬢ちゃん」

三人が振り返ると野球帽をかぶった金髪の青年、そして黒服たちがいた。

「まーた、来たぞ」

「何かいるね」

「鉄球を投げたのはアイツだろうな」

「俺は剛腕のマリオ！黄泉組に雇われている用心棒だ。痛い目をみたくなければ手を引くことをお勧めするぜ？」

手の中の鉄球をくるくると回しながらマリオは告げる。

「そーだ！そーだ！」

「お前はどつちの味方だ！」

あまりにうるさくて我慢できなくなったジンはしんのすけへ叫ぶ。園長がしんのすけを抱えてダッシュで幼稚園の教室へ入る。

「えっと、これって、警察とか」

「てめえをぶっ潰す！簡単だ」

「ええ!？」

あたふたする未来を余所に、クリスが拳を鳴らしてマリオはにやりと笑いながら鉄球を構えた直後。

どこからかギターの音色が響いてくる。

「何だ」

流れてくるのは「二人の地平線」という曲。

「今の……」

流れてきた曲にジンは目を見開く。

音の方をみる。

ふらふらとギター奏でながら一人の男がやって来る。

テンガロンハットで目元を隠し、ギターを奏でていた。

「何だ、てめえは！」

「投球の達人、マリオ。ただし！その腕前は日本じゃあ二番目だ」

「ああ？ならば、日本一は誰だ!？」

男はキザな口笛、続けて舌打ち、深くかぶっていた帽子の鍔を押し上げるとともに――。

「オレさ」

自身を指さして笑みを浮かべる。

「何をうー俺の剛腕をみるがいい！」

挑発に乗った男は自慢の投球で鉄球を投げる。

鉄球はあつという間に通過してジンの代車に激突した。

「……あ」

鉄球は代車のボンネットにめり込んでしまう。

「どうだ！俺以上の速度で投げられるか？」

男は鉄球を受け取ると。

「フーン！」

鉄球はスピンしながらマリオがぶつけたボンネットを壊して停車していた後ろの電柱まで貫通する。

「ば、バカな!？」

「代車あああああああああ!？」

自分よりもさらに遠くへ投げられたことにマリオは恐怖を現して足早に逃げる。

男達はそんなマリオを追いかけていく。

「……張り合いのない奴だ」

しくしくと崩れたジンに未来がおずおずと背中をさする。

あわれ過ぎる。

男が肩をすくめる中、ジンはすぐに復活した。

「日本一のアンタとまともにやりあえる方が少ないと思うけれど」
肩をすくめた男にジンは声をかける。

「ジン、知り合いなの？」

響はジンの態度から面識があるのだと察した。

「……相変わらず女の子を侍らしているんだな。バカ弟子」

「俺にそんな趣味はありませんよ、師匠」

「師匠!？」

「ダンディーなお師匠さんだ」

驚く二人と未来はぼーっとした声で漏らす。

色々あって既にお腹一杯だった。

——早川健。

彼は東郷ジンに探偵のいろはを教え込んだ人物。

日本で暗躍していた悪の組織ダツカーを叩き潰したと言われる私立探偵である。

「ジンの師匠って、マジかよ」

「ウソついてどうするんだよ。俺に色々教え込んで春日部探偵社を紹介してくれた人だよ……師匠はどうして日本へ？」

「所用でやってきたんだ。そのついでに青二才だった弟子の様子でも見に来ようかと思ってな」

テンガロンハットを机に置いてジンをまつすぐに見る。

鋭い視線に向けられていないというのに響やクリスは息をのむ。

「どういう事態だ？」

「この幼稚園が恐喝を受けているらしくて、引き受けた」

「ほう。警察には？」

「相談しましたが、その……最近、多発している怪盗事件で暇はないと」

「治安を守るはずの警察がその役目を放棄か、俺の知り合いが聞いたらゲンコツだけでは済まないだろうな」

「師匠の知り合いって、警視庁の偉い人じゃないですか」

悪の組織ダツカーを潰した功績でかなり出世したと聞いている。

「よし、ジン、俺も手伝おう」

「え？」

「乗り掛かった舟だ、それに弟子のお前と仕事をしたいしな」

「よろしくお願いします」

早川に言われてジンは頷いた。

「わかった」

その時、幼稚園のドアが開かれる。

「すいません、国際警察ですって、あれ？」

やってきたのは野原ひろし係長と泊進ノ介だった。

「野原係長に刑事のしんちゃん」

「春日部探偵社の人達!？」

「黄泉組？」

幼稚園の外に出てジンと早川、そして野原ひろしと進ノ介は話をしていた。

「そう、最近、この地域で勢力を拡大させている極道なんだけど」

「国際警察が出張しているという事はそれだけじゃないんだろ？」

ひろしの言葉に早川が尋ねる。

「はい、その、噂ではシエードという犯罪組織が母体だとか」

「海外で活動している組織か、国際警察が動くわけだ」

「なあ、ジン」

「なんだ？しんちゃん」

「このテングロンハットの人、誰？」

「早川健、俺の師匠」

「ええ!？」

驚く進ノ介。

ひろしは早川健という存在を知っているのか丁寧な対応をしている。

早川の話聞きながらジンは携帯端末を操作していた。

「あれ、ジンは何を？」

「知り合いの人に黄泉組の情報を求めている」

ジンが連絡した相手はOREジャーナルの城戸真司。

十分経たずに情報が届く。

ひろし達からの情報も整理して動き出すかと考えた時。

周囲からマスカレイドドーパントが現れた。

「な、なんだ!?!お前達は!？」

驚くひろしに対して進ノ介、ジン、早川は身構える。

マスカレイドドーパント達は一斉に襲い掛かった。

「子供の扱い、慣れてる」

幼稚園児と仲よくしている未来をみて、響はぼつりと漏らす。

「そう、かな？」

「うんうん、よくやっていると思うぞ！」

「お前が言うなよ！」

しんのすけが響を見上げる。

「なに？」

「うーんうん！響さん少し表情がいつもより柔らかいゾ」

「……そう？」

「その方が綺麗だぞ！」

「五歳児が生意気」

額を小突いていると未来が声をかける。

「響は、小さい子、苦手?」

「まず人全般が苦手」

「……そっか」

それからしばらくして「ごめんね」と未来が切り出す。

「なに?」

「私がちゃんとしていれば、響は苦しむことがなかったのかもしれないと思うと、悔しくて、辛くて……あの時、親に反抗してでも」

「過去のことをいつまでもいわれても鬱陶しいだけ」

ぴしやりと響は拒絶する。

「でも」

「前を向け」

尚も告げようとした未来の言葉を響は遮る。

「ジンに言われた。うじうじしていた私に前を向いて歩けて……過ぎ去ったことはどうしようもない、出来ることをやれって」

パチンと響は拳をぶつける。

「今の私にできることは壊すこと、邪魔をする奴、悪い奴、全てをぶつ壊す。そのための力が私にはある」

「響……」

立ち上がった響はクリスと目が合う。

「私が外に行くから中はよろしく」

「わかった。何かあれば援護しに行くからな」

「要らない」

「ハッ! くたばったらバカみたいに笑ってやる」

「うるさい」

短いやり取りをして響は外へ出ていく。

未来が追いかけてやろうとしたけれど、クリスが腕を掴む。

「お前は子供たちをみてやれ」

「え、でも」

「あのバカやアタシは戦える力がある。だけど、怯えているそいつらをお前が守ってやれ。あの園長の言葉、忘れたわけじゃないだろ?」

——連中から幼稚園児を守ってください!

土下座をしてまで高倉がジン、否、春日部探偵社に依頼した内容。それは黄泉組を潰すことでも幼稚園を連中から守ることもない。幼稚園児を守ること。

「出来ることをやる。それがアタシ達の仕事だ」
「……仕事」

未来が視線を向けると何かが起こると感じ取ったのか怯えている幼稚園児たちの姿がある。

彼らの姿を見た未来は笑みを浮かべた。

「何か歌でも歌おうつか」

「ぶりぶりざえもん愛の歌！」

「それはてめえが考えた歌だろうが！」

余計な水を差したしんのすけにクリスのぐりぐり攻撃がさく裂した。

「響君！」

外に出ているこうとする響へ高倉が声をかける。

「組長は幼稚園の敷地内から誰も出ないようにして」

「これ以上は、ダメだよ！キミみたいな女の子に大人の僕達が……」

「大丈夫」

鉄棒を構えて震えている高倉に響は首を振る。

「へいきへつちやら、あんな奴らすぐに追い払うから。だから、先生たちといつも通りにしてあげて。それが依頼でもあるし」

「……本当に、申し訳ない。僕達が」

「そんなことないよ」

響はマフラー越しに小さな笑みを浮かべながら幼稚園の敷地の外へ出る。

大人は嫌いだ。

けれど、彼らは、温かい人達はまだ、大好きでいられる。

だから――。

「おー、本当に女の子だあ」

幼稚園の外には複数の男達が立っていた。

年齢は響より少し上くらいだろう。

皆、若い。

「かあ、いいねえ！こんな子をぶつ潰せるわけだ！」

「ええ、勿体ねえよ！その前に少しくらい味見！いいでしょ？」

「バーカ、舐められたんだぞ？さっさと潰せ！」

男達は懐からガイアメモリを取り出す。

「アイスイイジ！」

「アーム！」

「コックローチ！」

メモリを挿入して男達はドーパントへ姿を変える。

「壊す、ね」

ニタアと響は笑みを浮かべた。

「お前ら程度に私を壊せると思うな」

【Balwissyall Nescell gungnir t r
on】

語りながらシンフォギアを纏う。

口元をマフラーで隠しながら響は拳を握り締めた。

「お前らは根こそぎぶっ壊してやる」

「くそっ、引き剥がされたか」

マスカレイドドーパント達を撃退したジンは急いで幼稚園へ向かう。

響達が心配だった。

「ジン」

呼ばれて振り返ると早川が真剣な目でジンをみている。

「何ですか!?!急がないと」

「お前にとってあの子達はなんだ?」

早川の問いかけにジンは息を止めた。

「ただの足かせか?それとも、共に歩む者達か?」

「……」

「答えろ」

「最初は自分の償いのようなものだと考えていました。あの時、俺がちゃんとやれていればという後悔から……でも」

拳を握り締める。

「今は共に戦う仲間でありたい、そう俺は思っています」

「合格だ」

テンガロンハットをかぶりなおして早川は笑みを浮かべる。

「お前が昔のままの自己犠牲バカなら容赦なく殴るところだったが、成長しているようで安心したぞ」

「師匠のおかげですよ。貴方が俺に変わる切欠をくれた」

「あの子達を信じろ」

「……わかりました」

頷いたジンは早川へ告げる。

「行きましょう、黄泉組の奴らのところへ」

「ああ」

幼稚園を響達に任せてジンと早川は黄泉組へ向かった。

全ての根源を終わらせるために。

「こりやあ……」

その後、匿名の電話を受けた野原ひろしと泊進ノ介、詩島霧子は黄泉組の本部へ来ていた。

黄泉組が何かの襲撃を受けたという事でやってきたのである。すると本部の組員たちすべてがボコボコにされて縛られていた。警戒しつつ、彼らが奥に向かうと。

「この者、幼稚園を不当に奪おうとする犯人！」と記したカードが組長の傍に置かれている。

「ズバット……」

そのカードを手にとったひろしがぼつりと漏らす。

「係長、いま、なんて？」

「昔、悪の組織ダツカーを潰した者がいたんだよ。快傑ズバット、その正体は誰も知らないけれど、悪を許さず、弱き者達を救うって……警察としては要注意人物としてマークされていたけれど、ダツカー消滅と同時に姿を消したって」

「再び姿を見せたっていう事か？」

「とにかく、彼らを逮捕しよう。これだけの証拠があるんだ」
机の上に置かれている無数のガイアメモリや違法の金など。

国際警察が動くには十分だった。

「ねえ、響」

「なに？」

帰り道。

代車をレツカー移動したために歩いていてる未来は響へ問いかける。
最初は無視されてばかりだったが少しばかりの会話なら許してくれるようになった。

少しばかり心を開いてくれたという証拠だろうか？

「探偵社っていつもこんなことばかりしているの？」

「地味な仕事もある。今回は少し派手かな」

首を傾げながら答える響に未来は「へー」と声を漏らす。

「ああ、海外で無数の小さな怪物を叩き潰した時はすぐにお風呂入ってたかったなあ、あの緑のベトベトは気持ち悪かったし……ジーン、このまま健康ランド行こうよお」

「待つてー！さらりと非現実的なことをいつているよ!？」

「おい！なにジンに抱き着いているんだ!？」

未来の声を遮るように響がクリスとジンのところへ向かう。

ジンを間に挟みながら喧嘩する二人の姿に未来は毒気を抜かれたような表情になった。

「色々、大変そうだけど、頑張ろう!？」

決意した未来は二人をジンから引きはがそうとした。

その結果、巻き込まれてジンに抱き着いて、顔を真っ赤にしてしまう未来がいたとか？

「頑張れよ、ジン」

そんな彼らの姿を見ながら早川はギターを奏でながら去っていく。

第十五話：病院と語り

「何でこうなるんだか」

「東郷さんが逃げるからです、響の手錠はやりすぎだけど」

「ジンが逃げるから」

病院に東郷ジン、響、小日向未来の三人が来ていた。

歩くジンの腕には手錠がつけられて反対側は響につけられている。行くことを嫌がったジンを無理やり連れていくための措置である。後悔はしていない。好きな人とこうしていられるのだから。

むふー！満足したように息を吐く響の姿を見る未来。

親友が変わっていて悲しい。

ため息を零す。

彼女も大分、探偵社に染まってきていた。

「けれど、風鳴翼さん、この病院に入院していたんだ……身近にいたんだね」

「二課の協力体制を敷いているからというのもあるが、ここには天才がいるからな」

「久しいな、私立探偵」

話をしていたジンの前に白衣を纏った男がやって来る。

「どうも天才外科医」

鏡飛彩。

この病院の院長の息子であり、天才外科医。

病巣において切れないものはないというほどの天才外科医であり、多くの人が彼の腕を求めてやってくる。

仕事の関係で鏡飛彩と行動をすることがあって、面識があるのだ。

「今日は何の用だ……変なことをするならすぐに出て行ってもらおうぞ」

「俺が病院嫌いなもの知っているだろ……逃げられないように手錠をさされている。それだけだ」

「ならば、良い」

「良いんだ!?!」

「院内では静かに」

「あ、ごめんなさい」

注意されて未来は謝罪する。

「まともな子がいたんだな」

響が無言で飛彩を睨む。

睨まれているというのに彼は平然としていた。

「呼ばれたんだよ。ここで入院している歌姫様からな」

「何だど？」

目を見開いて飛彩は彼がみせた手紙を覗き込む。

「であれば仕方ないな。こちらだ」

「いや、場所くらいは」

「関係者以外は立ち入り禁止になっている。入るためにはドクターが持つIDカードが必要だ」

「うわ、ハイテク」

「それだけの措置が必要な場合があるということだ」

綺麗な通路を四人は歩く。

「彼女さんは元気なのか？」

そういえば、とジンは気になっていたことを聞いた。

「私立探偵、お前には関係ない」

「つれないねえ、愛想つかされないので不思議だわ」

二人のやり取りに首を傾げた未来。

「無愛想だけど、手術の腕だけは最高の医者は学生のころから付き合っている彼女さんがいるんだよ。不器用すぎるから破局の危機もあったんだけどなあ、あの様子だと今もアツアツのようだ」

首を傾げている未来へジンは説明する。

「わあー」

未来は目を輝かせる。

思春期の女子高校生。

彼氏彼女という関係に憧れは多少なりとある。

それも天才外科医で不器用な男の恋愛話、漫画やドラマみたいになりそうな展開かもしれないと期待していた。

恋愛漫画を読むほどに小日向未来はそういうことが好きな女の子である。

「この先にいるから、勝手に行け」

IDカードで開いた通路の中に無理やり三人を通すとそのまま去っていく。

「照れてやんの」

「全然、わからなかったなあ」

「今回は同意する」

未来の漏らした言葉に珍しく響は同意した。
通路を歩きながら目的地のドアをノックする。

「……反応、ないな」

「寝ているとか？」

「風鳴さーん？」

「あ、そんな開けるなんて」

未来が止める前にジンは病室のドアを開けてしまう。
中を覗き込んだジンは固まった。

「ジン？」

「東郷さん、どうしたんですか？」

二人も続けて左右から覗き込む。

言葉を失う。

室内はこれでもかというほどにあれていた。

雑誌や衣類はベッドの周りに散らばっているばかりか、空のペットボトル数本も散らばっている。

ベッドの上には下着と思えるものが複数――。

「ジンはみないで」

響は咄嗟にジンの目を両手で隠す。

最後まで確認する前に目を隠されてしまう。

「これって、事件か何か？」

「面倒だから何もみなかったことにして帰ろう」

「それは流石に駄目だよ！」

「会いに来ただけ、別に仕事をしに来たわけじゃない。用事が済んだ

ら帰る。それでいい」

「でも、翼さんだよ？あの有名なトップアーティストに何かあったのに放っておくなんて」

「何でもかんでも人助けすればいいってわけじゃない」

ジンを挟んで意見を言い合う響と未来。

「お前ら、とにかく一旦、落ち着け、あとドアを閉めるから手をどけろ」

ドアを閉めて響の手をどけたジン。

「何をしているの？」

そのタイミングで松葉杖をついた風鳴翼がやってくる。

「この部屋」

響は室内を指さす。

中を覗き込んだ翼はバツが悪そうに目を逸らした。

「あー」

「え？誘拐とかじゃない？」

戸惑う未来にジンは呆れながら短く告げる。

「風鳴翼は片付け出来ない女だよ」

「——ああ」

ポンと納得した未来の姿に翼は顔を真っ赤にした。

数分後。

病室の外でジンが待機していた。

「一人で任せて大丈夫なのか？」

「はい！これくらいは大丈夫です」

話がしたいという事で響と翼は外に出ていた。

残されたジンと未来が室内の乱れた掃除をすることになったのだが「男の人にやらせるわけにはいきません！」と立ち入りを禁止されてジンは廊下にいる。

「おーい、小日向」

「何ですか？」

「探偵社の活動、慣れたか」

ジンの質問に未来は作業の手を止める。

「とても大変です。この前の下着泥棒退治も……でも、これは人のためなんです」

「どうだろうな？人のためなのか、自己満足に浸りたいだけかもしれないが」

「響と昔みたいに親しくは……できないんでしょうか？」

問われた言葉にジンは少し考える。

「小日向は今の響が嫌いか？」

「嫌い、ではないです……戸惑っているんだと思うんです。昔は誰にでも優しく明るい子だったから」

「アイツの本質は多分、変わってねえよ」

「え？」

「ま、まだまだ修行が足りないな」

「どういう意味ですか？それ」

苦笑しながら未来は片付けを終えて病室のドアを開ける。

中を覗き込んだジンは感嘆の声をあげた。

「おお、すごいな、小日向は」

「誰だつてできますよ……あの、東郷さん？」

「うん？」

「私、響と昔みたいにな、ううん。もっと仲良くなりたいです」

未来の言葉にジンは頷きながら彼女の頭を撫でる。

「ま、頑張れ」

「子ども扱いしないでください！」

頬を膨らませながら怒る未来だが、その後は小さな笑顔を浮かべていた。

「貴方に聞きたいことがあるの」

「なに？」

病院の屋上。

松葉杖をついて移動した翼は響へ質問する。

「貴方は何の為に戦っているの？」

「それを聞いてどうする？ 否定するのか？」

「いいえ、知りたいの、貴方がどうして戦うのか、その理由を」
真つ直ぐに響をみる翼の目。

その目から逸らすようにしながら静かに響は話す。

「ノイズが憎い、壊すために戦っていた」

「今は、違うの？」

響の言葉に疑問があつて翼は尋ねる。

「今もノイズは憎い。でも、それと同じくらい、ジンや探偵社の皆を守るために戦いたいと思いはじめている」

少しして響は自虐な笑みを浮かべる。

「変な感じだ。なんでアンタに話しているのか」

「私も貴方に謝罪するわ。私は貴方に奏を重ねてしまっていた。奏の使っていたギアを纏っているのだから、同じようにしなければおかしいという勝手な価値観の押し付け」

翼は頭を下げる。

「申し訳なかった。私の価値観を押し付けてしまった」

「別に、気にしていないから」

口元を隠しながら響はそっぽを向く。

「改めて頼みがある」

「なに？一緒に戦えとかでもいうの？」

「違う。その、東郷殿について教えてほしいんだ」

「は？」

翼の告げた言葉を理解するのに響は一瞬、理解が遅れた。

「おーい、小日向が室内の片づけを終わらせて——」

振り返ると同時にジンの腹部へ全力の拳を放つ。

「おま、いきなり、何だ」

顔をしかめながらジンは襲撃した響を睨む。

響は眉間へ皺をよせながらジンへ警告を飛ばす。

「また墮としたら殺す」

「何の話だ!？」

殺意を向けられたことでジンは戸惑う。

響は舌打ちしながら院内へ戻った。

「何なんだよ」

「東郷殿！」

悪態をつきながら戻ろうとしたジンへ翼が声をかける。

「お願いがあります」

「翼さん、思った程、重傷じゃなくてよかったあ」

「そーだね（運ばれた時はかなりヤバイ状態だったらしいけれど、黙っておこう）」

「あんな奴、もっと入院していればいい」

病院を後にした三人はぶらぶらと帰路を歩んでいる。

未来が良かったという中で響は不機嫌だった。

その理由は翼が東郷ジンへ告げた言葉。

「弟子入り、認めるの？」

「自分からスキヤンダルに飛び込むわけないだろ」

呆れながらジンは言う。

風鳴翼は唐突に「貴方の弟子にしてほしい！私は貴方のような強い存在になりたい！」と顔を近づけてきた時は本当に焦った。

ジンはその時のことを思い出してげんなりした表情を浮かべる。

「ジン、何をしたの？」

「覚えがない。今回は本当に覚えがないんだよ。何をもって弟子と言いだしたのか。緒川あたりに尋ねたらわかるだろうか」

「墓穴掘るだけじゃない」

響に言われてジンは顔をしかめた。

自覚はないものの、ありえるかもしれない話だったので顔をしかめるしかない。

帰り道を歩きながらジンは夕焼け空を見上げる。

小日向未来をリディアン音楽院へ送り届けて二人はぶらぶらと道を歩いていく。

「響はどうだった？」

帰り道、ジンは響へ問いかける。

「対峙した時、恨みとかそういうものを吐き出すかと思っていたけれど……そんなことは全くなかった」

尋ねてくることを予期していたのか、響は迷わずに告げる。

自らの気持ち、そして。

「ジン、私は変わって」

そこから先の言葉を響は飲み込んだ。

告げることで実現になることを躊躇う。

一番、離れてほしくない相手が遠ざかってしまうのではないか？

そんな疑問が響の中で生まれた。

「何でもない……」

「そんな急ぎ足になる必要はねえよ」

響の思いに気付いているのか、偶然か、ジンはポンと彼女の頭を撫でる。

「お前はお前のペースで変わるなら変わっていけばいい」

「……ジンは、傍にいてくれる？私から、離れない？」

——変わるといふ事は、もしかしたら私の前からいなくなってしまうことかもしれない。

不安を正直に吐き出せるのはそれほどまでにジンへ依存していることの証か信頼していることなのかはわからない。

「少なくとも、お前が独り立ちするまではいてやるよ」

「そこは愛を誓って永遠にいと」と

「子供が背伸びするな」

「酷い」

「お前よりは年上だからな。見守るくらいで十分だろ」

「ケチ」

フードで顔を隠した響だが、伸ばした手はジンの手を掴んで離さなかつた。

「やっぱり連中は邪魔ね」

薄暗い室内でフィーネは思案する。

あの男を始末する前に聞き出していた情報を基にして対策は万全。護衛のための駒も多めに用意してある。

唯一、危惧すべき存在は――。

「やはり、春日部探偵社は邪魔ね」

「マスター？」

ぽつりと漏らした言葉に待機しているイリスが顔を上げる。

スリープモードにしていた彼女は不思議そうにフィーネをみた。

「何でもないわ。あら？」

「なあに？」

「随分と嬉しそうな笑みを浮かべているわね」

フィーネに指摘されてぺたぺたと自分の顔を触るイリス。

「夢をみたんだ」

「夢？」

「うん、愛しい人と二人つきり、誰もいない邪魔をする者がいない場所で永遠に、仲睦まじく過ごす夢え」

幸せそうな表情を浮かべるイリス。

まさに恋する乙女だ。

だが、それはあくまでコピーした姿に過ぎない。

その正体はある科学者が作り上げた108体の機械生命体の一つ。

拉致した雪音クリスの姿を真似てはいる。

だが、その精神はフィーネによりつつあった。

愛しい人のため。

「（私と似ているけれど、かなり歪んだ存在……東郷ジンという男は哀れとしか言えないわねえ）」

コピーした雪音クリスが彼へ好意をもっていたことが原因かもしれない。だが、ここまで歪んだのは自分がプログラムを弄ったことが原因。

「そういえば、イリスは他の仲間の下へ戻らないのかしら？」

「あー、他の仲間のところ？興味ないかなあ。今は愛しい人のことだけ一杯だから」

イリスの他にも107体の同胞が存在している。

彼らは個々に行動をしているらしいが、今は徐々にトップの下へ集っているらしい。

「そう」

「あ、気になっていたんだけど、あの魔進チエイサーだっけ？あれって、ロイミュードなの？」

「システムとしては同じものよ。でも、『グローバルフリーズ』でロイミュード002に破壊されたものを001にお願いして譲り受けてもらったのよ」

「マスターって、私の同胞とも面識があるんだよねえ？」

「ええ、001に特別な地位を与えてあげたの。その代わりに私の邪魔をしないことを条件としてね」

「ふーん、あの001が了承するなんてすごいねえ」

「蛮野よりマシらしいわ」

「そうなんだあ」

話をしながらフィーネは操作する。

端末の画面に東郷ジンが映された。

「あー！愛しい人だあ！」

横からイリスはジンの写真へ手を伸ばす。

「（東郷ジン、春日部探偵社の所長……イリスの好意をよせている相手。何かしら？彼を見ているといつも何かを感じる）」

実際に対面した時に調べてみたが『何か』に阻害された。

詳しく調べることはできなかったために正体は掴めなかったことが心残り。

しかし、計画は止めるわけにいかない。

フィーネは最終段階へ準備を始める。

カ・デインギル。

全てを終わらせる日は近い。

第十六話：動き出すフイーネ

「ええー！これって、翼さんのライブのチケット!?」

春日部探偵社へやってきた未来は机の上に置かれている複数のチケットを見て驚きの声を上げる。

風鳴翼が退院して一回目のライブ。

彼女の復帰を望んでいたファン達によってチケットは初日で完売。

未だにネットで出回っていないか多くの者が探している中でチケットが無造作に机へ置かれていることに未来は驚きを隠せない。

「お？これってそんなに有名なの？」

「知らない。緒川が置いていったからな」

しんのすけがチケットを覗き込む横でジンはバリバリとチョコビを食べていた。

「いや、ジンさん、知らないんですか!？」

「あまり歌とかに興味がない」

「オラ、きやりーぱみゅぱみゅがいいなあ!」

「お前……前はおひなだっただろ!？」

「男はかわるものだゾ!」

「納得だ」

イエーイ!とハイタッチするジンとしんのすけの姿に未来はため息を零す。

ちらりと離れたところで丸まっている響をみる。

「なに？」

「あ、ううん。何でもない」

響にライブの話をするのはよくない。

嘗て自分がいけなかったことで起こってしまった悲劇。

あの話と結びつくライブの話をするのはよくないだろうと考えていたのだが。

「別に昔のことだから」

「え？」

「あの時、ライブに行くことを決めたのは私。別にお前が悪いとか、そ

んなことじゃないから」

雑誌で顔を隠す響。

今までは無視だったのに、話しかけてくれたことに未来はとても喜ぶ。

「でも、実際にこのチケット、どうするの?」

「売るか?」

木場の疑問にクリスが転売を提案する。

「それは駄目! やっちゃいけないことだから! ここに書いてあるし」

「うわっ、マジかよ」

チケットの項目を見てクリスは「うへえー」と声を漏らす。

「しっかり人数分だもんな。行かなければただの紙切れだが」

「でも、でも、来なかったら刀を持ってお姉さんがくるかもしれないゾ?」

「ありえるな」

しんのすけの言葉にジンは辟易とした声を漏らす。

緒川を通して弟子入りを断ったところ、自分の実力を証明すると刀を持って探偵社を襲撃してきた事件は記憶に新しい。

思考が妙に時代劇っぽい歌姫のことだ、来なければ何が起こるかわからない。

ハラキリなんてこともありえると考えて、ジンはため息を零す。

「俺、女運そのものがないのかもな」

「まーまー、それがジンさんですから」

「どういう意味だ!? お、No21じゃねえーか」

「あー! オラも欲しい!」

アクション仮面カードの取り合いが起こる中、未来は尋ねる。

「人数分っていつても、一人、最近、来ていませんけれど」

「矢車師匠は気まぐれ……行くなら代わりの奴、連れて行かないと」

「代わりねえ……仕方ない」

騒ぐしんのすけへカードを渡しながらジンは端末を操作した。

呼び出す相手は城戸真司。

『いくー!』

メールを送って数秒足らずで城戸真司は参加を決意した。
即決されたことに響は顔をしかめる。

「そんで、ライブチケットと一緒に俺を呼びだして何の用だ？」

東郷ジンは呼び出されて廃墟へ向かう。

そこには緒川慎二、そして風鳴弦十郎の姿がある。

「実は我々も呼び出されたんだ」

「あ？お前らも？」

二人の態度からしてウソではないらしい。

「誰が呼び出した」

「ボクだよお」

聞こえた声に三人は身構える。

目の前に現れたのはイリス。

クナイを構える緒川、ドライバーを取り出すジンと弦十郎だが、イリスはにこにこして敵意を現していない。

「今日は敵対しにきたわけじゃないよお」

「だったら、なぜ呼びだした？」

「今のままじゃマスターの勝利はゆるぎないからさあ、もつと人間側にも頑張ってもらわないとねえということとで情報を持ってきたんだあ」

「あ？」

「情報ですか？」

「まずは話を聞こう。それからでも遅くはない」

弦十郎の言葉にジンは渋々、ドライバーを仕舞う。

にこりとイリスは笑った。

「カ・デインギル」

「何だ、そりゃ」

「マスターの計画の要、発動して成功しちゃったらそつちのマケだよお」

「カ・デインギル？」

「大砲のようなものとイメージすればいいんじゃないかな？でっかい塔から放つとっていたし」

「塔……か」

「お前、何を考えている？」

情報を告げるイリスにジンは問いかける。

その目は懐疑の感情が込められていた。

はつきりって信用していない。

クリスと同じ姿だが、中身は悪の感情で一杯のロイミュード。

素直に情報を伝えるとは思えない。

「まー、有体にいえば、愛しい人にもつと頑張ってもらいたいんだよ。だって、どうしようもないくらい頑張つて、頑張つて頑張つて頑張るぬいた末に敗北してしまう。そんな絶望的な姿を見たら興奮しちゃうよお！」

顔を歪め、狂気を孕んだ瞳に緒川は後ろへ下がってしまう。

「あ、どうだせだから、もう一つ。愛しい人も知っているあの発掘現場で起こった事件？あれもマスター、フィーネが関わっていたみたいだよ」

言っってはならない禁句を告げた。

「っ！」

「ジン！落ち着け！」

緒川は息をのみ、弦十郎が横からジンを抑え込む。

——無。

イリスをみている東郷ジンの顔から全ての感情といえるものが消え失せていた。

何もない。

敵意も憎悪も何もかもが消え失せてしまっている顔にイリスは啞う。

「そっだよお！もつとみて！貴方のそんな顔がもつとみたいの！待っているからね？頑張つてねえ、愛しい人お」

イリスは笑いながら姿を消す。

「旦那、大丈夫だ」

しばらくしてジンを弦十郎は離す。

「カ・デインギルはこちらで調べる。お前は」

「悪いけれど、俺も調べ物ができた。そっちは任せる」

「……彼は大丈夫でしょうか？」

ジンが離れた後に緒川は尋ねる。

「わからん、だが、フィーネという存在があこの事件の黒幕だとするなら……フィーネは鬼を相手にするということを知るだろう」

——東郷ジンが本気で怒った場合、敵は徹底的に叩き潰す。

それが、東郷ジンという存在だということを風鳴弦十郎は知っている。

野原家。

ローン三十二年の一軒家だが、家族愛やら嵐を呼ぶ幼稚園児などが帰るための場所。

そこに東郷ジンは来ていた。

キッチンで料理を手伝う響はみさえと話をしていた。

クリスは戸惑いながらひまわりの面倒をみている。

しんのすけはアクション仮面を城戸真司と笑いながら見合っていた。

「いや、何でお前がいるの?」

「今月、厳しくてさあ……みさえさんには次の給料で支払うからって」

「はあ……俺が支払ってやるからお前は貯蓄しろ」

呆れながらジンは懐から封筒を取り出す。

「みさえさん!」

「あら、ジン君 おかえりなさい」

「ただいま戻りました。これ、真司の分です」

「あら、いいの?」

「ええ、親友が金欠で職員の子の親に支払う姿をみるというのは

ちよつと」

親友の哀れな姿というものをみたくないという本音だろう。

封筒を渡してジンはリビングの机の前に腰かける。

アクション仮面をみて笑いあうしんのすけと真司の二人を見ていと先ほどまでの悩みがあほらしく思えた。

夕食が用意できて、全員が食卓を囲む。

「焼肉だゾ！」

「おお！贅沢う！」

「ジン君が奮発してくれたからね！」

「たああい！」

嬉しそうにする野原家。

「あ！俺の肉！」

「早い者勝ち」

「しようもないやりとりすんなよってえ！アタシの肉だぞ!?しんのすけえー！」

「オラが狙っていた肉だゾ！」

城戸真司と響が肉を取り合う。

クリスが呆れながらしんのすけの箸とばちばちぶつけあっていた。

「お行儀が悪い！クリスちゃんも！良い年なんだからもう少しマナーを守りなさい」

「……はい」

「ほい」

みさえの睨みにクリスとしんのすけは争いをやめる。

ひろしが笑いながらビールを飲む。

野原家、否、この中で一番、怒らせたら怖いのはみさえだろう。

「ジン、さ、何かあった？」

騒がしい焼肉も終わり、夜空を縁側でジンは眺めていた。

縁側で缶ビールを開けて飲んでいたジンへ隣にいた真司が尋ねる。

「いきなりだな」

「いや、大体さ。何か大事な手前があると、こうして家族団らん！みたいなことをしているからさ」

「そんなことは……ないって、ウソはつけないだろうな」

城戸真司はバカだが、何もかもバカではない。

人が思い悩んでいれば傍にいて支えようとする。

親切すぎるバカだ。

ジンは傍でしんのすけと枝豆を食べているひろしをみる。

「ひろしさんはさ、どうして刑事なんかやっているの？」

「唐突だな。確かに俺は冴えないし刑事なんて向かないかもしれないけれどさ」

「(そこまですってない！)」

心の中でジンと真司は同時に思った。

「切欠は上京してすぐにある刑事さんに助けてもらったことかな」
「へえ」

「知らなかったなあ、どんな話!？」

興味津々という風に真司は尋ねる。

ひろしは思い出すようにしながら話す。

「上京してすぐに窃盗騒ぎがあつてね、偶々、俺が見学に来ていたビルで起こつた……警察がきて調査をしている時に」

警察が荷物検査をしていた時にひろしの鞆から盗まれた宝石が見つかった。

必死に否定するひろしだったが、現場の制服警官達は犯人と決めつけて逮捕するために手錠をかけようとする。

その時に待つたをかけてくれた刑事がいた。

彼はひろしの話を真剣に聞いて、状況を分析して罪をなすりつけようとした犯人を見事、逮捕する。

その時の刑事と話を聞いていて、上京して現実を知り始めていたというのに子供みたいにひろしは熱を抱く。

刑事になりたいと。

「それから頑張つて、頑張つて、今は国際警察の係長として頑張つているわけだ」

「あれえ、オラは出てこないの?！」

「大人の話に水を差すな!」

「ケチ」

騒ぐしんのすけに枝豆を与えながらジンはビールを一口。

「最初は憧れだったけれどさ、今は違うんだ」

「え?」

ジンは顔を上げる。

「今は警察官として家族を守るため、若者が犯罪者にならないように頑張る……まあ、うちの部署は不思議部署扱いだけどねえ」

ビールを飲みながらひろしは困つたように言う。

「家族を守るかあ……ひろしさんは怖いと思わないの?守ることに」
「俺にとって家族は宝だよ」

ひろしの言葉に迷いの類はない。

心の底から思っている。

その姿にジンはとても羨ましいと思う。

「俺は怖いですよ」

酒が入っているからか、ジンは普段から心の中で思っていたことを吐く。

「アイツから探偵社を引き継いで、皆と出会って、今は和気藹々として
いるけれど、ふと、思ってしまったんです。また、俺の前からいなくなっ
てしまふんじゃないか？俺の手から零れ落ちてしまふかもしれない」

「ジン……お前」

「ジン君」

ひろしが不安を零したジンの肩を叩く。

伸ばした手は真司を巻き込みながらジンを抱きしめる。

「ここはキミの帰る場所だよ」

「……それは」

「不安になったり、悲しくなればいつでも帰って来ると良い。俺だけ
じゃない。しんのすけやひまわり、みさえもいる。それにみんなで和
気藹々と楽しくすれば、不安は大きくなるかもしれない。けれど、そ
れよりもたくさんの幸せを感じれば良いと俺は思う」

「たくさんの幸せ……」

「そうだって！何に悩んでいるのか知らないけど！ジンは悩み過ぎな
んだって」

バシンと真司が叩く。

「まあ、そうなのかもな」

その後、ひろしや真司、しんのすけ、後に風呂からあがってきたみ
さえとひまわり、響やクリスと騒がしくなっていく。

いつの間にか、ジンの中にあつた不安は消えていた。

「師匠！会いに来てくれたのですね!？」

「……誰が師匠だ。お前を弟子にした覚えはない」

「そうですか、でしたらこれにサインを」

「あ?？」

渡された書類を覗き込むジン。

迷わずに破り捨てた。

「何を!？」

「アホか！弟子にすれば私の体を好きにしていいいなんて阿呆なことを書くな!」

「当然ではないですか！弟子は師匠の言いなりになる!」

「お前の常識を押し付けるな!」

「むむむ」

小さく唸る風鳴翼にジンは呆れる。

今日は用事があつて二課の本部へ来ていたのだ。

「お前、ライブの準備とかあるだろう」

「防人はライブも日々の鍛錬も欠かしません！」

「病み上がりだろう、無理はするな」

退院したとはいえ医者からは激しい運動は控えるようにという話を緒川から聞いていた。

「心配してくれるのですね！」

目をキラキラさせる翼にジンはため息しか零さない。

「師匠！私と手合わせしてください」

「忙しい」

一蹴して待ち合わせしている弦十郎のところへ向かおうとしたが。

「あーらー！いけないわよ。女の子を乱暴に相手しちゃ」

道を遮るように櫻井了子が現れる。

「うへえ」

「何よ、その嫌そうな顔」

「胸に手を当ててよおく考えろや」

「あーら、私の胸を見たいの？」

「誰もそんなこといってねえだろ!?!頭スイーツか！」

ゴチン。

了子から振り下ろされたゲンコツでジンは地面にたたきつけられる。

「私年上、貴方年下、言いたいことわかるかしら？」

「はい、お姉さま」

「よろしい、さ、あそこの休憩スペースに行くわよ」

どこの世も弱肉強食はあり、弱者は強者に勝てぬのである。

「面倒なことになったなあ」

二課のエレベーターを使ってリディアン音楽院のある地上へ戻ってきたジンだが、困ったと同じ言葉を繰り返している。

「東郷さん？」

帰ろうとしたところで学生鞆をもっている未来の姿があった。

「小日向か」

「どうしたんです？あ、もしかして」

「まあ、旦那に用事があったんだが……丁度いい」

「はい？」

首をかしげる小日向にジンはある提案を持ち掛ける。

「助けてくれ」

「というわけで、俺は明日一日お休みなので何があっても連絡するな、てか、頼むからしないでくれ」というメッセージを送ってジンは小日向と向き合う。

「ええ!? 大丈夫なんですか」

「大丈夫なわけがないから困っているんだよ」

明日、一日翼とデートせよ。

そんなお願い（拒否権なし）を受けたジンはデートの内容について小日向と話をしていた。

「翼さんが異性と遊んだことなんて」

「旦那に聞いたんだが、生まれてからずっと鍛錬やらシンフォギアの訓練でまともに遊んだことがないとさ」

「それで、デートってハードルが高いかと」

未来の指摘にジンは頷いた。

「だよなあ、無難に遊ぶでいいかと思うんだが、女子高生って何して遊ぶんだ?」

「……カラオケとかゲームセンターではないでしょうか?」

顎に指をあてて考える未来。

「まあ、それでデートとしての話を」

「デート?」

その声はとても低い。

ジンでも、ましてや未来でもない。

固まったジンはおそるおそる隣をみる。
ファミレスの窓。
そこに絶対零度の視線で覗き込んでいる響の顔があった。
ジンは悲鳴をあげる。

——響へ説明中

「デート、じゃ、ないの？」

「そうだ、だから、その拳を下ろせ」

瞳から光を失った状態で拳を構える響に未来が事情を説明したことでジんにぴったりと寄り添った状態で尋ねる。

未来は親友の変わりように少し戸惑いながらも話を進めることにした。

「あの、提案なんですけど」

デート当日。

「ジンとデート」

「遊ぶだけだ」

私服でジンと響は待ち合わせ場所に来ていた。

あれから未来の提案で翼を交えた四人で遊ぶことになる。

「この情報、真司が知ったら騒ぐだろうな」

「バカも一応、記者だからね」

その真司はクリスに連れられて買い物へ行っている。

貴重な荷物持ちとして利用されていた。

「響！東郷さん！」

二人でわいわいと話をしていると私服姿の未来がやって来る。

「よお、小日向、似合っているな」

「そうですか？ありがとうございます！響」

「なに？」

「似合う、かな？」

「聞かないで」

「あ、ごめん」

「……私、服とかわかんなくなっているから」

付け足した響の言葉に未来は笑みを浮かべる。

「大丈夫！私がしつかり今日は教えるから！」

自信満々に答える未来の姿に響はうげーとしていたが気付かない。

「む、すまない。私が最後だったか」

サングラスや帽子で変装した風鳴翼がやって来る。

「師匠！今日はよろしくお願いします！」

「そんな固くなるなよ。遊ぶだけだし……あと、俺は師匠じゃない」

「しかし」

「思考が固い、防人のことは今だけ忘れろ。普通の、どこにでもいる女

子高生風鳴翼としての日常を今日は満喫しろ」

「は、はい」

「えつと、前にちゃんと挨拶をしていなかったですけど、私は小日向未

来です。よろしくお願いしますね？」

「ああ、小日向、私のことは翼と呼んでくれて構わない」

「はい、翼さん！」

にこりとほほ笑みながら翼と未来は楽しそうにやり取りを始める。

「ジンとのデート」

「違うだろ、しがみつくなあ」

響を押し戻しながらジンは歩き始める。

「あ、響！ジンさん！待って！」

慌てて追いかける未来と翼達。

騒がしくもこうして四人による遊びがはじまった。

「(しかし、華の十代の中に二十歳過ぎの男が混じっているって、犯罪臭がしないか心配だ)」

実際に周囲から視線が集まっていた。

風鳴翼がいることがバレたというよりもジンがいることで嫉妬などの視線が集まっているようにみえる。

実際のところ、ジンの予想は当たっていた。

フードで素顔を隠している響、サングラスと帽子で変装している翼、そして私服姿の小日向、彼女達の性格はともかく美少女ばかりだ。その中にコートの男がいれば妬みなどの視線が向けられるのは仕方ないだろう。

「(俺、要らなかつたんじゃないかなあ)」

「東郷さん、自分が要らないなんて考えていませんよね?」

「小日向はエスパークか!?!」

「こんな視線ばかりくれば嫌でもわかりますよ」

「あははは」

「忘れないでくださいね。これは翼さんのデートをあくまでみんなで遊ぶということで緩和しているんです。東郷さんが帰ると余計にこじれますから」

「心得ています。この視線に耐えればいいんだろ？わかっているって」

「無理はしないでくださいね。これからカラオケですから」
「わかったよ」

三人の少女を先頭にしながらジンはカラオケに入る。

支払いはジんがこっそりと済ませておいた。

「響、カラオケは大丈夫？」

「まあね。仕事の時間潰しでやっていたから」

「あー、そうだったな」

カラオケボックスでだべっているのもそうだけど、試しに歌うとかやっていたなあとジんは遠い目をする。

よくよく考えれば密室空間で男女がいて、片や肉食に狙われていたことを考えるとよく無事だったものだ。

「しかし、本物の歌姫がいて、カラオケというのもレアだなあ」

ぽつりと漏らしながらもカラオケがスタートする。

先発はまさかの小日向。

話題のドラマ主題歌を選んだ。

続いて響。

彼女はまさかのアクション仮面の歌。

しんのすけとみていた番組の影響だろう。

続けての風鳴翼がまさかの演歌。

歌姫が演歌で力拳を作って歌うという姿はとても貴重だった。

最後に東郷ジン。

彼が選んだのはまさかのラブソング。

久しぶりだったことでもかなり熱を入れてしまい、響以外の女性を呆然とさせてしまう。

その後、響と一緒に野原夫妻が世界を救うために歌ったデュエット。

あの騒動のことを少しだけ思い出しつつもジんと響は抜群のコンビネーションを發揮した。

昼食を楽しんで景色が一望できる場所に四人は来ている。

「知らなかった。今まで戦いばかりに身を投じてきたから」

「勿体ないですよ」

「小日向？」

「翼さんの後ろにはこんなにくさくさの人や街があるってことを知らないのはもったいないです。何も知らずに守っているなんて」

「そうだな、今日一日、小日向や師匠、そして立花も……すまない」
「いえ」

「別に、私は何もしてないし」

「師匠呼びはやめろ」

「やめません！」

「即答かよ!?!」

翼はクスリと笑う。

ジンも毒気を抜かれたように息を吐く。

こうして騒がしくも絆が深まった休日は終わりを告げる。

数日後、風鳴翼のライブが始まった。

ライブ会場にジンは響、クリス、城戸真司、小日向のメンバーを連

れてきている。

そのまま会場内に入ろうとしたのだが。

「先に行つてくれるか」

「え、おう！」

「あれ、東郷さんはどこに」

「お手洗い」

短く告げてからジンは席を離れる。

その姿を響はじいーつと見つめていた。

「あら、こちらの視線に気づいたのね」

会場から少し離れた通路。

人気がない場所に東郷ジンは来ていた。

彼の視線の先、金髪にダツフルコートを纏い、大きな帽子で素顔を隠している女性がいる。

「アンタがフィーネか」

「こうして直接相まみえるのは初めてだな。東郷ジン。その通り、私がフィーネだ」

「素顔を見せないのか、みせられないのか？」

「どう捉えても構わない。しかし、貴方も呑気なものね。世界の終わりが近づいているのにこうしてライブを聞きに来るなんて」

「世界の終わりなんていつどこで起こってもおかしくはない話だ。偶然と小さな奇跡が成り立って防がれているに過ぎない」

「奇跡など潰すことは容易い。しかし、その奇跡を呼び寄せる要因は根絶やしにすべきだと思うわ」

フィーネから殺意が放たれる。

普通の人間なら失神してしまうほど濃厚な殺意だが、ジンは平然としていた。

「だから？」

「東郷ジン、貴様を此処で潰す」

フィーネの後ろから男性が現れる。

「やつほー、また会えたねえ」

シャツを着崩した少年。

年齢は響達より少し下か同い年くらいだろう。

しかし、こちらをみているその目はおそろしいほど何も映していない。

冷たい瞳。

「楽しもうよ。キミを潰せることがとても楽しみなんだあ」

少年の顔に黒い筋が入り、ドラゴンオルフェノクに姿を変える。

「お前、オルフェノクか」

「そのとおり、さあ、遊ぼうよお」

ジンはため息を吐きながら隠し持っていたデルタギアを取り出す。

「貴方はその子と遊んでいなさい。それじゃあね」

ひらひらと手を振ってファイネは立ち去る。

その様子から自分をここで釘付けにすることが目的だろう。

「ファイネ、貴様の目的は何だ？」

去ろうとしている彼女へジンは問いかける。

「月を落とす」

驚くことにファイネが答える。

「なっ」

「オイ、僕のことを無視するんじゃないよ」

振るわれるドラゴンオルフェノクの攻撃を躲しながらデルタに変身して拳を振るう。

「お前に構っている暇は、ない！」

押し戻しながら近距離でフォンブラスターを放つ。

攻撃を受けたドラゴンオルフェノクは後ろへ仰け反る。

「やるねえ」

「遊んでいる暇はないと言った」

フォンブラスターにミッシュンメモリーを装填してドラゴンオルフェノクへ撃つ。

ターゲットマーカーがドラゴンオルフェノクの動きを封じ込める。

「吹き飛ば」

必殺のルシファーズハンマーがドラゴンオルフェノクを貫くという瞬間、相手は自らの鎧をパージして高速で移動してデルタの背後に

回り込む。

高速で繰り出されたタツクルを受けて壁に激突。

その際にベルトが外れて変身が解除されてしまう。

地面に倒れたジンへドラゴンオルフェノクはくるくると手を動かしながら近付いてくる。

「仕方、ないか」

ジンが覚悟を決めた時、横からタキオン粒子のエネルギーを纏った拳がドラゴンオルフェノクの脇腹を貫いた。

「グフツ！」

「お前、ジンを傷つけたな？許さない、許さないからな！」

パンチホッパーに変身している響はぞつとするほどの低い声でドラゴンオルフェノクの頭部を掴むとさらに一撃を叩き込む。

強固な肉体を持つドラゴンオルフェノクだが、今はほとんどの鎧を解除した状態になっている。連続してパンチホッパーの拳を受けてしまえばダメージは溜まっていく。

最後の一発を受けて、大きく吹き飛ぶドラゴンオルフェノク。

「ジン、大丈夫?!」

パンチホッパーに声をかけられてジンは起き上がる。

「ああ、俺は大丈夫だ」

「いつてえな、お前なんかはこのまま潰されてたまるか」

ふらふらと起き上がりながらドラゴンオルフェノクは自らの鎧をまとう。

先ほどまでのふざけた態度から一変して、冷酷な声で二人へ殺意を向ける。

「悪いけれど、お前はここで潰す」

デルタギアを装着して変身。

ミツシヨンメモリーを装填してフォンブラスターを構える。

パンチホッパーも体勢を落とす。

ドラゴンオルフェノクが迫って来る。

フォンブラスターから放たれたターゲットマーカ―が動きを封じ込め、ルシファーズハンマーが繰り出された。

その攻撃を両手で防ぐドラゴンオルフェノク。
だが。

【ライダーパンチ】

「今度こそ、潰す！」

パンチホツパーの必殺技がドラゴンオルフェノクの体を貫く。

続けてフォンブラスターの光弾がドラゴンオルフェノクの体に穴をあける。

「ままだよ、僕はまだ、遊び足りないんだ」

ふらふらと体から青い炎を吹き出しながらドラゴンオルフェノクが近づいてくる。

身構えるデルタとパンチホツパー。

ドラゴンオルフェノクが奇声を上げながら二人へ近づこうとして灰になった。

「二人、潰したね」

「ああ、一人、殺した」

淡々と言いながらデルタギアを外す。

光と共に変身が解除される。

遠く離れた会場から聞こえる歓声。

風鳴翼のライブは大成功のようだ。

「響、ライブ後の打ち上げはなしだ」

「どこへいくの？」

「どうやらフィーネの奴が何かを始めるらしい。それを潰す」

「いいね、私も行く」

頷いた響にジンは少し考える。

その時、端末が鳴り出す。

響が取り出すと画面には小日向未来と記されていた。

「なに？今、忙しい——」

『響！大変なの！リディアンが！リディアンが！』

電話の向こうから悲鳴に近い未来の訴え。

ジンは舌打ちをした。

「向こうに先手を取られたか、さて、答えが早く来ることを願おうか」

端末を操作しながらジンは駐車場へ向かう。

第十七話：今回の黒幕

「ライブ終了してから同じクラスの友達から電話が来たの」

ライブが終わった風鳴翼と緒川を引き連れてジンは愛車でリディアン音楽院へ向かう。

未来は体を震わせながら話す。

電話の内容は学院をノイズが襲撃しているという事。

生徒達も避難をしているがノイズの他に白い怪物や蛇の怪物などの姿もあつたという。

「あのドラゴンは囷か……大きな囷だ」

あれだけの強敵を囷として使うフィーネの大胆さか、それ以上にウエザーや他の相手が強いのかわからないが油断はできない。

「あ？国際警察の車がきたぞ」

後部座席にいるクリスが外をみる。

視線を隣へ向けるとトライドロンが近づいてきた。

「ジン！ベルトさんから話を聞いた！俺もリディアンへ向かう！」

助手席の窓を開けて進ノ介が叫ぶ。

「な、なあ、ジン、何が起ころうとしているんだよ」

後ろにいる真司が戸惑いながら尋ねる。

——流れに任せて連れてきてしまった。

本来なら置いていきたかったのだが、ジンの真剣さに気付いた彼がついていくと聞いて聞かなかつた。

「良くないこと、かな」

城戸真司の疑問に自信なくジンは答える。

嫌な予感が彼らの胸中を突き抜けていく。

既にジンからの連絡で木場もオルフェノクになってリディアン音楽院へ向かっている。

「久しぶりに嫌な予感がここまで広がるなんて……」

ハンドルを強く握りしめてリディアン音楽院へ愛車を走らせた。

「酷い……」

リディアン音楽院は悲惨な光景になっていた。

ノイズによって綺麗だった建物のほとんどが倒壊している。

周囲には人だっただらしきものの灰。

「これ、マジかよ」

信じられないという風に真司は周りを見る。

「一人で飛び出すな！何かあるかわからねえだろ」

未来は今すぐ飛び出そうとしたがクリスに止められた。

「そのとおりね、独りは危ないわよ」

灰が周囲に広がる中で一人佇む者がいる。

「遅かったわね」

「櫻井女史！貴方が、貴方が黒幕だったのか!？」

信じられないという風に翼は叫び、緒川はいつでも撃てるように懐の拳銃へ手を伸ばしていた。

「正確に言えば、櫻井了子の魂に寄生した古き時代の巫女フィーネ、それが黒幕だろう?」

ジンの言葉に全員の視線が集まる。

「おや、気付いていたのか」

普段の彼女を知る者からすれば聞いたことのない低い声。

櫻井了子はメガネを投げ捨てて、まとめていた髪を解く。

「しかし、疑問だな。先ほどのやり取りでは確信している様子はなかったと思うが?東郷ジン」

「敵を欺くには何とやらという諺があるけれど、別に敵へ悟らせない

のは当然だろう？ 不要なカードは切らない主義なんだよ。俺は」
肩をすくめながらフィーネを睨む。

「櫻井女史！ 貴方は何の為に、こんなことを！」

「私には私の目的がある」

「呪詛を壊して、奴に会うため、だろう？」

ジンの言葉に櫻井了子、否、フィーネは目を見開く。

「驚いたな。なぜ、わかった？ 流石の慧眼といたいほどだが、不気味過ぎる」

「言っただろ？ 不要なカードは切らないって」

「仕方ない。貴様を無力化して話を聞くとしよう。カ・ディングルの起動まで時間がかかるからな」

指を鳴らすとフィーネの傍に井坂深紅郎、メデューサ、そしてチエイスが現れる。

「お前は、死神！ なんで」

「貴様に話す言葉はない」

叫ぶ進ノ介に対してチエイスは淡々と答える。

「さて、お前達がこいつらを倒せたのなら色々と話してやろう」

「高みの見物か！」

激昂して飛び出す風鳴翼。

弾丸のように飛び出しながらアームドギアの刃を振るおうとした。

「ブン」

横から緑色の影が乱入する。

突然の不意打ちに対応できず、翼は近くの廃墟まで吹き飛ばす。

「……師匠!？」

翼を襲撃したのはキックホッパー。

変身を解除して現れるのは矢車想。

驚く響を他所に、矢車は指をさす。

その相手は東郷ジン。

「お前の相手は俺だ」

「……そうか」

頷いて前に出るジン。

ジンは思い出したように懐からデルタギアを取り出す。

「小日向」

ぽいっと未来へデルタギアを投げる。

慌てて彼女はデルタギアを受け取った。

「これ……」

「木場が来たら渡してくれ。アイツに使えといえればわかるから」

「東郷さん!？」

「アイツとは一対一で話がある。クリス、響、他は任せていいか？」

「問題ない」

「上等！」

シンフォギアのペンダントとベルトを取り出すクリスと響。

「ベルトさん、俺達はアイツを」

「覚悟を決めたか、進ノ介、行こう！」

それぞれが戦うための準備を始める。

「お、おい！ジン！何をするつもりだよ！」

状況を飲み込めず呆然としていた真司は慌ててジンの肩を掴む。

「城戸、小日向を連れて、安全なところへ避難してくれ。おそらく、

どっかに旦那や二課のスタッフがいるはずだ」

「旦那？二課？一体、何の話だよ！」

「黙っていて、すまない。だが」

ジンは悲しそうな目で真司をみる。

「お前には知らないでいてほしかったよ」
飛来するダークカブトゼクターを掴んで歩き出す。

「悪いが、お前を潰す」

「そうか」

対峙する矢車とジン。

敵対するという宣言にジンは頷くのみ。

「聞かないのか？裏切るのかと」

「裏切るも何も、お前はただの居候のようなもので、探偵社にはつきりと入るといっていないぞ」

「そうだったな、ああ、地獄を歩んでいる俺が忘れるほど、あそこは居心地がよかった」

「それは良かった。探偵社は家だとアイツは言っていた」

ぐるぐるとその場を回るように歩きながら会話をする二人。

「家か」

矢車は笑う。

これから戦うというのに殺意も敵意もない。

「お前を倒す」

「お前を止める」

ダークカブトゼクターとホッパーゼクターがぶつかりあいながらそれぞれの適合者の下へ向かう。

互いにゼクターを掴んで二人は起動の言葉を告げる。

「変身」

【チェンジ！ビートル！】

【チェンジ！キックホッパー！】

ヒビイロノカネの鎧をまとうと同時にパンチとキックがさく裂して、衝撃波が周囲に広がる。

衝撃に真司達は飛ばされそうになった。

「ここは危険です！こちらへ！」

「ああもう！一体、何が起こっているんだよ！」

緒川が先導する。

ベルトを抱えて走る未来。

頭を抱えたい気持ちにかられながらも真司は後を追いかける。

響は彼らが離れたことを確認してパンチホッパーに変身した。

「おや、シンフォギアを纏わないのですか？」

井坂深九郎は首を傾げた。

「ノイズをぶっ潰すのに有効かもしれないけれど、アンタは異常なくらい頑丈……だったら」

体をほぐすような動きをしながらパンチホッパーは静かに告げる。

「こっちの姿の方が何発でも撃てるし、アンタを確実に壊せる」

「壊せる……ですか、いいですねえ、私もそろそろ貴方を解剖したくてウズウズしていたのですよお」

【ウェザー】

ウェザーメモリを起動して体に差し込み、ウェザードーパントへ変身する。

「あら、貴方の相手はお前？」

「だったらなんだ？」

メデューサとクリスは向かい合う。

クリスは胸元のペンダントを握り締める。

「可愛い女はすりつぶしてあげる。フィーネの邪魔はさせない」

「ハッ！お前みたいなおぞましい奴に好かれるなんてフィーネも大変だな」

「うるさいな、お前」

「こつちを見下しているんだ。安い挑発にのるなら」

ニヤリとシンフォギアを纏ったクリスはガトリング砲の砲口を向ける。

「ハチの巣だけじゃすまねえぜ！」

「クソッ！ノイズがうじゃうじゃいるじゃないか！」

城戸真司は小日向未来の手を引きながら緒川の後を追いかける。

振り返りながら緒川が拳銃やクナイを投擲しているがノイズに効果はない。

「どこかに」

「緒川さん！」

未来の叫びに瓦礫の向こうから飛来するノイズに気付かなかった。弾丸のように突撃してくるノイズ。

緒川に躲す手段はない。

「フーン！」

上空から疾走形態のホースオルフェノクが落下と同時に後ろ脚で地面を抉る。

大量の瓦礫がノイズへ直撃、炭化した。

「小日向さん！」

「木場さん！」

ホースオルフェノクから人の姿へ戻った木場勇治は未来へ駆け寄って来る。

未来は木場の姿を見て安堵の表情を浮かべた。

「え、木場？」

「城戸君……」

真司は信じられないという表情で木場をみている。

オルフェノクであるということを知られた木場は動揺しつつ、未来へ尋ねた。

「東郷君達は？」

「戦っています……これを東郷さんから、木場さんへ渡してくれって」
未来は腕に抱えていたデルタギアを木場へ差し出す。

「ありがとうございます」

「木場さん、すいません。二課に繋がる入口まで案内してもらえますか？」

「二課の？」

「はい、フィーネがここを襲撃したという事は狙いがあると思います」
「それって、デュランダル？」

「おそらく……二課のメンバーが、司令がどうなったかわかりません

が、もしかしたらまだ」

その時、至る所からノイズが現れる。

身構える緒川を制して木場がデルタギアを装着した。

「こいつらは僕が蹴散らします。下がっていて」

銀色の輝きと共に木場はデルタへ変身してフォンブラスターを用いてノイズを一掃する。

「行こう」

「木場……」

振り返らずに先を行くデルタの姿に真司は苦悶の表情を浮かべていた。

「本当に頑丈だな」

パンチホッパーは攻撃の手を緩めない。

飛来する雷撃や放たれる竜巻を躲しながら何度もパンチを叩き込む。

しかし、ウエザードーパントは致命傷を受けた様子がない。

「どうしました？私はまだ一步も動いていませんよ？」

「チッ」

舌打ちをしながら何度繰り出したかわからない拳をぶつける。

シンフォギアのガングニールの拳でもすぐに壊せるかわからない。

ウエザードーパントは酷く頑丈。

そのことが響をより苛立たせていた。

「その程度かなあ？」

「黙れ、お前は必ず潰す」

「無駄なことだ。それに」

ちらりとウエザーが視線を向けた直後、体が鉛のように重たくなる。

「これは……」

「重加速現象というそうですよお？その状態でどこまで」

【クロックアップ】

「ふう、これで動ける」

「成程お、そういう力がありましたね、興味深い！」

ウエザーは笑いながら拳を振るう。

パンチホツパーは拳をいなしながらさらに攻撃を入れていく。

「しかし、これはこれで困りますねえ」

ちらりと遠くをみると魔進チエイサーによって放たれた重加速によってメデューサやクリスは動きが鈍っていた。

ドライブはタイプフォーミュラになってチエイサーと戦っている。

「さてさて」

「余所見、すんな！」

「聞かないのか？俺があの子に加担する理由を」

「なんとなく予想がつくよ、影山だろ」

「ダークカブトの言葉にキックホッパーは舌打ちする。

「お前のそういうなんでも詳しいところかというところが嫌いなんだよ」

「高速空間の中で両者は拳をぶつけ合う。

「フイーネが言ったか？ 私に加担すればお前の大事な存在を取り戻してやると」

「だったらなんだ！」

「これは受け売りなんだが」

「振るわれる蹴りを躲しながらダークカブトは距離を詰めていく。

同時にベルトのボタンを押す。

「失った人を蘇らせようと考えるよりも、その人との思い出を大事にして毎日を生きる方がいいと」

「ふぎけるな」

【ライダーキック】

「お前に何がわかる！俺は相棒を殺した！殺すしかなかった俺に相棒との日々を思い出す資格などない！」

【ライダーキック】

「タキオン粒子のエネルギーを集めたキックがぶつかりあう。

「本当にそうか!?俺はそうは思わない！お前は影山と一緒に生きてきた。そんなお前以外に誰が影山のことを覚えていてやれる？お前だけだろ！」

「黙れ！お前がいうのか!?お前は」

「互いの必殺技がぶつかりあう。

「大きな爆発と衝撃が周囲に広がる。

「しばらくして、地面に大の字で倒れる矢車の姿がそこにあった。

「笑えよ、願いを叶えることができない無様な俺を」

「誰が笑うかよ」

「大きなダメージを受けていたダークカブトの鎧が解除される。

「肩を抑えながらジンは首を振った。

「俺だって、生き返るなら生き返ってほしいと失った時は思った。だけど……」

横からクリスの放ったミサイルとガトリングの嵐がイリスへ襲い掛かる。

「うわあ、オリジナルまでできたの？あれ？メデューサは？」

「任せてきた」

「え？」

「くそつ、何なんだ、お前は」

「指輪の魔法使いつて奴だ！覚えておけ！」

「追跡！撲滅！いずれもマツハ！仮面ライダーマツハア！」

メデューサはクリスと入れ替わるように現れた金色のビースト、白色のマツハとの交戦に圧され始めていた。

いきなりの乱入に戸惑いながらもメデューサは自らの武器で応戦しようとする。

ビーストとマツハの即席コンビは己の武器を使いながらメデューサを追い詰めていく。

「ぐう！こんなところで、この私が終わってなるものかあああ！」

「悪いけど、お前みたいな雑魚を相手している時間はないの！」

「こつちだつてみさえさんの後を追いかけないといけないんだ。さつさと俺に食われる！」

【ハイパー！ゴー！】

【マツハ！デッドヒート！】

青い魔法衣、ビーストキマイラの頭部に似た形状の鎧のビーストハイパー。

ドライブとどこか似ている姿のマツハデッドヒート。

二人は同時に必殺技を放つ。

逃げる暇もないまま、攻撃の渦に飲み込まれてメデューサの体が崩壊していく。

「ああ、フィーネ、様」

最後に敬愛する主の名前を呟きながらメデューサは消滅した。

「ごつつあんですー！」

「うしー！」

二人がそれぞれ武器を下す。

「つて、そっち誰だ？」

「みなまで言うなって！お前も仮面ライダーなんだろう？だったら助け合いは大事だ」

尋ねるマツハにビーストはいつものペースで会話をする。

「駄目だ、こりや……てか、進兄さんの手伝いでやってきたものの……
とんでもない事態になっているみたいだなあ」

マツハが呟いた直後、地震が起こる。

「なんだ!？」

「おい、あれ!」

ビーストが驚く中、マツハがある場所を指さす。

倒壊したりディアン学院の場所から伸びて来る巨大な塔。

塔は不気味な光を放っている。

二人は本能的にあれがよくないものだということを理解した。

飛来する弾丸を躲しながらイリスはため息を吐く。

「その様子だとあの蛇女はやられたみたいだねえ、ま、あてにしていな
かったからいいけどさあ」

ため息を吐きながらイリスはオーズドライバーを装着する。

「お前だけは赦さない、お前だけは私の手で」

——壊す。

パンチホッパーが力を込めた時。

「待てよ」

瓦礫を蹴散らしてふらふらとジンが現れる。

「ジン!？」

驚く響達。

「あれえ、あれで死ななかつたの？ 確実につぶしたはずなのに」

不思議そうにみるイリス。

ジンは額から流れていた血を拭うと冷めた目でイリスをみていた。

「響、悪いが、ソイツは俺の獲物だ。お前達はフィーネを潰してくれ」

「ジン、けど！ お前！」

「わかった」

クリスは渋るが、響は了承する。

「すぐ来るんだよね？」

「当然だ、フィーネの奴に一発与えないと気が済まない」

「わかった、先に行くから必ずきてね」

「わかっている」

響はそういうと走り出す。

クリスは二人のやり取りを見て、顔を歪めつつ。

「すぐに来いよ！ 来なきや、アタシが全滅させるからなあ！」

「わかったよ」

手を振りながらクリスが離れるのを待つ。

「その顔、嬉しいなあ、ようやく本気を出してくれるんだね？ 愛しい人」

「……悪いけどさ」

ジンは体をほぐしながら無表情でイリスをみた。

「手加減はしない。全力で叩き潰す」

ダークカブトゼクターを掴んでジンはベルトへ装着する。

【Henshin】

銀に輝くヒビイロノカネの鎧を纏う。

専用武器、カブトクナイガンを構えてゆつくりと歩き出す。

「ああ、楽しみだ、楽しみだ！楽しみだ！楽しませて！」

【タカ！トラ！バツタ！】

オーズに変身してトラクローを展開して接近する。

振るわれる刃をいなして腹部にダークカブトの拳がめり込む。

「愛している！」

トラクローがダークカブトの肩を掠める。

焦げるような臭いが漂いながらも距離を詰めてダークカブトは近

距離でカブトクナイガンをガンモードにして撃つ。

「愛している！愛している！愛している愛している！」

光弾を浴びながらも平然としているオーズの姿にダークカブトは

ため息を漏らしながら近距離で刃を振りおろす。

「ひいいはははああああああああああああ愛してい

るううううううう！」

「面倒だな、本当に」

ため息を零しながらダークカブトは攻撃の手を緩めない。

「どこへいくつもりですかあ？」

フィーネのところへ向かおうとした響達の前にウエザーが現れる。

「お前に構っている暇はない」

「そんなつれない態度を取らないでくださいよ。こっちはそちらを解剖したくて」

「おい」

コツンとウエザーの肩に石が当たる。

「矢車師匠！」

ウエザーへ石を投げたのはジンに敗北した矢車想だった。

「おやおやあ？敗北者のゴミムシ君が何の用事ですかあ？」

「お前え、今、俺のことを笑ったか？」

「ええ、笑いましたよ？仲間を裏切り、敗北して、今度はこちらの邪魔をしてくる。ただ流されているだけのゴミムシ君」

苛立ちを隠さない矢車へ挑発するウエザー。

「そうか」

飛来してきたホツパーゼクターを掴んで矢車はキックホツパーに変身する。

「お前は叩き潰す理由が出来た。お前に地獄を見せてやろう」

「貴方程度が語る地獄のぬるま湯など興味はありませんよ」

鼻で笑うウエザードーパントだが、気付いた時には体が宙に舞っていた。

「あ？」

ウエザーが事態を理解した時は瓦礫に体を打ち付けた時だ。

「どうした？ぬるま湯なんだろう？呆けた顔をしているぞ」

キックホツパーの挑発にウエザーはゆっくりと起き上がる。

「あまり図にのらないことです。貴方等、すぐに黒焦げ——」

瞬時に接近したキックホツパーの蹴りがウエザーの顔面にめり込んだ。

彼のいた場所に小さなクレーターができる。

「すげえ……」

「全くみえなかった」

「流石、師匠だ」

「何をやっているんだ？早くファイネを潰しに行け」

キックホツパーは振り返らずに呆然としていた三人へ告げる。

「早くしないと、アイツが全て終わらせるぞ？」

「師匠！任せた！」

響はそういつて駆け出す。

彼女達の姿が完全に見えなくなつてから足蹴にしているウエザーに視線を向けた。

「さて、あいつらにこれを見せるわけにいかないからな」

「ぐつ、貴様あ」

「お前に見せてやるよ。地獄をさあ」

【ライダージャンプ】

【ライダーキック】

同じ動作を繰り返して次々とウエザーに攻撃を繰り返していく。

一撃。

二撃。

三撃。

四撃。

その回数が二桁を超えたあたりになつてキックホッパーは動作を止める。

「う、ぐうう、貴様……これだけの力を持つて——」

「頑丈だな。まあいい、これで終わらせる」

【ライダージャンプ】

【ライダーキック】

【ライダーキック】

ウエザーが雷撃や氷の塊を咄嗟に作つてキックホッパーへ投擲する。

攻撃を受けながらもキックホッパーは止まらない。

タキオン粒子のエネルギーを纏つたキックがウエザードーパントを貫く。

「貴方あ、死ぬのが怖くないのですかあ」

「くだらない」

震えながら問いかけるウエザードーパントにキックドーパントは無感情で答える。

「面白い、ああ、面白い。貴方がどんな最期を迎えるのか、あの世とやらでみさせてもらいますよおー！」

笑いながらウエザードーパントの体は灰になって消えていく。
キツクホツパーはそのまま瓦礫の上から降りて、歩き出す。
ヒヒイロノカネの鎧が解除されて、一瞬、バランスを崩しそうにな
りながらも矢車は去っていった。